

一般県道福頼市山伯耆大山(T)線地方特定道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡会見町

御内谷遺跡群

金田堂ノ脇遺跡

御内谷向田遺跡

御内谷妙見塔遺跡

御内谷第2遺跡

御内谷下々ヶ市遺跡

御内谷槇塔遺跡

御内谷法城遺跡

御内谷ガシン畑遺跡

1 9 9 8

財団法人 鳥取県教育文化財団

正誤表

鳥取県教育文化財団調査報告書 58

『御内谷遺跡群』

頁	誤	正
挿図目次	挿図108 後円部墳丘上遺物出土状況図	挿図108 後円部遺物出土状況図
挿図目次	挿図109 後円部墳丘上出土遺物実測図	挿図109 後円部出土遺物実測図
P26	Po6 「形態上の特徴」欄	
	の 中央に焼成後穿孔する。	の足をもつ。底部中央に焼成後穿孔する。
P83 追加	挿図101・102の黒丸数字は挿図100の赤丸数字に対応する	
P96	挿図122 SB-01出土遺物実測図	挿図122 SB-01遺物実測図

一般県道福瀬市山伯耆大山(T)線地方特定道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡会見町

御内谷遺跡群

金田堂ノ脇遺跡

御内谷向田遺跡

御内谷妙見塔遺跡

御内谷第2遺跡

御内谷下々ヶ市遺跡

御内谷槇塔遺跡

御内谷法城遺跡

御内谷ガシン畑遺跡

1 9 9 8

財団法人 鳥取県教育文化財団



金田堂ノ脇遺跡 SX-01出土土器

序

鳥取県中・西部はかつての伯耆国です。伯耆国を代表する山である大山は、中国地方屈指の秀峰でありその美しさから伯耆富士と呼ばれますが、古くから仏教の霊場となり中世には多くの僧兵を抱えて勢力を誇った大山寺が存在するように歴史的にも伯耆国を語るに欠くことの出来ない山です。この大山の西側に位置する会見町は、四季折々の美しい景観を眺望することのできる自然豊かな地域であり、近年、このような自然環境が注目され「鳥取県全県公園化構想」のもと、会見町、岸本町、溝口町の3町にまたがる越敷野地区に県立フラワerparkが建設されており、さらなる発展が見込まれております。さらに、この地域は古くから遺跡の宝庫としても知られており、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が多数見つかった越敷山遺跡群、西伯耆最大の前方後円墳である三崎殿山古墳、三角縁神獣鏡が出土した普段寺1・2号墳、人物埴輪の出土した後谷山古墳など古代の人々の生活や当時の活発な交流を物語る貴重な遺跡・遺物が数多く存在しております。

当財団では、平成9年度に鳥取県の委託を受け、一般県道福頼市山伯耆大山停車場線の整備工事に伴って失われる遺跡を記録保存するために発掘調査を実施しました。

発掘調査では、土器類などの遺物や、住居跡や土坑さらに前方後円墳などの遺構が見つかりました。特に金田堂ノ脇遺跡で見つかった中世墓からは中国製の青磁などが出土し、当時の埋葬方法を考える上で貴重な資料となりました。

本書は、この発掘調査の成果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめたものです。本書の「記録」が、文化財に対する認識と理解を深める一助となり、教育及び学術研究のために広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝すると共に、厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月

財団法人鳥取県教育文化財団
理事長 田 淵 康 允

例 言

1. 本報告書は、一般県道福領市山伯者大山（T）線地方特定道路整備工事に伴い、平成9（1997）年度に調査を実施した西伯郡会見町金田、御内谷地内に所在する金田堂ノ脇遺跡、御内谷向口遺跡、御内谷妙見塔遺跡、御内谷第2遺跡、御内谷下々々市遺跡、御内谷楓塔遺跡、御内谷法城遺跡、御内谷ガシム煙遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。

遺跡の所在地は下記の通りである。

金田堂ノ脇遺跡：西伯郡会見町金田字大見堂1042-1

御内谷向口遺跡：西伯郡会見町御内谷字向口1419

御内谷妙見塔遺跡：西伯郡会見町御内谷字妙見塔66

御内谷第2遺跡：西伯郡会見町御内谷字楓塔91

御内谷下々々市遺跡：西伯郡会見町御内谷字下々々市162

御内谷楓塔遺跡：西伯郡会見町御内谷字楓塔183

御内谷法城遺跡：西伯郡会見町御内谷字法城320

御内谷ガシム煙遺跡：西伯郡会見町御内谷字ガシム煙334

8遺跡は近接しており、北緯35度20分10秒、東経133度22分30秒付近に位置する。

2. 調査地には、国土座標第V系に対応する10m単位のグリッドを設定し、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で図示しグリッド名とした。方位は国土座標第V系に基づく座標北であり、レベルは海拔標高を表す。なお、岡七座標およびグリッド名については各遺跡の全体遺構図に記載した。
3. 本報告書に掲載の周辺遺跡分布図には国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」（平成7年修正版）および「根柵」（平成2年修正版）を使用した。
4. 本報告書の作成は調査員の討議に基づく。本文は調査員が分担して執筆し、日次に執筆者を記載した。なお、編集は西川が行った。

遺構図の浄写・遺物の実測並びに浄写は埋蔵文化財センター及び西部埋蔵文化財会見調査事務所で行った。

遺構・遺物写真は調査員が撮影した。

5. 遺構実測は調査員が行ったが、各遺跡の調査前地形測量および御内谷楓塔遺跡の調査後地形測量は業者に委託した。
6. 空中写真は、業者に委託してラジコンヘリコプターで撮影したものである。
7. 出土した石製品の石材鑑定を鳥取大学名誉教授赤木三郎氏にお願いし、御教示をいただいた。
8. 金田堂ノ脇遺跡のSX-01で出土した鉄製品のX線撮影を米川医院院長の米川正夫氏のご厚意で実施していただいた。
9. 出土遺物・図面・写真等は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。
10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々にご指導・協力を頂いた。（五十音順、敬称略）
新井 宏則 池田 敏宏 石田 成年 五十川 伸矢 亀田 修一 守岡 正司 藤澤 良祐
村上 勇 会見町教育委員会 大阪府文化財調査研究センター 柏原市教育委員会 京都府埋蔵文化財調査研究センター 倉吉市教育委員会 鳥取県埋蔵文化財調査センター 三木市教育委員会

凡 例

1. 出土遺物にネーミングした遺跡名は下記の略称を用いた。

金田堂ノ脇遺跡：ドウノ 御内谷向田遺跡 御内谷妙見谷遺跡：ミョウケ
 御内谷第2遺跡：ミ内2 御内谷下々々市遺跡：下々ガ 御内谷楨裕遺跡 マキサコ
 御内谷法滅遺跡：法ジョウ 御内谷ガシン畑遺跡：ガシン

2. 本報告書における遺構記号は下記のように表す。

SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝状遺構
 SS：段状遺構 SC：道状遺構 SX：土墳墓・不明遺構
 P：柱穴・ピット

3. 本報告書における遺物記号は下記のように表す。

Po：土器・土製品 S：石製品 F：鉄製品 C：銅製品

4. 遺構図中における表示は下記のように表す。

●：土器・土製品 ▲：石製品 ■：鉄製品

5. 遺物実測図では須恵器が断面黒塗り、瓦質土器は断面網掛け、それ以外は断面白抜きとした。なお、実測図中における記号は次の通りとする。 ←：ケズリの方向（砂粒の動き） |-----|：擦り範囲

6. 遺物観察表における法量の欄の番号は下記の通りとする。なお、数値の前についた※は復元値、△は残存値であることを表す。

①口径 ②器高 ③底部径 ④脚径・高台径 ⑤最大長 ⑥最大幅 ⑦最大厚

7. 遺物観察表の備考欄に記載した「山崎-1」等の番号は実測者番号である。実測者番号はテープに記したものを実測個体ごとに貼り付けるとともに実測原因にも記載した。

8. 発掘調査時における遺構番号と本報告書における遺構番号は基本的には一致するが、下記のものの変更したものである。

挿表1 遺構番号対照表

〈金田堂ノ脇遺跡〉		〈御内谷向田遺跡〉		〈御内谷下々々市遺跡〉	
旧	新	旧	新	旧	新
SK-02	SX-01	2区SK-02	SK-05	P-24・28	SB-01
SK-06	SK-02	2区P-1	P-2	・31・32	
SK-08	SK-04			・33・34	
SK-10	SK-05	〈御内谷下々々市遺跡〉		・35	
SK-11	SK-06	旧	新		
SK-12	SK-07	P-36	P-32		
SK-13	SK-08				
SS-02	SD-03				
SD-03	SD-04				

目次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯	(西川)	
第1節 発掘調査に至る経緯	1	
第2節 調査の経過と方法	1	
第3節 調査体制	4	
第2章 位置と環境	(高尾)	
第1節 地理的環境	5	
第2節 歴史的環境	6	
第3章 金田堂ノ脇遺跡の調査	(西川・高尾)	
第1節 竪穴住居跡	10	
第2節 土坑・土墳墓	10	
第3節 溝状遺構	18	
第4節 段状遺構	20	
第5節 集石	22	
第6節 ビット	22	
第7節 遺構外の遺物	22	
第4章 御内谷向田遺跡の調査	(高尾)	
第1節 土坑	31	
第2節 溝状遺構	34	
第3節 道状遺構	35	
第4節 ビット	35	
第5節 遺構外の遺物	35	
第5章 御内谷紗見谷遺跡の調査	(西川)	
第1節 土坑・土墳墓	43	
第2節 溝状遺構	49	
第3節 遺構外の遺物	49	
第6章 御内谷第2遺跡の調査	(西川)	
第1節 竪穴住居跡	54	
第2節 土坑	57	
第3節 ビット	57	
第4節 遺構外の遺物	58	

第7章 御内谷下々ヶ市遺跡の調査	(西川)	
第1節 段状遺構	64	
第2節 ビット	64	
第3節 遺構外の遺物	65	
第8章 御内谷櫃谷遺跡の調査	(高尾)	
第1節 土坑	70	
第2節 溝状遺構	72	
第3節 段状遺構	72	
第4節 遺構外の遺物	75	
第5節 まとめ	75	
第9章 御内谷法城遺跡の調査	(西川)	
第1節 法城古墳	80	
第2節 土坑・土墳墓	89	
第3節 遺構外の遺物	90	
第10章 御内谷ガン畑遺跡の調査	(高尾)	
第1面の調査		
第1節 掘立柱建物跡	95	
第2節 溝状遺構	96	
第3節 ビット	98	
第4節 遺構外の遺物	98	
第2面の調査		
第5節 掘立柱建物跡	101	
第6節 土坑	102	
第7節 段状遺構	108	
第8節 ビット	110	
第9節 まとめ	110	
第11章 考察		
金田堂ノ脇遺跡SX-0-1をめぐる諸問題	115	(高尾)
御内谷遺跡群出土鉄律の金属学的研究	118	(ジオサイエンス株式会社)

插图 目 次

插图1 調查位置図	3	插图37 SK-02 遺構図	32
插图2 遺跡位置図	5	插图38 SK-03 遺物実測図	32
插图3 周辺遺跡分布図	8	插图39 SK-04 遺物実測図	32
		插图40 SK-03・04 遺構図	33
金田堂ノ脇遺跡		插图41 SK-05 遺構図	34
插图4 調査前地形測量図	9	插图42 SD-01 遺構図	34
插图5 全体遺構図	9	插图43 SD-02 遺構図	34
插图6 調査地土層図	10	插图44 SC-01 遺構概念図	36
插图7 SI-01 遺構図	10	插图45 SC-01 遺構図	36
插图8 SK-01 遺構図	10	插图46 SC-01 遺物実測図	36
插图9 SK-02 遺構図	11	插图47 遺構外出土遺物実測図(1)	37
插图10 SK-02 遺物実測図	11	插图48 遺構外出土遺物実測図(2)	38
插图11 SK-03 遺構図	12		
插图12 SK-04 遺構図	12	御内谷妙見塔遺跡	
插图13 SK-05 遺構図	13	插图49 調査前地形測量図	42
插图14 SK-06 遺構図	13	插图50 全体遺構図	42
插图15 SK-06 遺物実測図	13	插图51 調査地土層図	43
插图16 SK-07 遺構図	14	插图52 SX-01 遺構図	43
插图17 SK-07 遺物実測図	14	插图53 SX-02 遺構図	44
插图18 SK-08 遺構図	14	插图54 SX-03 遺構図	44
插图19 SX-01 遺構図	15	插图55 SX-04 遺構図	45
插图20 SX-01 遺物実測図(1)	15	插图56 SX-04 遺物実測図	45
插图21 SX-01 遺物実測図(2)	16	插图57 SX-05 遺構図	46
插图22 SX-01 遺物実測図(3)	17	插图58 SX-06 遺構図	46
插图23 SD-01・02 遺構図	18	插图59 SX-07 遺構図	46
插图24 SD-03 遺構図	19	插图60 SX-08・09・10、SK-03 遺構図	47
插图25 SD-04 遺構図	19	插图61 SX-11 遺構図	48
插图26 SD-04 遺物実測図	19	插图62 SK-01 遺構図	48
插图27 SS-01 遺物実測図	20	插图63 SK-02 遺構図	48
插图28 SS-01 遺構図	21	插图64 SD-01 遺構図	49
插图29 集石1 遺構図	22	插图65 遺構外遺物出土状況図(1)	50
插图30 集石2 遺構図	22	插图66 遺構外遺物出土状況図(2)	50
插图31 遺構外出土遺物実測図(1)	23	插图67 遺構外遺物出土状況図(3)	51
插图32 遺構外出土遺物実測図(2)	24	插图68 遺構外出土遺物実測図	51
御内谷向田遺跡		御内谷第2遺跡	
插图33 調査前地形測量図	30	插图69 調査前地形測量図	53
插图34 全体遺構図	30	插图70 全体遺構図	53
插图35 調査地土層図	31	插图71 SI-01・02 遺構図	55
插图36 SK-01 遺構図	31	插图72 SI-01 遺物実測図	56

挿図73	SI-02 遺物実測図	57	挿図109	後門部墳丘上出土遺物実測図	87
挿図74	SK-01 遺構図	57	挿図110	前方部遺物出土状況図	87
挿図75	遺構外出土遺物実測図	58	挿図111	前方部出土遺物実測図	87
御内谷下々々市遺跡					
挿図76	調査前地形測量図	62	挿図112	墳丘除去後測量図	88
挿図77	全体遺構図	62	挿図113	くびれ部墳丘下遺物出土状況図	89
挿図78	SS-01・02 遺構図	63	挿図114	くびれ部墳丘下出土遺物実測図	89
挿図79	調査地土層図	64	挿図115	墳丘下出土遺物実測図	89
挿図80	SS-01 遺物実測図	64	挿図116	SK-01 遺構図	90
挿図81	SS-02 遺物実測図	64	挿図117	SX-01 遺構図	90
挿図82	P-32 遺物実測図	64	挿図118	遺構外出土遺物実測図	90
挿図83	遺構外出土遺物実測図	65	御内谷ガシン畑遺跡		
挿図84	甕形七製品出土状況図	66	挿図119	調査前地形測量図	93
御内谷楯谷遺跡					
挿図85	調査前地形測量図	69	挿図120	第1面全体遺構図	94
挿図86	全体遺構図	69	挿図121	SB-01 遺構図	95
挿図87	SK-01 遺構図	70	挿図122	SB-01 遺物実測図	96
挿図88	SK-02 遺構図	70	挿図123	SD-01・02 遺構図	97
挿図89	SK-03 遺構図	70	挿図124	SD-03 遺構図	98
挿図90	SS-01、SD-01 遺構図(1)	71	挿図125	遺構外出土遺物実測図	99
挿図91	SS-01、SD-01 遺構図(2)	72	挿図126	第2面全体遺構図	100
挿図92	SS-01 遺物出土状況図(1)	73	挿図127	SB-02 遺構図	101
挿図93	SS-01 遺物出土状況図(2)	73	挿図128	SK-01 遺構図	102
挿図94	SS-01 遺物実測図	74	挿図129	SK-02 遺構図	102
挿図95	遺構外出土遺物実測図	75	挿図130	SK-03 遺構図	103
御内谷法城遺跡					
挿図96	調査前地形測量図	79	挿図131	SK-04 遺構図	103
挿図97	全体遺構図	79	挿図132	SK-05 遺構図	104
挿図98	法城古墳検出測量図	80	挿図133	SK-06 遺構図	104
挿図99	法城古墳墳丘測量図	81	挿図134	SK-07 遺構図	104
挿図100	墳丘南北断面図	82	挿図135	SK-08 遺構図	105
挿図101	後門部墳丘東西断面図	83	挿図136	SK-09 遺構図	105
挿図102	前方部墳丘東西断面図	83	挿図137	SK-10 遺構図	106
挿図103	周溝断面図	84	挿図138	SK-11 遺構図	106
挿図104	埋葬主体内遺物出土状況図	84	挿図139	SK-12 遺構図	106
挿図105	埋葬主体位置推定図	85	挿図140	SK-13 遺構図	107
挿図106	第1主体出土遺物実測図	85	挿図141	SK-14 遺構図	107
挿図107	第2主体出土遺物実測図	86	挿図142	SK-15 遺構図	107
挿図108	後門部墳丘上遺物出土状況図	86	挿図143	SK-16 遺構図	108
			挿図144	SS-01 遺構図	109
			挿図145	SS-02・03・04 遺構図	110

挿 表 目 次

挿表1 遺構番号対照表

金田堂ノ脇遺跡

挿表2	竪穴住居跡一覧表	25
挿表3	土坑・土墳墓一覧表	25
挿表4	溝状遺構一覧表	25
挿表5	段状遺構一覧表	25
挿表6	ピット一覧表	25
挿表7	土器・土製品観察表	25
挿表8	石製品観察表	29
挿表9	金属製品観察表	29

御内谷向田遺跡

挿表10	土坑一覧表	38
挿表11	溝状遺構一覧表	38
挿表12	道状遺構一覧表	38
挿表13	ピット一覧表	38
挿表14	土器観察表	38
挿表15	石製品観察表	41

御内谷妙見塚遺跡

挿表16	土坑・土墳墓一覧表	52
挿表17	溝状遺構一覧表	52
挿表18	土器観察表	52
挿表19	石製品観察表	52

御内谷第2遺跡

挿表20	竪穴住居跡一覧表	58
挿表21	土坑一覧表	58
挿表22	ピット一覧表	59
挿表23	土器観察表	59
挿表24	石製品観察表	61

御内谷下々市遺跡

挿表25	段状遺構一覧表	66
挿表26	ピット一覧表	66
挿表27	土器・土製品観察表	67
挿表28	石製品観察表	68

御内谷横塚遺跡

挿表29	土坑一覧表	76
挿表30	溝状遺構一覧表	77
挿表31	段状遺構一覧表	77
挿表32	ピット一覧表	77
挿表33	土器観察表	77

御内谷法城遺跡

挿表34	土坑・土墳墓一覧表	91
挿表35	土器観察表	91
挿表36	石製品観察表	92

御内谷ガシン畑遺跡

挿表37	掘立柱建物跡一覧表	111
挿表38	土坑一覧表	111
挿表39	溝状遺構一覧表	112
挿表40	段状遺構一覧表	112
挿表41	ピット一覧表	112
挿表42	土器観察表	113

図 版 目 次

金田堂ノ脇遺跡

- 図版 1 S I-01完掘状況(西より)
S I-01・S D-03土層断面(北より)
S K-02遺物出土状況(西より)
S K-07遺物出土状況(北より)
S X-01検出状況(南より)
S X-01土層断面(西より)
S X-01環状鉄製品出土状況(西より)
S X-01遺物出土状況(北より)

- 図版 2 S S-01検出状況(北より)
S S-01完掘状況(北より)
S D-01・02完掘状況(南より)
S S-01土層断面(南より)
S D-03土層断面(北より)
集石 1 検出状況(東より)
作業風景(北東より)
調査地全景(西より)

- 図版 3 S K-02出土遺物
S K-07出土遺物
S D-04出土遺物
S S-01出土遺物

- 図版 4 S X-01出土遺物 1

- 図版 5 S X-01出土遺物 2
遺構外出土遺物 1

- 図版 6 S K-06出土遺物
遺構外出土遺物 2

御内谷向田遺跡

- 図版 7 表土剥ぎ後状況(北より)
2区調査地土層断面(西より)
S K-03東西土層断面(南より)
S K-03完掘状況(北より)
S K-04東西土層断面(南より)
S K-04完掘状況(北より)
2区作業風景(北東より)
1区調査地全景(北より)

- 図版 8 S K-03・04出土遺物
S C-01出土遺物
遺構外出土遺物

御内谷妙見塔遺跡

- 図版 9 調査前風景(西より)
調査地全景(北西より)
調査地土層断面〔南半〕(北東より)
調査地土層断面〔北半〕(北東より)
S X-02土層断面(北西より)
S X-04土層断面(北西より)
S X-07土層断面(北西より)
S X-04完掘状況(北西より)

- 図版 10 S X-01完掘状況(南東より)
S X-03完掘状況(南東より)
S X-05完掘状況(北西より)
S X-08・09完掘状況(北西より)
S X-11完掘状況(北西より)
S D-01土層断面(南西より)
土器出土状況 1(北より)
土器出土状況 2(北より)

- 図版 11 遺構外出土遺物

御内谷第 2 遺跡

- 図版 12 S I-01遺物出土状況(南より)
S I-01南北土層断面(北西より)
S I-01壁溝検出状況(西より)
S I-01高杯出土状況(西より)
S I-01完掘状況(北より)
S I-02完掘状況(北より)
S K-01完掘状況(西より)
調査地全景(西より)

- 図版 13 S I-01出土遺物
S I-02出土遺物
遺構外出土遺物

御内谷下々市遺跡

- 図版14 調査前風景（西より）
調査地土層断面（南より）
SS-01・02土層断面1（南より）
SS-01・02土層断面2（南より）
SS-01・02完掘状況（西より）
竈形土製品出土状況（南より）
作業風景（北より）
調査地全景（西より）
- 図版15 SS-01出土遺物
SS-02出土遺物
P32出土遺物
遺構外出土遺物

御内谷換塔遺跡

- 図版16 調査前風景（西より）
SK-01土層断面（南より）
SS-01土層断面1（北より）
SS-01遺物出土状況（西より）
SS-01土層断面2（南より）
SS-01完掘状況（北より）
SD-01土層断面（南より）
調査地全景（北西より）
- 図版17 SS-01出土遺物
遺構外出土遺物

御内谷法城遺跡

- 図版18 調査前風景（南より）
作業風景（南より）
法城古墳調査前状況（南より）
後円部東西土層断面（北より）
後円部南北土層断面〔北側〕（西より）
後円部南北土層断面〔南側〕（西より）
くびれ部南北土層断面（西より）
前方部南北土層断面（西より）
- 図版19 前方部東西土層断面〔西側〕（南より）
前方部東西土層断面〔東側〕（南より）
後円部西側周溝土層断面（北より）
第1主体南北断面（西より）
第2主体南北断面（北西より）
第2主体東西断面（北より）
第1主体遺物出土状況1（西より）
第1主体遺物出土状況2（北より）

- 図版20 前方部土師器出土状況（南より）
前方部須恵器出土状況（南より）
くびれ部墳丘下遺物出土状況（南より）
SK-01完掘状況（北より）
SX-01土層断面（南より）
SX-01完掘状況（西より）
法城古墳（西より）
法城古墳墳丘除去後（南より）
- 図版21 第1主体出土遺物
第2主体出土遺物
- 図版22 後円部上出土遺物
前方部上出土遺物
くびれ部墳丘下出土遺物
墳丘下出土遺物
遺構外出土遺物

御内谷ガシン畑遺跡

- 図版23 調査前風景（北西より）
SB-01完掘状況（西より）
SD-01・02完掘状況（南西より）
SD-03完掘状況（南東より）
SD-01土層断面（南より）
SD-02土層断面（北より）
SD-03土層断面（北西より）
第1面全景（南西より）
- 図版24 SB-02検出状況（西より）
SK-02土層断面（東より）
SK-04完掘状況（南西より）
SK-09完掘状況（南より）
SS-01土層断面（北より）
SS-01完掘状況（西より）
SS-02~04完掘状況（北東より）
第2面全景（北西より）
- 図版25 SB-01P5内出土遺物
遺構外出土遺物

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

鳥取県では住民の生活環境向上のため順次道路改良工事を行っているが、その一環として一般県道福額市山伯善大山停車場線の道路整備工事が継続して実施されてきた。この道路は道幅が狭くカーブが多い上に集落内を通っているため安全面からも道路改良が望まれていたものである。このうち、西伯郡会見町金田、御内谷地域やその周辺には、弥生時代の住居跡が多数見つかった天王原遺跡⁽¹⁾や白鳳期の瓦を焼いたとされる金田瓦窯跡などの遺跡が点在しており、道路工事に先立って予定地内の遺跡・遺構の有無を確認する必要があった。

平成7・8年度に会見町教育委員会によって実施された試掘調査の結果、いくつかのトレンチから竪穴住居跡などの遺構や弥生土器や須恵器などの遺物が出土し、遺跡の存在が確認された⁽²⁾⁽⁴⁾。そこで、工事実施主体である鳥取県土木部道路課は鳥取県教育委員会文化課と協議を行ったうえで、財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査を委託した。調査対象遺跡は金田堂ノ脇遺跡をはじめとする8遺跡9地点（御内谷向田遺跡は道路により調査地が分断）で、西部埋蔵文化財見聞調査事務所が担当した。

第2節 調査の経過と方法

発掘調査は4月から、金田堂ノ脇遺跡、御内谷向田遺跡、御内谷第2遺跡、御内谷妙見塔遺跡、御内谷下々ヶ市遺跡、御内谷榎塔遺跡、御内谷法城遺跡、御内谷ガシノ畑遺跡の順に着手した。

調査においては、各遺跡とも表土剥ぎ終了後、業者委託により国土座標第V系に対応する10mグリッドを設定し、それに基づいて遺構検出、実測を行った。

金田堂ノ脇遺跡の調査は、調査前地形測量を4月3、4日に実施し、4月7日から重機による表土剥ぎを開始し、4月24日から作業員を稼働した。検出した遺構は土坑・土壌墓や溝状遺構などである。調査は、空中撮影による遺構全体写真を9月5日に撮ったのち、調査後地形測量を9月11日に実施して終了した。

御内谷向田遺跡は農道によって2つに分かれているため、南側を1区、北側を2区とした。調査は、調査前地形測量を4月3、4日に実施した後の4月8日から重機による表土剥ぎを開始し、4月14日から作業員を稼働した。検出した遺構は土坑や溝状遺構などである。調査は、調査後地形測量を8月6日に実施して終了した。

御内谷第2遺跡の調査は、調査前地形測量を4月21日に、表土剥ぎを4月23、24日に重機によって実施し、6月3日から作業員を稼働した。調査地は山裾に細長く位置し、西側の道路とは2m近い高低差があるうえ、道路との間にある側溝には農業用水が流れていたため、表土剥ぎ及び排土搬出には困難を伴った。検出した遺構は竪穴住居跡や土坑である。調査は、調査後地形測量を実施したのち空中撮影による遺構全体写真を9月5日に撮って終了した。

御内谷妙見塔遺跡は、谷に向けて延びる尾根先端部に位置する。会見町教育委員会の試掘調査では溝状遺構と赤彩の施された高坏片が見つかり、墳丘墓の可能性も考えられた遺跡である。調査は、調査前地形測量を4月23日に実施し、6月10日から人力による表土剥ぎを開始した。主な遺構は土坑・土壌墓、溝状遺構などである。調査は、調査後地形測量を実施したのち空中撮影による遺構全体写真を9月5日に撮って終了した。

御内谷下々ヶ市遺跡は、調査前には水田に面してテラス状の地形を呈していたため住居跡等の出土が予想された遺跡である。調査は、調査前地形測量を4月23、24日に実施し、6月12日から16日にかけて重機による表土剥ぎを行い、6月17日から作業員の稼働を開始した。表土剥ぎの過程で、調査前に認められたテラス状地形はある時期に植林等のために上寄せをして造成されたものと判明した。主な遺構としては段状遺構がある。調査は、調査後地形測量を実施したのち空中撮影による遺構全体写真を9月5日に撮って終了した。

御内谷榎塔遺跡は急な斜面地であり、調査前には2段の幅の狭いテラス状の地形が認められ、米子市の陰田遺

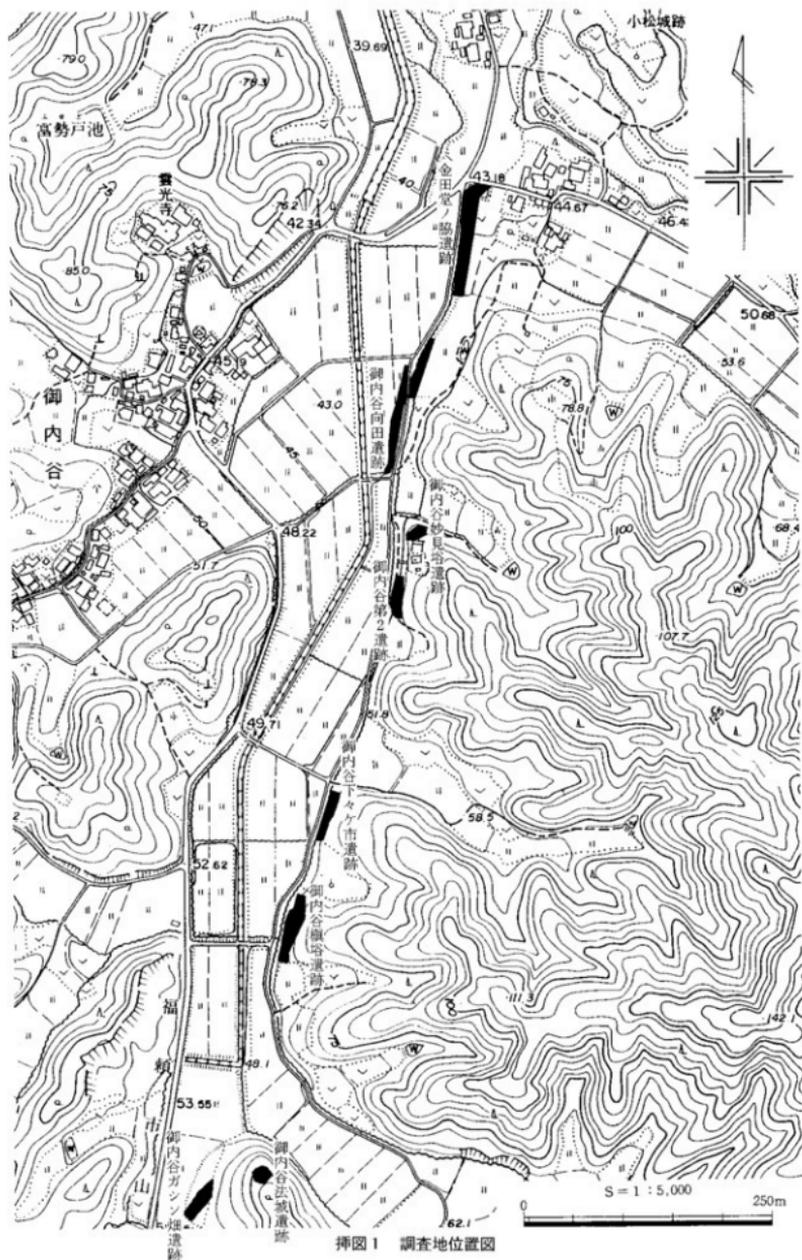
跡群で検出されたようなテラス部の遺構⁽⁸⁾の存在が予想された遺跡である。調査地は御内谷第2遺跡と同じくすぐ西側に道路と農業用水の流れる側溝が存在することから、重機を使用する表土剥ぎは上方から下方に排土を振り下ろしていくことが出来ないためかなりの困難が予想された。調査は調査前地形測量を4月24、25日に実施し、6月16日から25日にかけて重機による表土剥ぎを行い、8月20日から作業員の稼働を開始した。調査前に観察されたテラス状の部分は直接遺構とは関係しなかった。主な遺構としては土師器の出土した段状遺構がある。調査は、急斜面地のため調査後地形測量を業者委託して9月29日に実施し、調査を10月9日に終了した。

御内谷谷城遺跡は、谷に突き出した尾根頂部の平坦面から斜面へと変わる地形変換点部分に位置する遺跡で、調査地の大部分は前方後円墳である法城古墳によって占められる。この古墳は工事予定地に対する事前踏査で新たに確認された古墳である。調査は、調査前地形測量を9月4日に実施し、9月18日から人力による表土剥ぎを開始した。古墳の墳丘検出が完了した11月14日に空中撮影による遺構全体写真を撮り、その後墳丘盛り土の除去を行い墳丘下の調査を行った。後円部の墳丘下には人為的な平坦面が作り出されていたが、明確な遺構は検出出来なかった。調査後地形測量の終了した11月29日で調査を終えた。なお、11月15日に現地説明会を行った。

御内谷ガシノ畑遺跡は御内谷法城遺跡西側の尾根裾部に位置し、水田部より1m程度高く畑地となっていた。会見町教育委員会の試掘調査で鉄滓が出土しており、また、この遺跡周辺には真砂が広く分布しているため砂鉄の入手が比較的容易であるうえに、周辺からは製鉄関連の遺構や遺物が多く見つまっていることからたたら跡の可能性が指摘された遺跡である。調査は調査前地形測量を9月10日に実施し、9月12日から作業員の稼働を開始し土層確認用の側溝を掘った。重機による表土剥ぎを9月19日から29日にかけて実施した。予想していた製鉄関連の遺構は検出できなかったが、調査の過程で検出面の下層にもう1つの遺構面の存在が明らかになり、当初想定していない2面調査となった。そのため、上層(第1面)の調査は10月29日で終了したが、11月4日から7日まで再度重機による掘り下げを実施し、6日から作業員の稼働を再開した。11月14日には掘り下げ途中ではあったが、御内谷法城遺跡の空中撮影にあわせて遺構検出写真を撮った。調査後地形測量の終了した11月29日で調査を終えた。

註

- (1) 『天王原遺跡』会見町教育委員会 1993
- (2) 『会見町誌続編』会見町誌続編編さん企画委員会 1995
- (3) 「第5章 一般県道福頼市山伯香大山(T)線改良工事に伴う発掘調査」
『町内遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1996
- (4) 「第5章 一般県道福頼市山伯香大山(T)線道路改良工事に伴う発掘調査」
『1996年度町内遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1997
- (5) 「陰田第6遺跡」『陰田遺跡群』財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- (6) 『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』鳥取県教育委員会 1984



挿図1 調査地位位置図

第3節 調査体制

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	田 河 康 允 (鳥取県教育委員会教育長)
常務理事	森 田 哲 彦 (鳥取県教育委員会教育次長)
事務局長	岩 本 武 大

財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

所 長	古 井 喜 紀 (鳥取県埋蔵文化財センター所長)
次 長	八 木 谷 昇
調整係長	松 田 潔
調 査 員	亀 井 照 人
	小 谷 修 一
主任事務職員	矢 部 美 恵
事務職員	嶋 村 八 重 子

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財会見調査事務所

所 長	精 山 哲 雄
主任調査員	西 川 徹
調 査 員	高 尾 浩 司

○調査指導 鳥取県教育委員会文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

下記の方々に発掘作業、整理作業に従事ないし何かの協力をいただいた(敬称略、五十音順)

青木 展子	赤井 進	池野 毅	池本 壘	板持 章	伊藤 恵美子
稲田 三枝子	岩田 功	瀬 俊	宇田川 東功子	梅原 和枝	遠藤 清子
遠藤 傳	遠藤 万須美	大塚 幹江	岡田 民江	表 明美	川村 美保子
栗本 静枝	小杉 正明	小林 等子	小原 円	小山 菜穂子	清水 房子
厨子 彰子	大東 教子	高塚 早智子	田宮 繁	地尾 悠二	永江 辨
永江 美枝子	中原 千恵	南條 孝子	西村 美知枝	野崎 悦子	野島 尚子
野津 松夫	畑 さおり	飛田 治	福井 徳子	福田 延子	福田 弥千代
藤江 利夫	古谷 京子	細田 フサ子	松本 敬子	三原 千里	山崎 裕子
山中 孝之	山根 都	山本 清子	山本 久美恵	山本 博子	吉持 和子
米山 麻紀	頼田 つゆ子	頼田 美佐子	渡邊 紗	渡辺 静江	

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳥取県

鳥取県は本州の西部、中国地方北東部に位置し、北は日本海に面し、東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県・広島県と接している。県域は東西126 km、南北61.85 km、総面積3,506.96km²で、総面積の86.3%を山地が占めている。鳥取県は4市32町4村で構成されており、県庁所在地である鳥取市を中心とした東部地域、律令時代に『伯耆国』の国府が置かれていた倉吉市を中心とした中部地域、山陰を代表する商業都市である米子市と国内有数の漁港地である境港市を中心とした西部地域の3つの地域に大きく分けられている。県人口は約62万人で、鳥取市・倉吉市・米子市などの都市部に人口の集中が見られる。県域の大半は山地であるが東部には千代川、中部には天神川、西部には日野川といった一級河川が流れており、それぞれの下流域には鳥取平野、倉吉・羽合・北条平野、米子平野という沖積平野が発達し、生活・産業の場となっている。

会見町

西伯郡会見町は鳥取県の西部に位置し、東を西伯郡岸本町、西を西伯郡西伯町、南を日野郡溝口町、北を米子市と接している。総面積は30.95 km²、人口は約4,100人、世帯数約1,000戸である。会見町は東・西・南の三方を要害山・峰山・滝ヶ谷山・栗津山・高塚山・越敷山などの標高200～300mの低い山地に囲まれている。このため町の総面積の70%は山地で占められている。現在、町の基幹産業は農業で、町南部の山々が上流に位置する小松谷川と同川支流の朝鍋川によって形成された沖積平野は水田として利用されている。また、富有柿の産地としても県内外に知られている。諸木・天万地区には住宅用地が造成されており、米子市近郊の住宅地区としての役割を果たしていくことが期待されている。



挿図2 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

縄文時代

会見町域での最古の資料は、諸木遺跡で発見された有舌尖頭器であろう。これは縄文時代草創期のものと比定されるが、遺構に伴うものではない。早期になると人山山麓を中心に押型文土器を伴う遺跡が幾つかあり、米子市上福万遺跡で土坑・配石墓と考えられる集石が、岸本町林ヶ原遺跡で土坑が確認されている。また林ヶ原遺跡では墓壇に納めた遺体を土器片で覆った中期の墓も発見されている。口朝金遺跡では後・晩期の土器とともに石斧・石鎌が多数出土している。

弥生時代

弥生時代になると遺跡も増えてくる。宮尾遺跡・諸木遺跡・天王原遺跡では前期の環濠が確認されており、注目される。この時期にはすでに会見町内でも微高地を中心に集落が形成されている。同時期の環濠が西伯町の清水谷遺跡でも検出されている。中期になると集落も拡大し始め、宮前遺跡・浅井土居敷遺跡・鶴田合清水遺跡がその代表例として挙げられる。鶴田合清水遺跡では、中期後葉の土器・石器が住居跡から一括して出土しており、中には吉備地方の特徴をもった壺も見られた。後期に入ると丘陵上の台地に大規模な集落が形成される。代表的なものは米子市の青木遺跡、会見・岸本両町に跨がる越殿山遺跡群である。天萬十井前遺跡では弥生時代終末～古墳時代初頭の土器濠が検出された。非常に良好な一括資料で、多数出土した外来系土器と共に当該期の土器の様相を知る上でも貴重な資料であることは間違いない。朝金小千ヤ遺跡の墳丘墓でも供献土器として、田住桶川遺跡の土壌草・木棺墓群でも墓前祭祀用土器として壘入・根敷土器が出土している。

古墳時代

前期古墳としては普段寺1・2号墳がある。普段寺1号墳は墳長約23mの前方後円墳で、正式な調査は行われていないが三角縁唐草文帯二神二獣鏡が出土したことで知られている。また1号墳出土鏡は鳥取県安来市人成古墳・大坂伝鎌足塚古墳出土の鏡と同範鏡である。1辺約21mの方墳である2号墳からも三角縁四神四獣鏡が出土している。中期では、全長約108mを有する山陰地方最大規模の前方後円墳である三崎殿山古墳、尚方作画文帝神獸鏡が出土した浅井11号墳、2個体の人物埴輪が出土した後塔山古墳、家形石棺を直葬した岩舟古墳などが築かれる。後期になると会見町各地に群集墳が形成され、朝金古墳群・井上古墳群・田住古墳群・高原古墳群・金田古墳群・御内谷古墳群がこれに該る。注目されるものとして、寺内8号墳出土の陶棺が挙げられる。

歴史時代

古代律令制下の会見町は伯耆国会見郡に該当する。国会郡衙は、岸本町長者屋敷遺跡で検出された大型の掘立柱建物跡ではないかとその可能性が囁かれているが、鳥取県史では『続日本後記』の記述・条里遺構の名残と思われる小字名等から国会郡成立期には現在の天万に郡衙が置かれていたと推測している。その正確な位置はまだまだ明らかにされていないが、旧山陰道推定ルート1つ（尾高一日下一大寺・天万一出雲国）に隣接する天萬十井前遺跡から墨書の認められる須恵器・丹塗りの土師器・布目瓦等の公的施設存在を窺わせる遺物が出ていることは興味深い。またこの時期の遺跡として岸本町の大寺廃寺が挙げられるが、会見町金田にその瓦を焼いたとされる窯跡がある（金田瓦窯跡）。低丘陵の南斜面の地中をくり抜いて造られた登り窯で、ほぼ完全な姿をとどめる。金田瓦窯跡の南東には両部太郎窯跡があり、9世紀頃の須恵器が出土している。

中世においては居館跡と思われる建物跡が浅井土居敷遺跡・天王原遺跡で確認されている。当地域は出雲と伯耆・備中を結ぶ交通の要衝に位置し、戦略拠点としても重要な地であった。そのため南北朝以後小松城・手間要害などが築かれ、たびたびその争奪をめぐる激しい戦闘が展開された。中世の寺院としては御内谷の雲光寺、手間山の麓にある竜岳山大安寺がある。雲光寺は、明徳年間（1390～1394年）に創建され、後に尼子経久の保護を受けたといわれる。

近世、当地域を含む伯耆国は、中村一忠、加藤貞泰と領主が交代し、元和3年（1617年）池田光政が因幡・伯耆の兩國32万石を領する鳥取城主に転封され、それまで分割支配されていた因伯が一つとなり鳥取藩ができる。

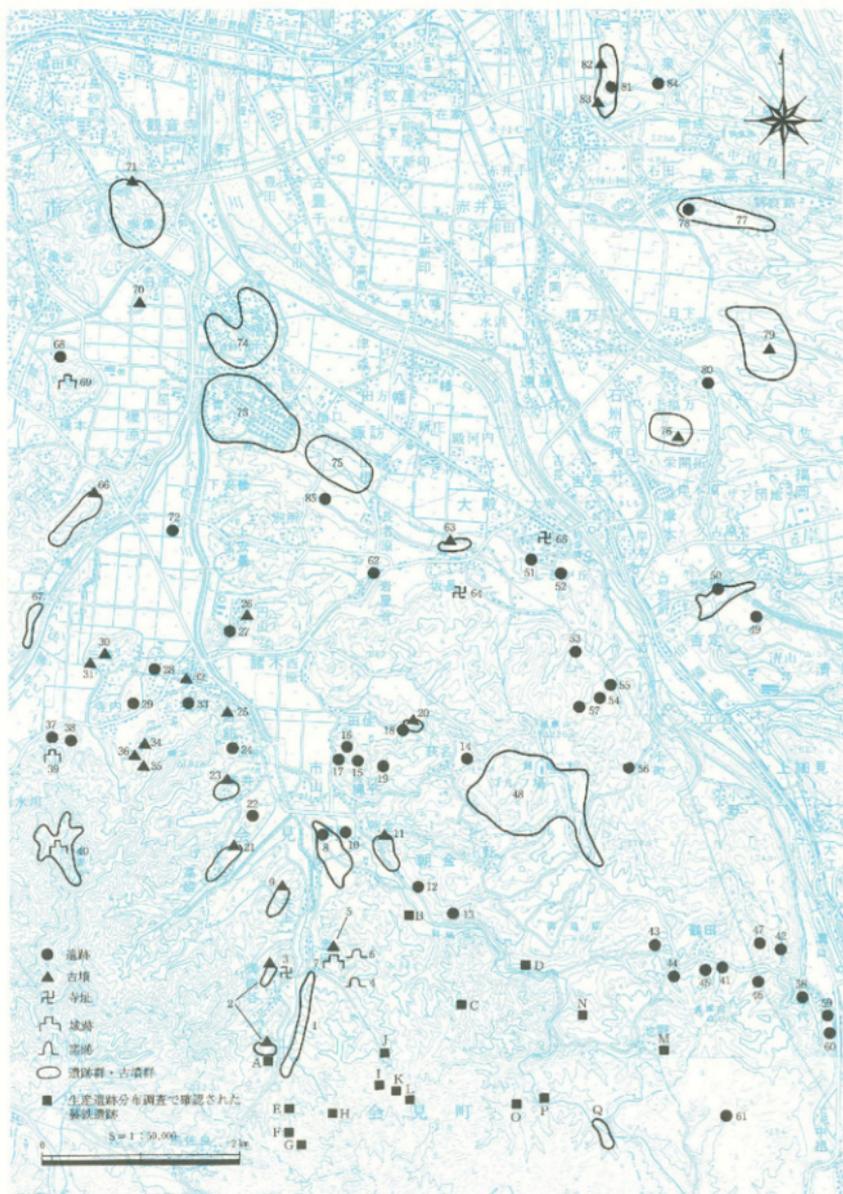
当地域は、藩の直轄領・寺社領を除いた大半が荒尾家の領内に所属した。会見町内には県指定の保護文化財として長者原・佐野川開発事業を手懸けた吉持家住宅が田住地内に残っている。主屋は棟札などから文化年間（1804～1818年）に普請したものとされる。また同じ田住地内にある田住桶川遺跡では21基を数える近世墓が検出されており、これらは18世紀頃の墓と思われる。

時期に関しては不明であるが、会見町南部山地、小松谷川・朝鍋川によって開析された丘陵斜面～裾部には多数のたたら跡が生産遺跡調査によって確認されている。本遺跡群を含む周辺地域の歴史を考える上で注目すべき点であるので付加しておく。

参考文献

- 『会見町誌』 会見町誌編さん企画委員会編 会見町 1973年
 『会見町誌続編』 会見町誌続編編さん企画委員会編 会見町 1995年
 『旧石器・縄文時代の鳥取県』 鳥取県埋蔵文化財センター 1988年
 『日本の古代遺跡9 鳥取県』 野田久男 清水真一編 保育社 1983年
 『鶴田東山遺跡・鶴田合清水遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団 1995年
 『天萬土井前遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団 1997年
 『小町石橋ノ上遺跡 朝金第2遺跡・田住桶川遺跡・田住第8遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団 1997年
 『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』 鳥取県教育委員会 1984年

1 御内谷遺跡群	2 御内谷古墳群	3 雲光寺	4 両部太郎家跡
5 金田古墳群	6 金田瓦窯跡	7 小松城跡	8 天王原遺跡
9 井上古墳群	10 口朝金遺跡	11 朝金古墳群	12 朝金小チャ遺跡
13 朝金大田遺跡	14 获名遺跡	15 朝金第2遺跡	16 田住桶川遺跡
17 田住第8遺跡	18 吉持家住宅	19 田住松尾平遺跡	20 田住古墳群
21 高畑古墳群	22 浅井土居敷遺跡	23 浅井古墳群	24 宮前遺跡
25 宮前古墳群	26 後谷山古墳	27 諸木遺跡	28 宮尾遺跡
29 天萬土井前遺跡	30 三崎殿山古墳	31 岩舟古墳	32 日の岡古墳
33 天万遺跡	34 普段寺1号墳	35 普段寺2号墳	36 寺内8号墳
37 枇杷谷遺跡	38 才の木遺跡	39 膳棚山要害	40 手間要害
41 鶴田荒神ノ峯遺跡	42 鶴田合清水遺跡	43 鶴田墓ノ上遺跡	44 鶴田大道端遺跡
45 鶴田中峯山遺跡	46 鶴田堤ヶ谷遺跡	47 鶴田東山遺跡	48 越敷山遺跡群
49 貝田原遺跡	50 久古第3遺跡	51 坂長宮田ノ上遺跡	52 坂中第5遺跡
53 坂長佛谷遺跡	54 小町越城野原第1遺跡	55 小町越城野原第2遺跡	56 小町第1遺跡
57 小町石橋ノ上遺跡	58 字代寺中遺跡	59 宇代横平遺跡	60 代遺跡
61 三部野遺跡	62 長者屋敷遺跡	63 長者原古墳群	64 坂中庵寺
65 大寺庵寺	66 境古墳群	67 福成早里遺跡	68 奈喜良遺跡
69 橋本要害	70 口原6号墳	71 宗像古墳群	72 大袋丸山遺跡
73 青木遺跡	74 福市遺跡	75 諏訪遺跡群	76 石州府古墳群
77 尾高浅山遺跡	78 尾高浅山1号墓	79 日下古墳群	80 上福万遺跡
81 尾高御廻山遺跡	82 尾高古墳群	83 尾高1号横穴墓	84 泉中峰・泉前田遺跡
85 長峰中世古墓			
A 御内谷たたら	B 朝金鉤物遺跡	C 朝金・大谷たたら	
D 朝金・下小原たたら	E 才谷第1たたら	F 才谷第2たたら	
G 才谷第3たたら	H 金屋谷たたら	I タタラ谷第1たたら	
J 御休場たたら（タタラ谷第2たたら）	K タタラ谷第3たたら	L タタラ谷第4たたら	
M 聖神社たたら	N 池野第1たたら	O 池野第2たたら	
P 池野第3たたら	Q 池野栗津山第1～第5たたら		

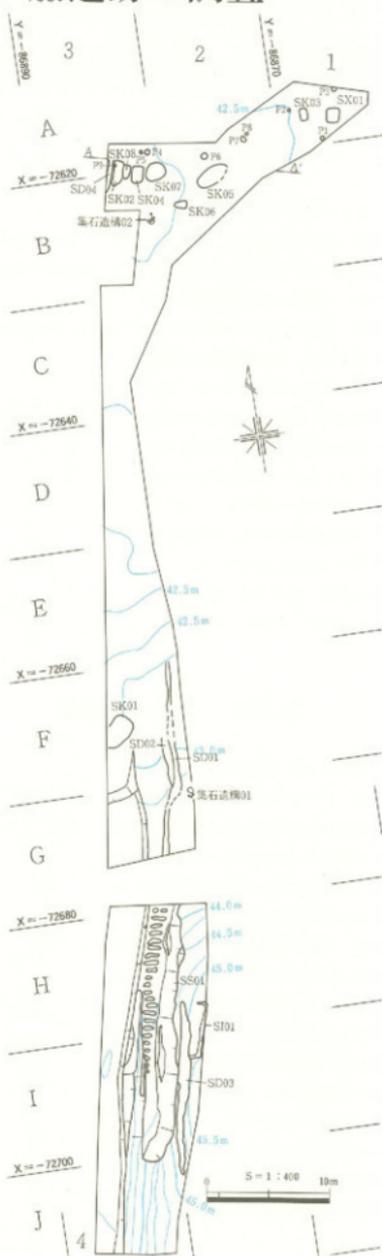


挿図3 周辺遺跡分布図

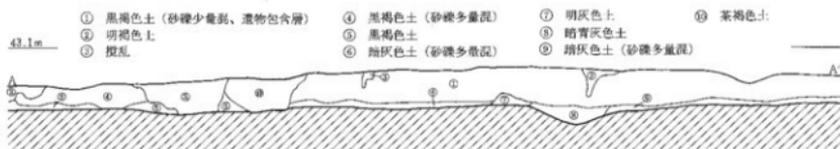
第3章 金田堂ノ脇遺跡の調査



挿図4 調査前地形測量図



挿図5 全体遺構図



挿図6 調査地土層図

第1節 竪穴住居跡

SI-01 (挿図7 図版1)

位置 調査地の南半部、H・I-3グリッドにまたがる標高45.5m付近に位置する。埋土は1層のみで、東側からの流入による自然堆積と推測される。本遺構の西側に位置するSD-03の埋土とは明確な分層が出来なかったが、時期差の存在が推測される。

構造 東側は壁体が良好に遺存していたが、西側は破壊により残存していない。壁体から推測される平面形は方形形状である。床面の規模は南北約4.6m・東西約0.9mである。残存壁高は最も遺存状態の良い南東部で31cmを測る。壁溝は壁体に沿って位置するが、西側及び南側には残っていない。幅は6~12cm、深さは2cm程度である。本遺構に伴う柱穴は検出されなかった。

出土遺物 区化出来る遺物が出土しておらず、時期は不明である。



挿図7 SI-01遺構図

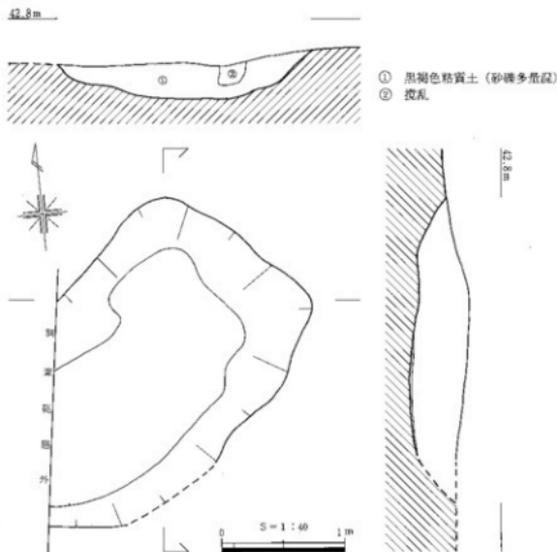
第2節 土坑・土壌墓

SK-01 (挿図8)

位置 F-3グリッド西側に位置し、調査地の中央西端で検出した。本遺構の東側約3mにはSD-02・03がある。標高42.5m付近に位置する。埋土は黒褐色粘質土の単層である。

形態 平面形は検出面で不整な隅丸長方形、底面で不整形を呈し、断面形は皿状となる。遺構の西側が一部調査地外にかかるため正確な規模は明らかでないが、検出面で残存部での長軸2.30m×短軸1.84m、底面で残存部での長軸1.74m×短軸1.10m、底面までの最大の深さはを0.45mを測る。

時期・性格 遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

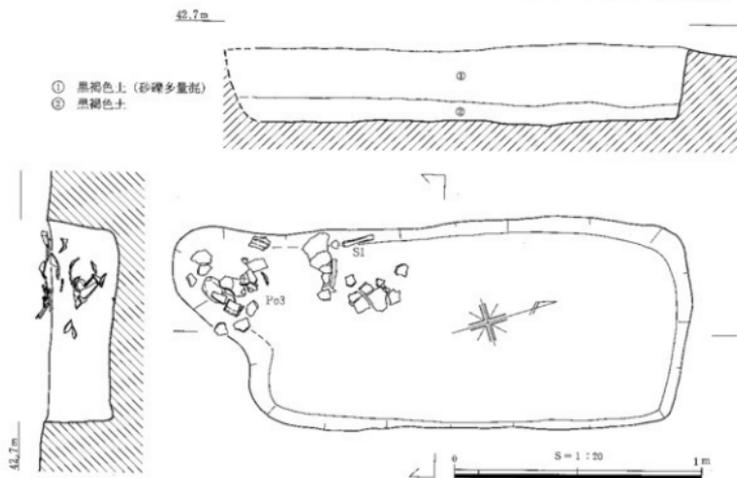


挿図8 SK-01遺構図

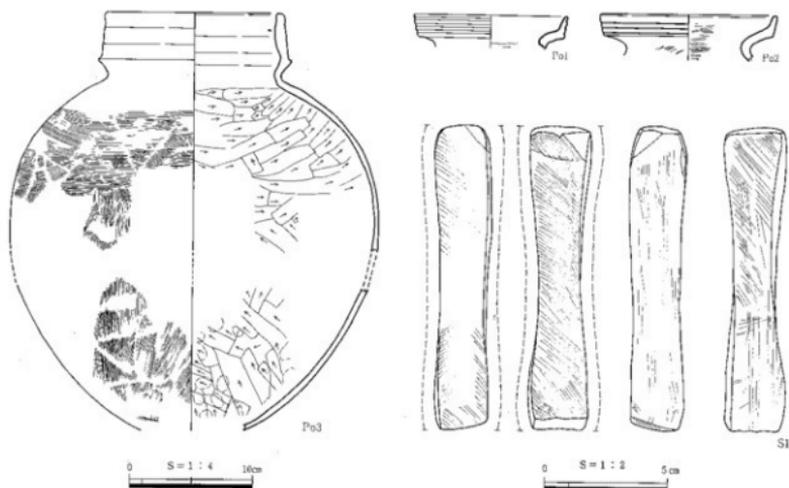
SK-02 (挿図9・10 図版1・3)

位置 A-3・B-3グリッドの境界に遺構の中心が位置する。本遺構の東側約1mにSK-04があり、西側でSD-04と接する。標高42.6m付近に位置する。A-1グリッドから西に向けて旧地形が低くなっており、本遺構とSK-04・SD-04は旧地形の上に堆積した黒褐色土の上面で検出した。埋土は2層に分層でき、砂礫を多く含む黒褐色土を基本とする。

形態 平面形は検出時には隅丸長方形であったが、遺構内より出土した土器の拡がりによって掘り下げたところ、最終的には遺構の南側が一部半楕円形状に突出する不整形となった。底面は基本的に隅丸長方形である



挿図9 SK-02遺構図



挿図10 SK-02遺物実測図

が、不明確である。断面形は長方形となる。規模は検出面で長軸2.10m×短軸0.85m、底面で長軸約1.6m×短軸0.70m、底面までの最大の深さは0.34mを測る。

遺物 遺構南西部で弥生土器壺P○1・2、土師器壺P○3、砥石S1が出土した。土師器壺P○3は破砕して小片となった状態であった。まとまった範囲での出土であるが、この土器が廃棄された後に攪乱を受けて小片化したのか破砕した状態で棄されたのか判断できない。土器の検出状況、周辺に位置する他の遺構との関係からみても、P○3が本遺構の時期を直接表すものとは考えられない。

時期・性格 近接し、同様の形態・埋土をもつSK-07から近世陶磁器が出土していること、隣接するSD-04に肥前系磁器の皿が伴うことから、本遺構の時期も近世以降であろう。性格は不明である。

SK-03 (挿図11)

位置 A-1グリッド南西隅、調査地北東側で検出された。本遺構の東側約1mにSX-01がある。標高42.6m付近に位置する。埋土は3層に分層でき、灰色の粘質土を基本とする。

形態 平面形は検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面は長方形状となる。規模は検出面で長軸1.03m×短軸0.55m、底面で長軸0.94m×短軸0.49m、底面までの最大の深さは0.22mを測る。

時期・性格 遺物は出土していないが、近接するSX-01と同様の埋土をもつことと遺構の形態から、SX-01と同時期の墓の可能性が考えられる。墓であれば、埋葬形態は土壇墓で、規模から小児墓と思われる。南北断面で確認した③層が木棺の痕跡を示すものかどうか、南・東西部で同じ層を確認できなかったため不明である。いずれにしても推測の域を超えない。



挿図11 SK-03遺構図

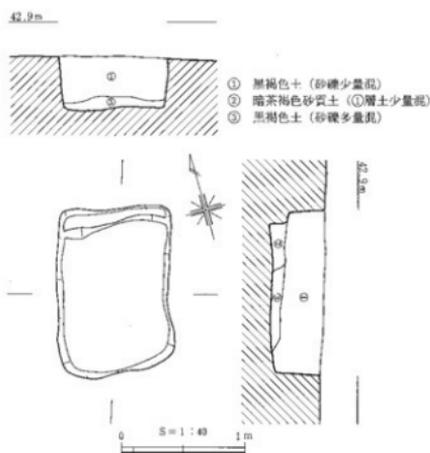
SK-04 (挿図12)

位置 A-3・B-3グリッドの境界に遺構の中心が位置する。本遺構の西側約1mにSK-04があり、標高42.6m付近に位置する。埋土は3層に分層でき、黒褐色土を基本とする。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な隅丸長方形を呈し、断面は長方形状となる。遺構北側で狭い平坦面をもち、底部に至る。規模は検出面で長軸1.33m×短軸0.90m、底面で長軸1.12m×短軸0.83m、底面までの最大の深さは0.45mを測る。

遺物 小片が多数出土したが図化できたものは無い。

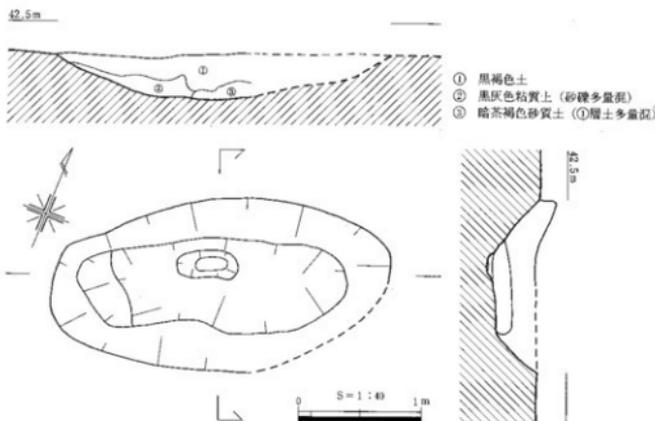
時期・性格 遺構の時期は出土した磁器片から近世以降と思われる。性格は不明である。



挿図12 SK-04遺構図

SK-05 (挿図13)

位置 B-2グリッド北端中央、調査地の北側に位置する。本遺構の南西側約2mにSK-06がある。標高42.2m付近に位置する。埋土は3層に分層でき、黒色系の土を基本とする。



挿図13 SK-05遺構図

形態 平面形は、検出面・底面ともに不整な長楕円形を呈し、断面形は不整な逆台形状となる。規模は検出面で長軸2.78m×短軸1.42mを測る。底面は中央に向けて楯鉢状に窪むため明確に面としておさえられないが、中央部で長軸0.50m×短軸0.22mの規模で落ち込み、その底面は長軸0.26m×短軸0.11mを測り長楕円形を呈す。残存部での底面までの深さは最大0.40mを測る。

時期・性格 遺物は出土しておらず、形態・埋土からも時期・性格は判断できない。

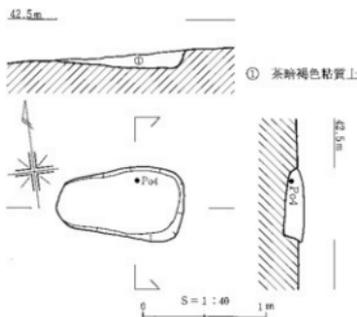
SK-06 (挿図14・15 図版6)

位置 B-2グリッド西端、調査地の北側に位置する。本遺構の北東側約2mにSK-05が、同約5mに集石2がある。標高42.2m付近に位置する。埋土は暗茶褐色粘質土の単層である。

形態 平面形は検出面は不整な長方形、底面は不整な隅丸長方形を呈する。遺構西側の残りが悪いが断面形は本来長方形状となろう。規模は検出面で長軸1.02m×短軸0.53m、底面で長軸0.96m×短軸0.47m、残存する部分で底面までの最大の深さは0.14mを測る。

遺物 埋土中より弥生土器の礎底部P04が出土した。

時期・性格 周辺の遺構と出土状況から考えて、P04が遺構の時期を表すものとは考えられない。性格も不明である。



挿図14 SK-06遺構図

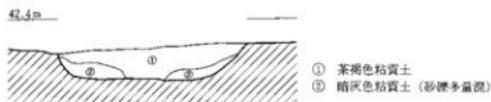
SK-07 (挿図16・17 図版1・3)

位置 調査地の北西隅、B-3グリッドの北東隅の標高42.2m付近に位置する。本遺構の東側約3mにSK-05が、西側約1mにはSK-08がある。埋土は2層に分層でき、茶褐色粘質土を基本とする。

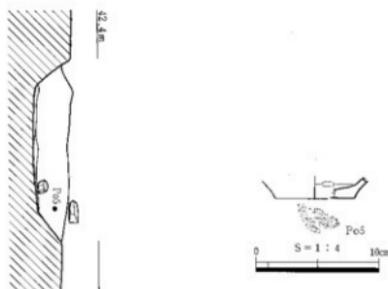
形態 平面形は検出面・底面ともに不整な楕円形を呈し、断面形は皿状となる。規模は検出面で長軸1.72m×短軸1.43m、底面で長軸1.48m×短軸1.03m、底面までの最大の深さは0.28mを測る。



挿図15 SK-06遺物実測図



挿図16 SK-07遺構図



挿図17 SK-07遺物実測図

遺物 出土した土器は少量で、ほとんどが小片であった。すべて埋土中位以上の出土である。このうち土師質土器皿Po5を図化した。

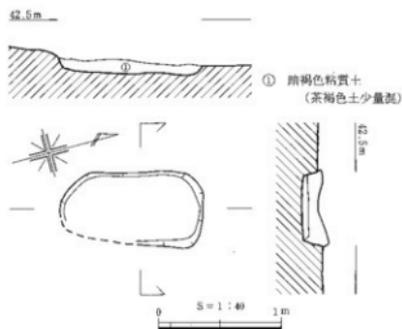
時期・性格 遺構の底面南側に10cm程度の襷が、縁辺部に20cm程度の板石が置かれていた。これらは現位置に意図的に配置されたと考えられる。Po5も出土位置が2つの石のほぼ中間であることから、意図的に置かれた可能性が高い。他の土器はすべて小片で埋土中位以上に散在しており、Po5より時間的に新しいものが認められないため、流れ込みではなくSK-07を（人為的に）埋めた土にすでに包含されていたと推測する。以上のことから、本遺構は中世の土壌墓と考える。Po5は墓前祭祀を行った後に破砕して供献されたのであろう。

SK-08 (挿図18)

位置 調査地の北西隅、A-3・B-3グリッドに跨がるように位置し、本遺構の東側約1mにSK-07がある。標高42.2m付近に位置する。埋土は暗褐色粘質土の単層である。

形態 遺構南東部は攪乱により残っていないかった。平面形は検出面・底面ともにやや不整な隅丸長方形を呈すると思われ、断面形は皿状となる。規模は検出面で長軸1.15m×残存部の短軸0.59m、底面で長軸1.08m×残存部の短軸0.52m、残存部での底面までの深さは最大0.12mを測る。

時期・性格 遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



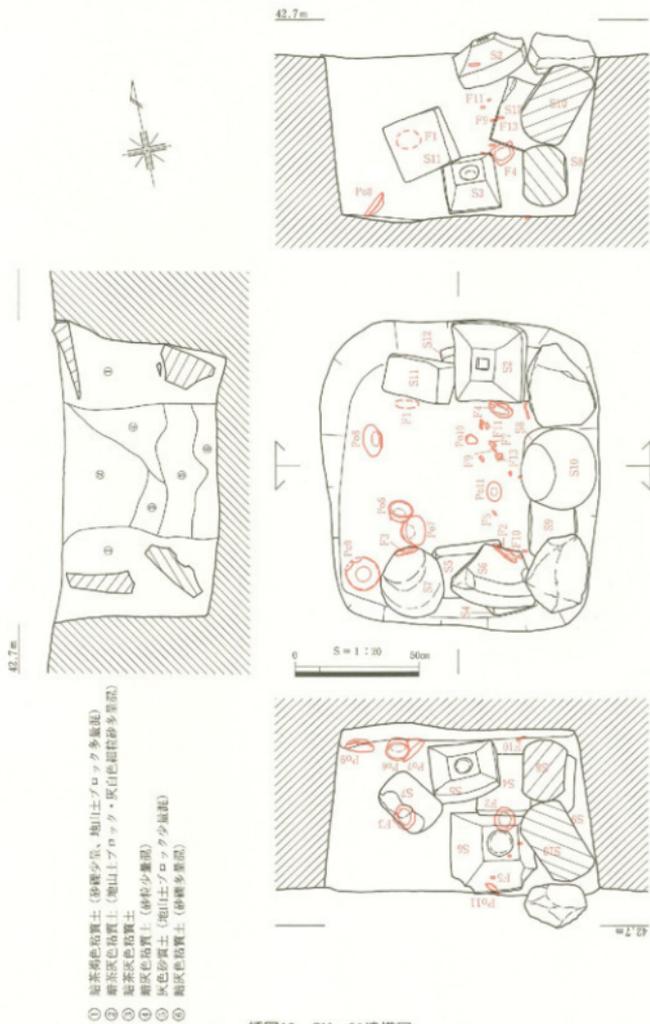
挿図18 SK-08遺構図

SX-01 (挿図19~22 図版1・4・5)

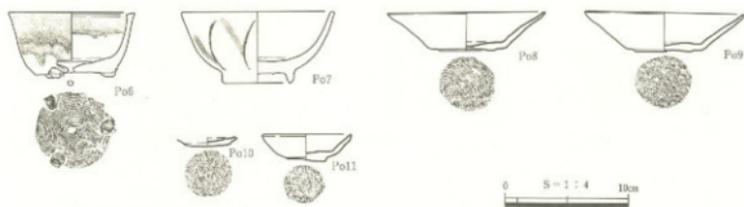
位置 調査地の北東隅、A-1グリッド南側中央で検出し、本遺構の西側約1mにSK-03がある。標高42.6m付近に位置する。

形態 平面形は検出面・底面とも隅丸方形を呈し、断面形は長方形状となる。規模は検出面で長軸1.24m×短軸1.11m、底面で長軸1.05m×短軸0.93m、底面までの深さは最大0.67mを測る。

埋土 埋土は6層に分層できた。①層は棺を墓壇内に置いた後に五輪塔とともに埋められた土である。②~⑥層



挿図19 SX-01遺構図



挿図20 SX-01遺物実測図(1)

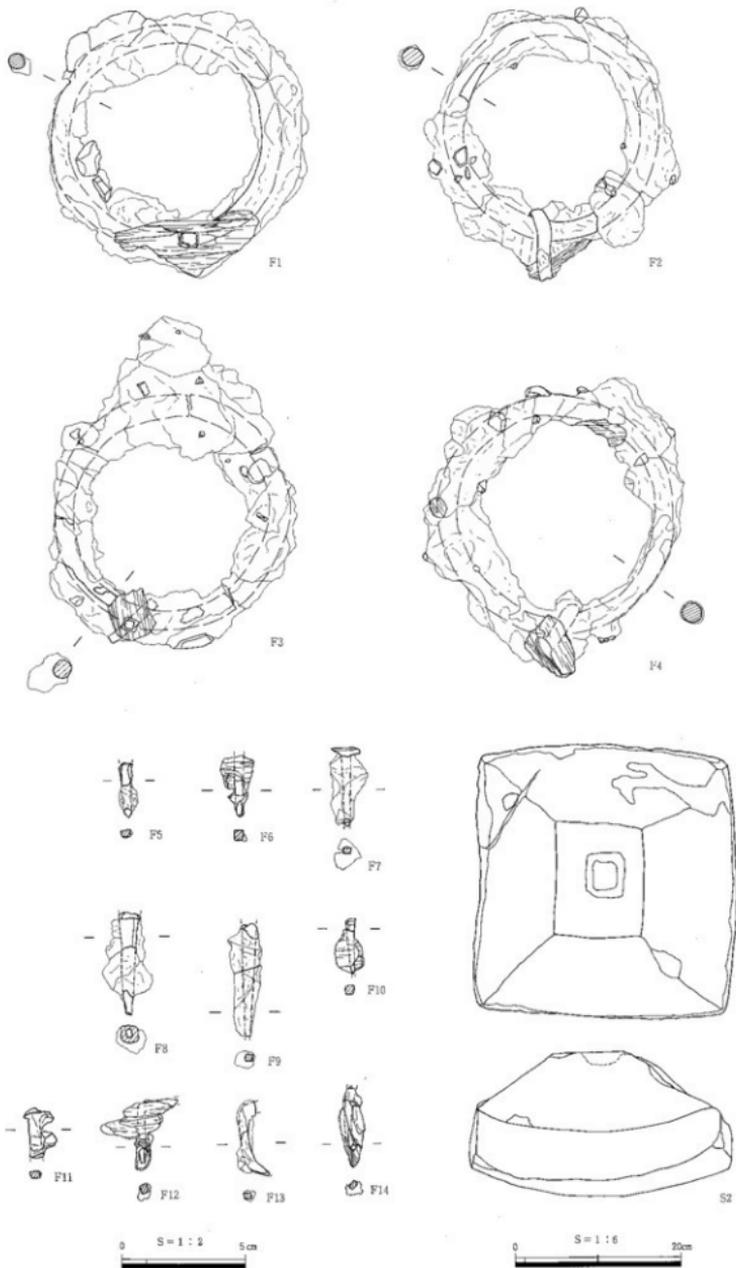


插图21 SX-01遗物实测图(2)
— 16 —

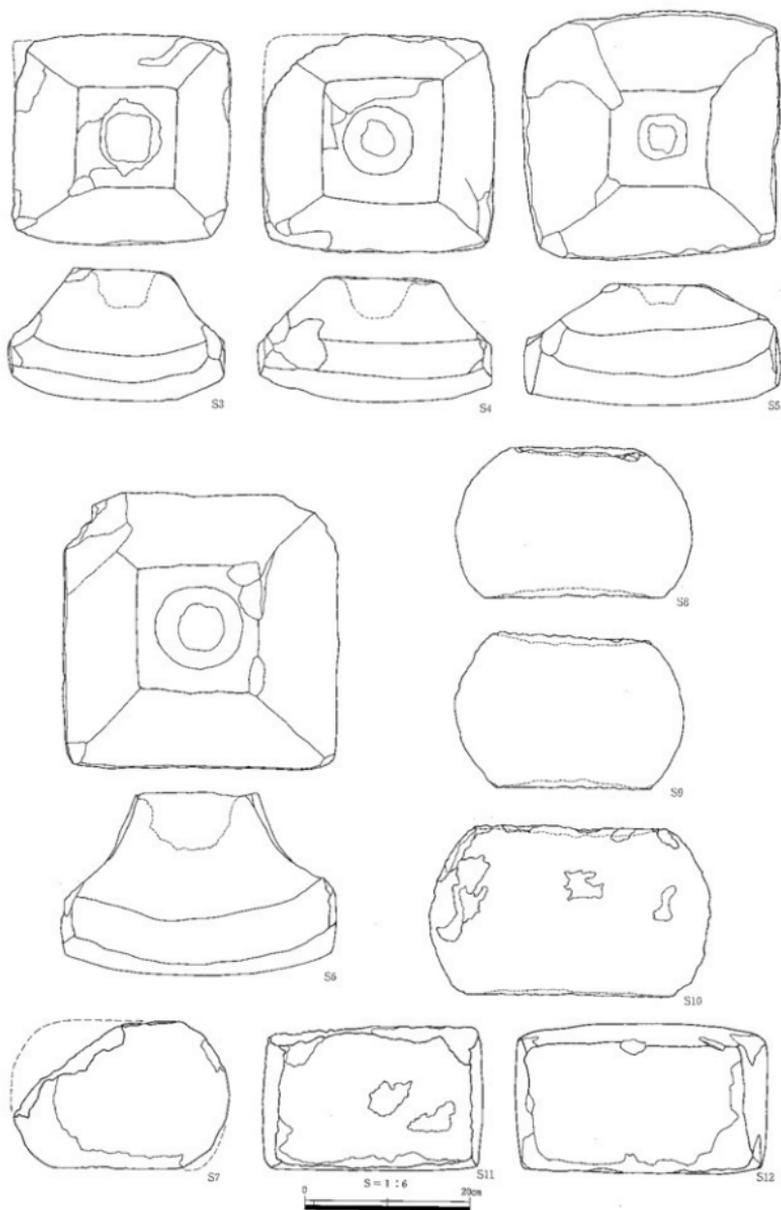


插图22 SX-01 遗物实测图(3)

については、棺の腐朽によって上部に盛りだされていた土が崩落し堆積したものである。

遺物 本遺構から古瀬戸筒形香炉P o 6、中国製青磁碗P o 7、土師質土器皿P o 8~11、環状の鉄製品F 1~4、釘F 5~14、五輪塔火輪S 2~S 6、水輪S 7~10、地輪S 11・12が出土した。古瀬戸筒形香炉P o 6は藤澤福年後IV期(古)に当り⁽³⁾、15世紀中頃のものである。青磁碗P o 7は龍泉窯系で、外面には蓮弁文が施される。14世紀末~15世紀初頃のものである⁽³⁾。土師質土器皿P o 8・9は墓壇底面から、P o 10は墓壇上面に近い土中から、P o 11は墓壇上面からそれぞれ出土した。出土状況からP o 6・7は棺内、P o 8・9は棺外に置かれていたと考えられる。P o 10・11は、墓壇を埋める段階で入れられたものなのか壁上を築く段階で入れられたものなのか、明確でない。また、墓壇上面の北東隅、南東隅にそれぞれ人頭大の石が置かれていた。SX-01検出時に墓壇上面に露出していたのは、この石と火輪S 2である。

埋葬主体 木質が付着した釘F 5~14が出土したことから、埋葬主体は木棺と思われる。「コ」字形に埋置された五輪塔の内側に棺が置かれていたと考えられ、その間隔がほぼ棺の短辺を表す。長辺は棺と墓壇の隙間に入れられたと思われるP o 8から五輪塔までの長さ、棺の高さは墓壇上面付近のF 5から底面(直上の釘)までと考え、以上の工程から棺の規模(長辺×短辺×高さ)を算出すると、(0.56m×0.55m-0.60m)で、ほぼ正方形の棺であったと推測する。

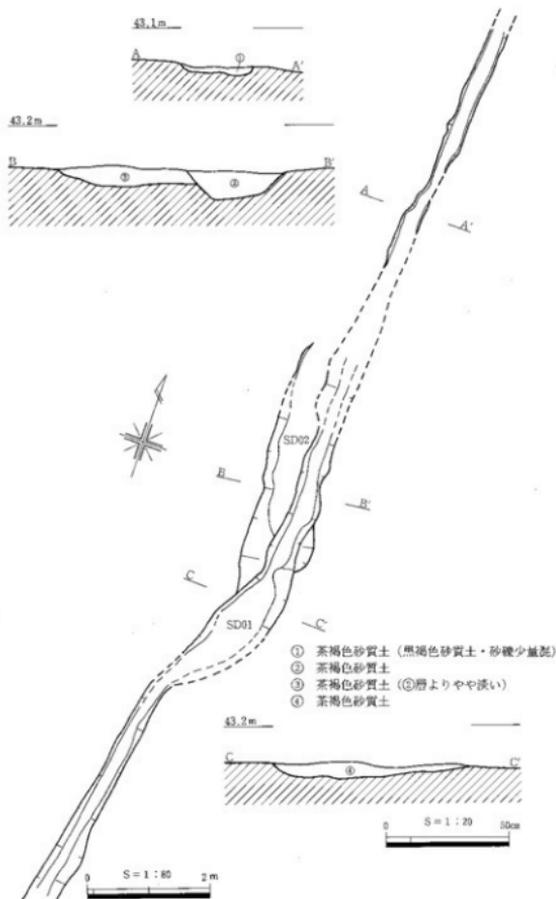
時期 副葬品のP o 6とP o 7の時期差はあまり無く、被葬者の生前の愛用品を納めたものであろう。よってSX-01が造られた時期は15世紀中頃、下っても15世紀後半の早い段階までと考える。

第3節 溝状遺構

SD-01・02

(挿図23 図版2)

位置 調査地の中央付近、F・G-3グリッドにまたがる標高43.0m付近に位置する。SD-01・02ともに遺存状態が悪いが埋土は1層のみで、自然堆積と推測される。SD-01がSD-02を切っている。形態 両遺構とも南北方向にほぼ直線状に伸びる。SD-01は検出面



挿図23 SD-01・02遺構図

では長さ約16m、最大幅約80cmを測る。SD-02は検出面では長さ約4.4m、最大幅55cm以上を測る。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

SD-03 (挿図24 図版1・2)

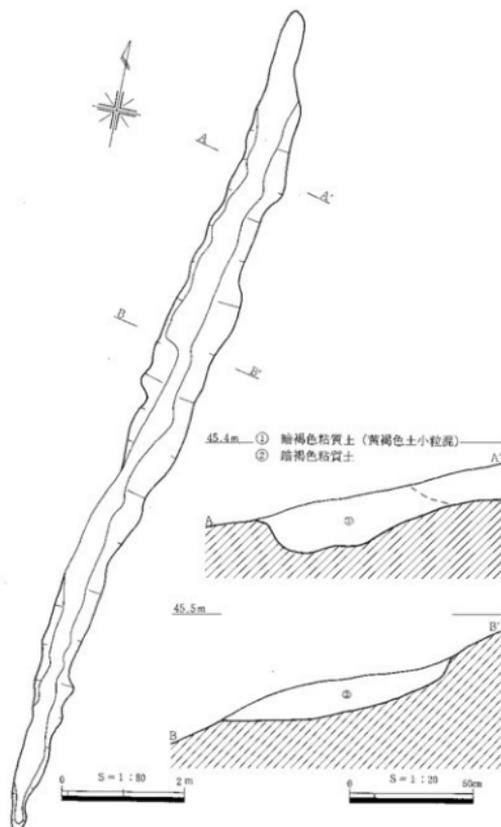
位置 調査地の南半部、I-3グリッドを中心とする標高45.1m付近に位置する。埋土は1層のみで、自然堆積と推測される。本遺構の東側に位置するSI-01の埋土とは明確な分層が出来なかったが、時期差の存在が推測される。

形態 遺構は南北方向にはほぼ直線状に伸びる。西側にあるSS-01によって一部切られている。検出面では長さ約10.6m、最大幅54cmを測る。

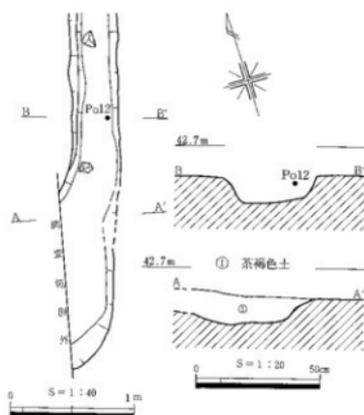
出土遺物 土器胴部片や黒曜石剥片が若干出土したが図化出来るものはない。時期も不明である。

SD-04 (挿図25・26 図版3)

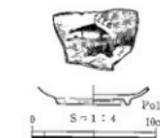
位置 調査地の西端、A-3・B-3グリッドに跨って検出した。標高42.6m付近に位置する。本遺構の東側



挿図24 SD-03遺構図



挿図25 SD-04遺構図



挿図26 SD-04遺物実測図

はSK-02と隣接する。埋土は茶褐色土の単層である。

形態 本遺構の北側は攪乱によって削平され、南側は調査地外へ続くため、本来の規模・形態は明らかでない。

検出規模は全長2.92m、幅0.37m～0.48m、深さは最大0.13mを測る。遺構の走向はN-18°-Eである。

遺物 埋土上位より肥前系磁器の皿Po12が出土した。見込みに文様が描かれ、意匠は水辺の小屋か。他に10cm程度の角張った椀が2つ出土した。

時期・性格 出土したPo12から近世以降と思われる。性格は不明である。

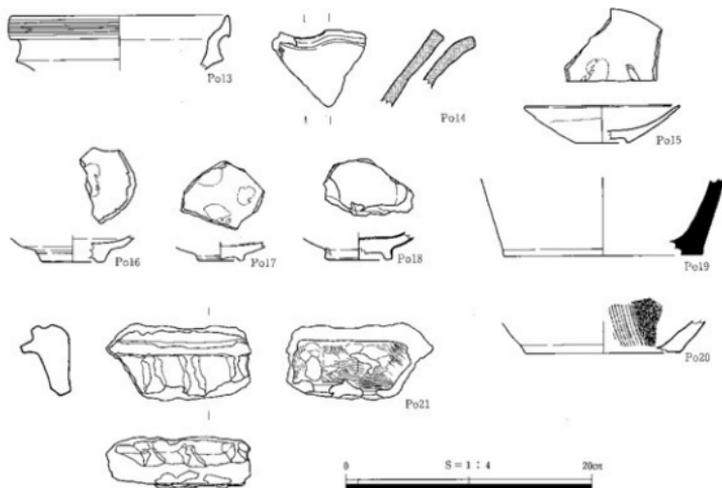
第4節 段状遺構

SS-01 (挿図27・28 図版2・3)

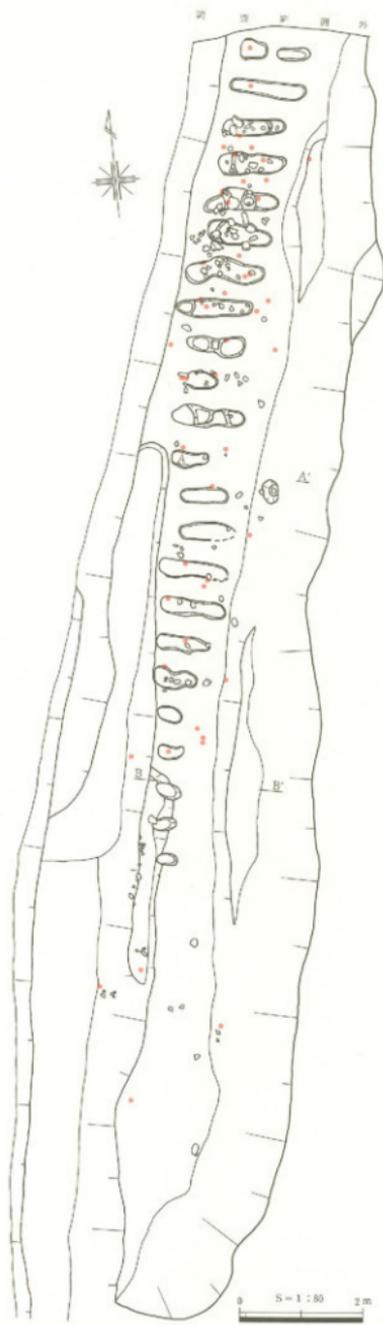
位置 調査地の南半部、H-3～I-3・4グリッドにまたがる標高43.7～45.1m付近に位置する。埋土は6層以上に分層できる。東側からの流入による自然堆積と推測される。

形態 遺構は南北方向にほぼ直線状に伸びる。北端は会見町教育委員会の試掘調査が行われた箇所であるが、その時には明確な遺構が検出されていないことから、調査範囲付近での遺構は終わるようである。西側は水田になっており、掘削による改変を受けている。調査地内での規模は、長さ約15.8m、最大幅約2.5m、残存部最大高1.44mを測る。底面には東西方向に長軸をとる長楕円形の浅い土坑が連続して存在していた。これは、道路遺構の1類型として近年認識されるようになった波板状凹凸面に該当するものである。各土坑の埋土は類似したもので、暗灰褐色の粘性の弱い粘砂土である。土坑内からは3～10cm程度の石が出土した。側溝は認められない。SS-01が当初から道路遺構として作られたのかは不明であるが、ある時期道路遺構として使用されたのは間違いない。

出土遺物 堆積土中から青磁Po18、須恵質土器Po19、高台を持つ陶磁器Po16・17、須恵質の瓦塔と考えられるものPo21などが出土した。遺状遺構と推測される性格上、遺物は遺構自体に伴うものではなく2次的な流入と考えられるが、遺物から江戸時代まで下限が下ると推測される。



挿図27 SS-01遺物実測図



- ① 暗褐色粘質土
- ② 黄褐色砂質土
- ③ 暗褐色粘質土 (①層よりやや濃い)
- ④ 暗褐色粘質土 (③層よりやや濃い)
- ⑤ 暗褐色粘質土 (④層より灰褐色が強い)
- ⑥ 暗褐色粘質土 (⑤層よりやや濃い)

44.2m



46.7m

- ① 暗褐色粘質土
- ② 暗褐色粘質土 (大砂粒混)
- ③ 暗褐色粘質土 (黄褐色1小ブロック少量混)
- ④ 暗褐色粘質土



挿図28 SS-01遺構図

第5節 集石

集石1 (挿図29 図版2)

位置 調査地の中央部近く、G-3グリッド北側の標高43.3m付近に位置する。SD-01・02の東側にある。

形態 集石は調査範囲際から検出されたため、調査地外に集石が続く可能性も残るが、調査地内部分で一旦終わっている。径が40cmを越える扁平に近い石の下にやや小ぶりで扁平な石があり、周囲に礫が集中している。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

性格 人為的なものであるが、その用途・性格は不明である。

集石2 (挿図30)

位置 調査地の北端近く、B-3グリッド東側の標高42.3m付近に位置する。

形態 長軸が40cm前後の大きな石を3個と若干の小礫からなる。寄せ集められたような状態で検出された。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

性格 人為的なものであるが、その用途・性格は不明である。



挿図29 集石1 遺構図



挿図30 集石2 遺構図

第6節 ピット

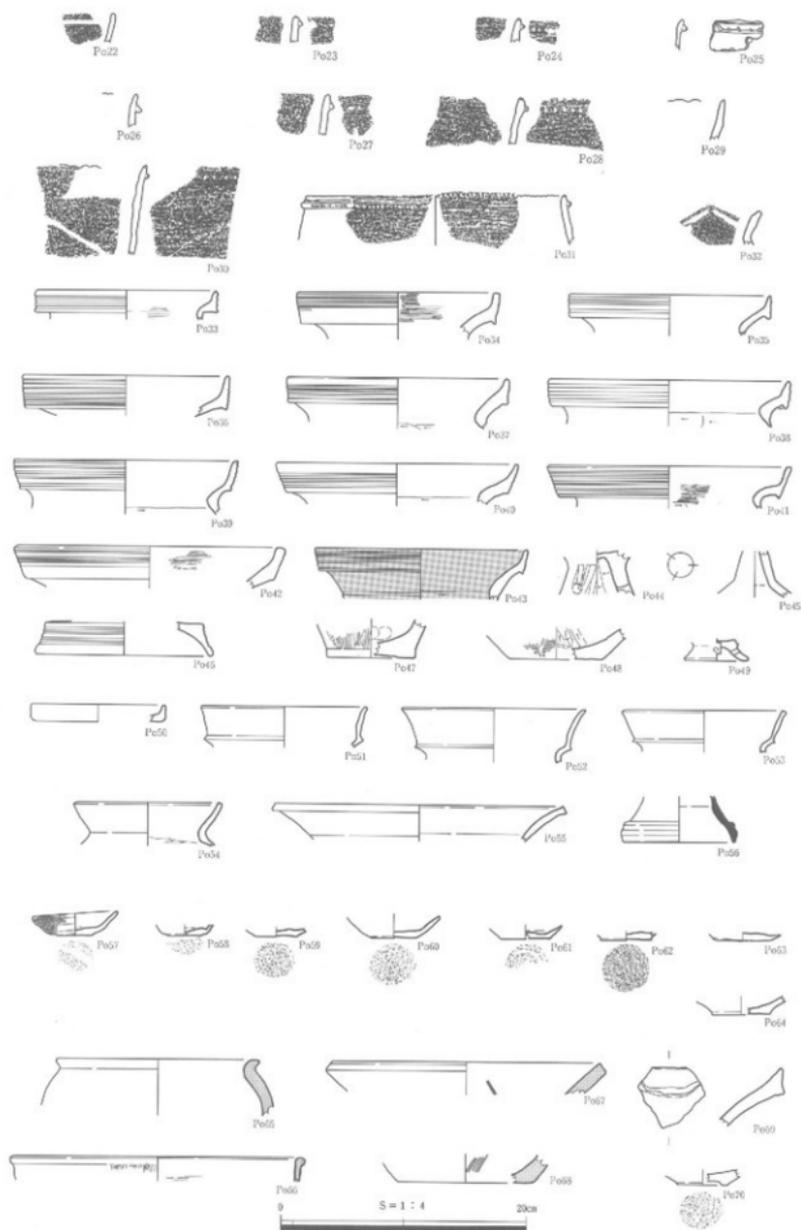
ピット (挿図5)

調査地の北端近くからピットを9個検出した。これらのピットは何らかの遺構に伴うものと考えられるが、ピット間には企画性が認められず、孤立柱建物跡等の遺構として捉えることは出来なかった。遺物が出土したものはなかった。なお、詳細は挿表6のピット一覧表に記載する。

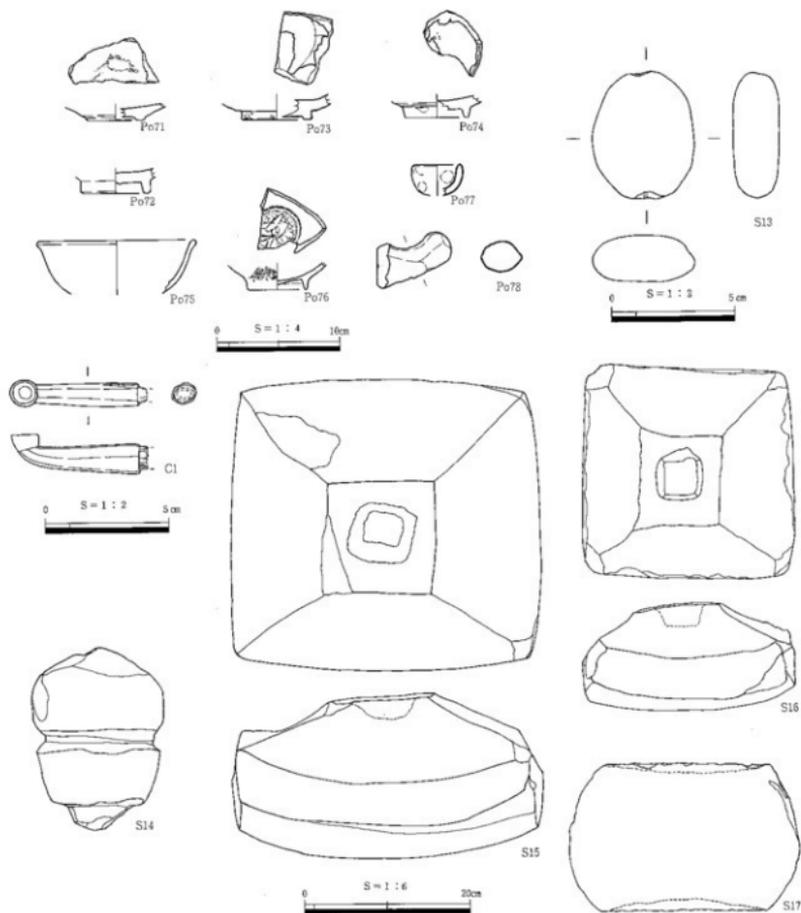
第7節 遺構外の遺物

遺構外出土遺物 (挿図31・32 図版5・6)

調査地の北側から中央付近にかけての包含層中から上器片を中心とする遺物が出土した。大部分が小破片であり、遺存状態の悪いものであった。個々の遺物の詳細は挿表7～9の遺物観察表に記載する。



挿図31 遺構外出土遺物実測図(1)



押図32 遺構外出土遺物実測図(2)

註(1) 菅波正人「遺物からみた葬送儀礼について」『瑠璃光寺跡遺跡』 山口市教育委員会 1988年

(2) 香炉については、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏に資料を実見していただき、御教示をいただいた。

参考文献

『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～ 資料集』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1996

(3) 青磁碗については、広島県立美術館村上勇氏に資料を実見していただき、御教示をいただいた。

参考文献

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982

(4) 図面には載っていないが、棺の西側に当る部分でも木質の付いた釘が出土している。

挿表2 堅穴住居跡一覧表

遺構名 S1	採回番号	図版番号	グリッド	平面形	規模 m	残存部高 cm	主柱本 数	遺物	時期	備考
01	7	1	H・I-3	方形	4.5×0.9	31		土器		

挿表3 土坑・土墳墓一覧表

遺構名	採回番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸×短軸)cm	深さ cm	長軸方向	遺物	時期	備考
SK-01	8		F-3	不規則な長方形	200×184	174×110	4.5	N-50°-E		
SK-02	9・10	1・3	A・B-3	不規則な長方形	210×85	160×70	3.4	N-14°-E	陶土器類、土器類	奈良以降
SK-03	11		A・B-3	不規則な長方形	210×56	24×49	2.2	N-7°-W		小塚型土墳墓か
SK-04	12		A・B-3	不規則な長方形	132×99	112×63	4.5	N-17°-E	陶器	奈良以降
SK-05	13		B-2	不規則な長方形	278×142	95×11	4.0	N-69°-E		
SK-06	14・15	5	B-2	不規則な長方形	102×53	96×47	1.4	N-83°-W	弥生土器類	
SK-07	16-17	1・3	B-2	不規則な長方形	272×143	148×103	2.8	N-72°-E	土質瓦土器類	中世
SK-08	18		A・B-3	不規則な長方形	115×69	106×53	1.2	N-18°-E		土墳墓か
SK-09	19-22	1・4・5	A-1	長方形	134×111	106×93	0.7	N-11°-E	菅沼、古瀬戸資料等貯、土器類 土器、土器類、土器類、土器類	15世紀後半頃

挿表4 溝状遺構一覧表

遺構名 SD	採回番号	図版番号	規模(m) 全長×幅×深さ	遺物	時期	備考
01	23	2	15×0.8-0.12			
02	23	2	4.4×0.55-0.08			
03	24	1・2	1.06×0.54-0.2			
04	25・26	3	2.92×6.37-0.48 -0.13	肥前系磁器		近畿以降か

挿表5 段状遺構一覧表

遺構名 S5	採回番号	図版番号	規模(m) 全長×幅×高さ	遺物	時期	備考
01	27・28	2・3	約15.8×約22.5 -1.44	須恵瓦土器、青磁、陶磁器、樂器類の瓦等	近世	道路遺構

挿表6 ビット一覧表

ビット 番号	グリッド	規模(長軸×短軸×深さ) cm	層	土色・土質	採掘 時期	遺物	備考
1	A-1	28×32-19	2	①単層粘粉質土 ②灰色粘質土(粘性強く軟らかい)	×		
2	A-1	25×14	1	暗褐色粘質土	N		
3	A-1	50×44-36	2	①単層粘粉質土 ②暗褐色粘質土(やや暗く砂礫多く含む)	×		
4	A-3	30×23-30	1	黒褐色粘粉質土(砂礫多く含む)	×		
5	A-3	45×43-27	1	黒褐色粘粉質土(砂礫多く含む)	×		
6	A-2	53×46-23	1	黒褐色粘粉質土(砂礫多く含む)	×		
7	A-2	49×43-10	1	黒褐色粘粉質土(砂礫多く含む)	×		
8	A-2	28×23-8	1	暗褐色粘粉質土(砂礫多く含む)	N		
9	A-3	23×21-33	1	暗褐色粘質土(高褐色粘質土少量混)	N		

挿表7 土器・土製品観察表

※復元値 △残存値

SK-02

遺構番号 採回番号 図版番号	器名 器種	流量 cm	形態上の特徴	外面	内面	胎土 土質	色 外面 内面	備考
Ph1 19	弥生土器	①深 12.4 ②△ 2.7	やや内傾する短い口縁部。口縁を施す。	ナツ	口縁部ナツ・直線底面 梨型ヘラケツラ	良好	黄褐色 黒褐色	小塚-19
Ph2 19	弥生土器	①深 14.3 ②△ 3.7	やや内傾する短い口縁部。口縁を施す。底部に爪跡の跡あり。	ナツ	口縁部ヘラミオキ 梨型ヘラケツラ	良好	黄褐色 黒褐色	小塚-19
Ph3 19	土器類	①深 14.4 ②△ 34.3	やや内傾する短い口縁部。底部に爪跡を施す。	口縁部コナツ 梨型ヘラケツラ	口縁部コナツ 梨型ヘラケツラ 底部爪に直線底面	良好	黄褐色 淡黄褐色	小塚-14 外側に黒い塗料を施す

SK-06

遺構番号 採回番号 図版番号	器名 器種	流量 cm	形態上の特徴	外面	内面	胎土 土質	色 外面 内面	備考
Ph4 15 16	弥生土器	①△ 3.2 ②高 7.3	内傾して低い口縁部を持つ。	調整不明	梨型ナツ 高台直線底面	良好	淡黄褐色 黄褐色	小塚-16

SK-07

建築物中 採択番号 採択番号	種 類	法 量 cm	形 態 上 の 特 徴	調 整		胎 土 調 成	色 調 外面 内面	備 考
				外面	内面			
Ps5 17 3	土師瓦土器	① △ 1.6 ② 瓦 6.4	回転糸切りによる平式。	回転ナゲ 瓦面回転糸切り	回転ナゲ・目張比瓦	泥。1~2mmの砂粒少量含む 良好	桃褐色 櫻褐色	小原-20

SX-01

建築物中 採択番号 採択番号	種 類	法 量 cm	形 態 上 の 特 徴	調 整		胎 土 調 成	色 調 外面 内面	備 考
				外面	内面			
Ps6 20 4	青磁戸 焼成戸	① 10.0 ② 5.4 ③ 9.0	中や内側して立ち上がる口縁部。外面は内側に に厚し面をなす。底面は回転糸切りで3つ の中央に鋭角穿孔する。	外面上下縁部 他は瓦面	口縁部瓦輪 他は瓦輪	滑 良好	黒褐色 濃緑褐色 灰白色	小原-16
Ps7 20 4	青磁 土師瓦土器	① 12.2 ② 5.9 ③ 9.4 ④ 3.3 ⑤ 4.6	内側して立ち上がる口縁部。外面には消化した 土層や文、内面には1条の紋線が彫られる。 他は瓦面と区別される。	瓦輪 凸面内は輪かき取り	瓦輪 凸面内は輪かき取り	滑 良好	瓦輪部緑色 濃緑部赤褐色 灰白色	小原-4
Ps8 20 4	土師瓦土器	① 12.7 ② 3.3 ③ 4.6	内反文様に突き出た縁部がわずかに内側する 底面は静止糸切りによる平式。	回転ナゲ 瓦面静止糸切り	口縁部山転ナゲ 底面ナゲ	泥。1~3mmの砂粒含む 良好	灰黄色 灰白色	小原-2
Ps9 20 4	土師瓦土器	① 12.8 ② 3.4 ③ 4.6	内反文様に突き出た縁部がわずかに内側する 底面は静止糸切りによる平式。	回転ナゲ 瓦面静止糸切り	口縁部山転ナゲ 底面ナゲ	泥。2~4mmの砂粒含む 良好	灰黄色 灰白色	小原-1
Ps10 20 4	土師瓦土器	① △ 3.8 ② 瓦 3.7	静止糸切りによる平式。	調整不明	回転ナゲ	泥。1~3mmの砂粒含む 良好	灰茶褐色 淡茶褐色	小原-10
Ps11 20 4	土師瓦土器	① 7.1 ② 2.3 ③ 3.2	直線的に突き出た縁部。底面は静止糸切りによる 平式。	回転ナゲ 瓦面静止糸切り	山縁部山転ナゲ 瓦面ナゲ	滑 良好	灰黄色 灰白色	小原-3

SD-04

建築物中 採択番号 採択番号	種 類	法 量 cm	形 態 上 の 特 徴	調 整		胎 土 調 成	色 調 外面 内面	備 考
				外面	内面			
Ps12 26 3	磁器 皿	① △ 1.6 ② 瓦 5.6	低い高台を持つ長形。内面の縁は本底の中間	内作凸縁輪 他は瓦輪	瓦輪	磁器	焼乳白色 焼乳白色	山崎-2

SS-01

建築物中 採択番号 採択番号	種 類	法 量 cm	形 態 上 の 特 徴	調 整		胎 土 調 成	色 調 外面 内面	備 考
				外面	内面			
Ps13 27 3	赤土土器 器台	① 瓦 17.6 ② △ 4.5	直立する短い口縁部。回転糸を断す。厚部は第 二胎土を立嵌する。	ナゲ	ナゲ	滑 良好	淡茶褐色 淡茶褐色	小原-16
Ps14 27 3	赤土土器 器台	① △ 6.5	口縁部が突き出し口縁部。内面におろし し。	調整不明	調整不明	滑 やや不良	灰色 灰色	小原-34
Ps15 27 3	陶器 器台	① 瓦 17.7 ② 3.1 ③ 瓦 4.4	ほぼ真直的に立ち上がる口縁部。内面砂目。 器台部。	口縁部瓦輪 他は瓦輪	瓦輪	滑 良好	瓦輪部灰色 瓦輪部赤色	小原-15
Ps16 27 3	陶器 高台部	① △ 1.5 ② 3.5	内面に3つ所の砂目。低い斜り出し高台。	調整。一部調整なし	調整	滑 良好	瓦輪部赤色 瓦輪部淡灰色	小原-13
Ps17 27 3	陶器 高台部	① △ 2.2 ② 5.3	内面に砂目。低い斜り出し高台。	瓦輪	瓦輪 高台部調整	滑 良好	瓦輪部淡灰色 瓦輪部赤褐色	小原-2
Ps18 27 3	青磁 器台	① △ 2.3 ② 瓦 4.5	高台のつく瓦部。	高台部瓦輪 他は瓦輪	高台部調整 調整調整不明	調整 良好	瓦輪部赤色 瓦輪部灰白色	小原-9
Ps19 27 3	赤土土器 器台	① △ 6.4 ② 瓦 16.0	直線的に立ち上がる底面。平式。	調整不明 調整調整不明	回転ナゲ	滑 良好	灰色 灰色	小原-40
Ps20 27 3	青磁 器台	① △ 2.6 ② 瓦 12.4	内面におろし口。	回転ナゲ	回転ナゲ	滑 良好	赤褐色 赤褐色	小原-30
Ps21 27 3	赤土土器 器台	① △ 2.6		調整不明	調整不明	滑 良好	灰褐色 灰褐色	山崎-1

遺構外

建築物中 採択番号 採択番号	種 類	法 量 cm	形 態 上 の 特 徴	調 整		胎 土 調 成	色 調 外面 内面	備 考
				外面	内面			
Ps22 28 3	縄文土器 器台	① △ 2.4	中や内側面に外側する口縁部。内面に1条 の沈線。	ナゲ	ナゲ	滑 良好	茶褐色 茶褐色	小原-30
Ps23 28 3	縄文土器 器台	① △ 2.2	ほぼ直立する口縁部。外面に尖角を斜り付け る。両部を強く押さえる胎土にする。	ナゲ	ナゲ	滑 良好	黄茶褐色 黄茶褐色	小原-22

産物番号 試験番号 試験番号	種類 試験	重量 g	形態上の特徴	調製		動土 期成	色調 表面 内面	備考
				外側	内側			
Pa24 31 5	織文上部 深緑	① Δ 2.1	ほぼ直立する口縁部。外側に斜め目交帯を施し り付ける。端部に溝を施す。	ナデ	ナデ	底、粗砂少量含む 良好	黄褐色 茶褐色	小塚-21
Pa25 31 6	織文上部 深緑	① Δ 2.5	ほぼ直立する口縁部。外側に斜め目交帯を施し り付ける。端部に溝を施す。	ナデ	ナデ	底、1~2mmの砂粒含む 良好	黄褐色 赤茶褐色	小塚-27
Pa26 31 6	織文上部 深緑	① Δ 2.9	ほぼ直立する口縁部。外側に交帯を施しり付け る。端部を強く押さえて丸みを施す。	ナデ	調整不明	底、砂粒含む やや不良	黄褐色 赤茶褐色	塚-8
Pa27 31 6	織文上部 深緑	① Δ 3.3	やや外傾する口縁部。外側に交帯を施しり付け る。	ナデ	ナデ	底、1~3Pの砂粒含む 良好	黄褐色 赤茶褐色	小塚-24
Pa28 31 6	織文上部 深緑	① Δ 3.9	やや外傾する口縁部。外側に斜め目交帯を施し り付ける。端部に溝を施す。	粗いナデ	粗いナデ	底、細砂含む 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-25
Pa29 31 6	織文上部 深緑	① Δ 7.5	やや外傾する口縁部。外側に斜め目交帯を施し り付ける。端部に溝を施す。	ナデ	ナデ	底、1~3mmの砂粒含む 良好	黄褐色 赤茶褐色	小塚-23
Pa30 31 5	織文上部 深緑	① 底 21.9 ① Δ 4.1	内傾する口縁部。外側に斜め目交帯を施しり付 ける。端部に溝を施す。	粗いナデ	粗いナデ	底、1~3mmの砂粒含む 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-26
Pa31 31 5	織文上部 深緑	① Δ 3.3	やや内傾部に内傾する口縁部。端部を強く 押さえて丸みをつける。	ナデ	ナデ	底、2~3mmの砂粒多く含む 良好	黄褐色 赤茶褐色	塚-5
Pa32 31 5	織文上部 深緑	① Δ 2.7	直立して外傾する直口の縁部。内面に凹線。	ナデ	ナデ	底 良好	黄褐色 黄褐色	西川-1
Pa33 31 6	赤土上部 黄	① 底 14.2 ① Δ 2.5	直立する短い口縁部。凹線を施す。	ナデ	口縁部ナデ 調整→ラミギ?	底 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	塚-9
Pa34 31 6	赤土上部 黄	① 底 15.6 ① Δ 4.0	ほぼ直立する口縁部。凹線を施す。	ナデ	ヘラミギナ	底 良好	黄褐色 赤褐色	小塚-45
Pa35 31 6	赤土上部 黄	① 底 16.2 ① Δ 3.3	ほぼ直立する口縁部。凹線を施す。	ナデ	ナデ	底、1~2mmの砂粒多く含む 良好	黄褐色 黄褐色	塚-1
Pa36 31 6	赤土上部 黄	① 底 16.4 ① Δ 3.4	直立する口縁部。凹線を施す。	ナデ	ナデ	底、砂粒含む 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	塚-2
Pa37 31 6	赤土上部 黄	① 底 17.6 ① Δ 4.2	直立する短い口縁部。凹線を施す。	ナデ	口縁部ナデ 調整→ラミギ	底 良好	黄褐色 赤茶褐色	小塚-54
Pa38 31 6	赤土上部 黄	① 底 19.3 ① Δ 3.9	ほぼ直立する短い口縁部。凹線を施す。	ナデ	口縁部ナデ 調整→ラミギ	底 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	塚-11
Pa39 31 6	赤土上部 黄	① 底 18.9 ① Δ 4.8	やや外傾する口縁部。凹線を施す。	ナデ	口縁部ナデ 調整→ラミギ	底、1~2mmの砂粒含む 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-23
Pa40 31 6	赤土上部 黄	① 底 19.4 ① Δ 3.4	外傾する口縁部。凹線を施す。	ナデ	口縁部ナデ 調整→ラミギ	底、1~3mmの砂粒含む やや不良	赤褐色 赤茶褐色	塚-10
Pa41 31 6	赤土上部 黄	① 底 19.5 ① Δ 3.5	外傾する口縁部。凹線を施す。	ナデ	口縁部ナデ 調整→ラミギ 調整→ラミギ	底 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-21
Pa42 31 6	赤土上部 黄	① 底 21.2 ① Δ 3.4	外傾する口縁部。凹線を施す。	ナデ	口縁部ナデ 調整→ラミギ	底、1mm程度の砂粒含む 良好	黄褐色 赤褐色	小塚-56
Pa43 31 6	赤土上部 黄	① 底 17.1 ① Δ 4.2	やや外傾する短い口縁部。凹線を施す。端部 に1本の凹線。	ナデ	口縁部ナデ 調整→ラミギ	底 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	塚-4 内外表凸形
Pa44 31 6	赤土上部 内赤	① Δ 3.6	「八」の字状に強く凹みを持つ口縁部。	赤土ナデ 調整→ラミギ	調整ナデ 調整→ラミギ	底 底	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-7
Pa45 31 6	赤土上部 内赤	① Δ 3.8	「八」の字状に強く凹みを持つ口縁部。	調整不明	調整不明	底 やや不良	赤茶褐色 赤茶褐色	塚-7
Pa46 31 6	赤土上部 内赤	① Δ 2.8 ① Δ 14.9	凹線を施す部分凹部。	ナデ	調整不明	底、1~2mmの砂粒含む 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	塚-5
Pa47 31 6	赤土上部 内赤	① Δ 3.2 ① 底 7.1	平底。	ヘラミギ後ナデ	ナデ、調整不明	底、1~4mmの砂粒含む 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-44
Pa48 31 6	赤土上部 内赤	① Δ 2.7 ① 底 7.6	平底。	調整ヘラミギ 調整ヘラミギ	ヘラミギ	底 底	赤茶褐色 赤褐色	小塚-46
Pa49 31 6	赤土上部 内赤	① Δ 1.8 ① 底 5.1	「八」の字状に強く凹みを持つ口縁部。凹部の透かし	調整ナデ 調整ナデ	調整ナデ 調整ナデ	底 良好	赤茶褐色 赤褐色	小塚-17
Pa50 31 6	赤土上部 内赤	① 底 10.5 ① Δ 1.5	直立する短い口縁部。	ナデ	ナデ	底、砂粒含む 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	塚-3 輸入か?
Pa51 31 6	赤土上部 内赤	① 底 12.4 ① Δ 3.4	外傾する複合口縁部。端部は大きい。	ナデ	ナデ	底 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-50
Pa52 31 6	土部 深緑	① 底 14.5 ① Δ 4.3	外傾する複合口縁部。端部は凹みになる。	ナデ	ナデ	底 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-51
Pa53 31 6	土部 深緑	① 底 12.6 ① Δ 3.6	外傾する複合口縁部。端部は凹みになる。	ナデ	ナデ	底 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-52
Pa54 31 6	土部 深緑	① 底 11.2 ① Δ 2.6	わずかに内傾して外傾する口縁部。端部内側 がわずかに凹みをつける。	ヨコナデ	ヨコナデ	底 良好	赤褐色 赤褐色	小塚-3

建物名 用途 図面番号	種別 部名	位置	形状上の特長	調 整		胎土 成	色 調 内 容	備 考
				外面	内面			
P055 21 6	十海壁	① 高 23.6 ② △ 3.0	西壁の外壁とする口縁部。境部の外角が更なる。	ナデ	ナデ	密 良好	黄茶褐色 野茶褐色	小塚-43
P06 31 5	俱巻部 高床	① △ 3.9 ② 高 8.9	西壁の外壁とする口縁部。境部の外角が更なる。端部外面に2本の縦いナデ。力形透かし。	調板ナデ	調板ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	塚-12
P07 31 5	土間貫土壁	① 高 4.9 ② △ 2.1 ③ △ 2.0	北壁の外壁とする口縁部。境部の外角が更なる。端部外面に2本の縦いナデ。力形透かし。	調板ナデ 底面調板ナデ	口縁部口縁ナデ 底面調板ナデ	密、1~2mmの砂粒を少量含む 良好	黄茶褐色 赤茶褐色	小塚-18
P08 31 5	土間貫土壁	① △ 1.0 ② 高 2.7	停止糸切りによる平瓦。	ナデ 底面調板ナデ	ナデ	密 良好	黄茶褐色 赤茶褐色	小塚-28
P09 31 5	十海壁	① △ 0.8 ② 高 3.4	停止糸切りによる平瓦。	ナデ 底面調板ナデ	調板ナデ	密 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-12
P60 24 5	上段貫土壁	① △ 2.0 ② 高 3.6	停止糸切りによる平瓦。	ナデ	ナデ	密 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-36
P61 31 5	十海壁	① △ 1.3 ② 高 4.1	停止糸切りによる平瓦。	ナデ 底面調板ナデ	ナデ	密 良好	黄褐色 黄褐色	小塚-6
P62 31 5	土間貫土壁	① △ 0.7 ② 高 4.2	停止糸切りによる平瓦。	ナデ 底面調板ナデ	調整ナデ	密 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-11
P63 21 5	上段貫土壁	① △ 9.7 ② 高 4.6	停止糸切りによる平瓦。	ナデ	中央部調整不可 縁部調整ナデ	密 良	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚 13
P64 31 5	土間貫土壁	① △ 1.6 ② 高 4.8	停止糸切りによる平瓦。	ナデ 底面調板ナデ	ナデ	密 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-47
P65 31 5	貫土壁	① 高 15.1 ② △ 4.8	口縁部は外壁とする。	調板ナデ	調板ナデ	密 良好	黄褐色 赤褐色	小塚-49
P66 31 5	瓦葺土壁	① 高 24.0 ② △ 2.0	口縁部は外壁とする。	1層調板ナデ 調整ナデハナ目	ハナ目	密 やや不良	灰白色 灰白色 黄褐色	小塚-32
P67 31 5	瓦葺土壁	① 高 24.8 ② △ 3.8	西壁の外壁とする口縁部。境部の外角が更なる。内面におかし。	ナデ	ナデ	密 良	黄褐色 赤褐色 黄褐色	小塚-41
P68 31 5	瓦葺土壁	① △ 2.4 ② 高 11.0	平瓦。内面におかし。	ナデ	ナデ	密 良	灰白色 灰白色 黄褐色	小塚-1
P69 31 5	簷口 部	① △ 2.8	口縁部が断面三角を呈する仕立て。	ナデ	ナデ	密 良好	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚 23
P70 21 5	側壁	① △ 1.3 ② 高 4.2	開口部出し再付。	鉄筋	厚板鉄筋 高台鉄筋	密 良好	黄褐色 黄褐色	小塚-42
P71 31 5	側壁	① △ 1.4 ② 高 4.6	開口部出し再付。砂土用。	鉄筋	厚板鉄筋、砂土用 高台鉄筋	密 良好	黄褐色 黄褐色	小塚-16
P72 31 5	側壁	① △ 2.1 ② 高 5.2	開口部出し再付。	鉄筋	厚板鉄筋 高台鉄筋	密 良好	黄褐色 黄褐色	小塚 19
P73 31 5	側壁	① △ 2.2 ② 高 5.5	開口部出し再付。	厚板鉄筋 高台鉄筋	鉄筋 高台鉄筋	密 良好	黄褐色 黄褐色	小塚-5
P74 31 5	側壁	① △ 1.8 ② 高 5.2	開口部出し再付。	鉄筋	厚板鉄筋 高台鉄筋	密 良好	黄褐色 黄褐色	小塚 4
P75 31 5	側壁	① △ 2.2 ② △ 4.5	開口部がわずかに外突する。	鉄筋	鉄筋	密 良好	黄褐色 黄褐色	小塚-35
P76 31 5	側壁	① △ 2.2 ② △ 4.6	内外面にセーファ不明な文様。	鉄筋	厚板鉄筋 高台鉄筋	密 良好	黄褐色 黄褐色	小塚-14
P77 31 5	手控土壁	① 高 3.7 ② 高 2.6	手控状。	鉄筋	鉄筋	密 良	赤茶褐色 赤茶褐色	小塚-37
P78 31 5	把手	① △ 6.0 ② △ 3.4 ③ △ 3.5	面取りあり。縁部入り。	鉄筋	鉄筋	密 良	黄褐色 黄褐色	小塚-8

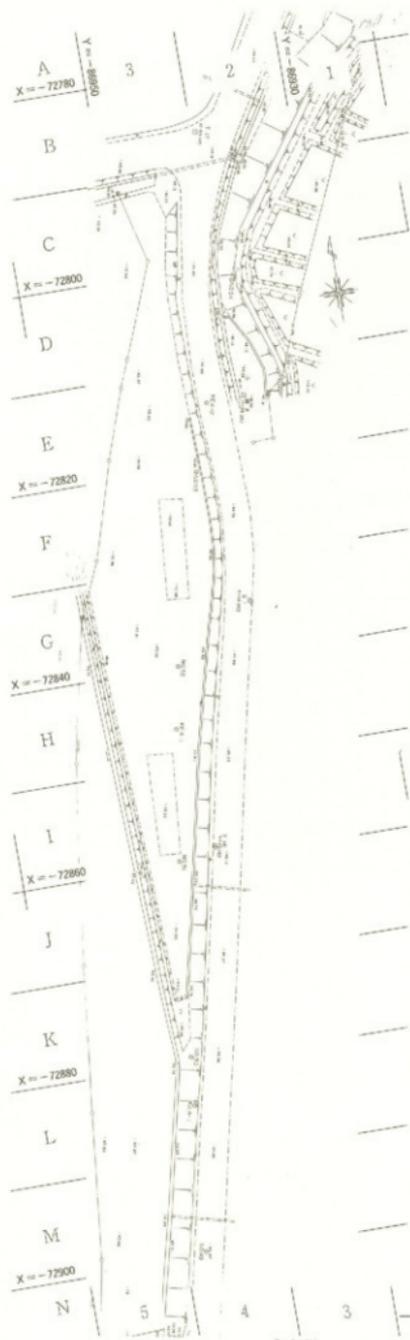
挿表8 石製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土位置	種類	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重	備考
S 1	19	3	149	S X-0 2	砥石	花崗岩質アブライト	12.5	2.5	2.3	105 g	畑-2
S 2	21	5	190	S X-0 1	火輪	雲母角閃石石英安山岩	33.9	32.0	17.9	24.0 kg	畑-8
S 3	22	5	196	S X-0 1	火輪	雲母角閃石安山岩	26.0	26.5	16.2	11.6 kg	畑-6
S 4	22	5	198	S X-0 1	火輪	雲母角閃石安山岩	27.1	28.4	15.2	12.5 kg	畑-5
S 5	22	5	200	S X-0 1	火輪	雲母角閃石石英安山岩	30.6	31.3	15.0	19.4 kg	畑-7
S 6	22	5	193	S X-0 1	火輪	雲母角閃石安山岩	34.2	33.5	22.3	25.6 kg	畑-9
S 7	22	5	194	S X-0 1	水輪	黒雲母角閃石安山岩		26.4	18.2	13.0 kg	小原-4
S 8	22	5	199	S X-0 1	水輪	黒雲母角閃石安山岩		28.8	18.6	15.0 kg	小原-2
S 9	22	5	197	S X-0 1	水輪	黒雲母角閃石安山岩		27.9	19.1	17.5 kg	小原-3
S 10	22	5	192	S X-0 1	水輪	角閃石安山岩		34.4	20.8	24.0 kg	小原-5
S 11	22	5	191	S X-0 1	地輪	黒粒角閃石黒雲母安山岩		27.0	17.8	19.7 kg	小原-6
S 12	22	5	195	S X-0 1	地輪	黒雲母角閃石石英安山岩		30.8	18.4	17.5 kg	畑-11
S 13	32	5	6	遺構外	石輪	安山岩質軽石凝灰岩	5.4	4.1	1.9	57 g	畑-1
S 14	32	5	1	遺構外	空風輪	大山系安山岩質火砕岩	22.7	16.0	16.2	4.5 kg	畑-3
S 15	32	5	28	遺構外	火輪	雲母角閃石石英安山岩	36.0	37.8	20.3	31.5 kg	畑-10
S 16	32	5	30	遺構外	火輪	雲母角閃石安山岩	26.4	25.9	13.3	12.0 kg	畑-4
S 17	32	5	29	遺構外	水輪	角閃石安山岩		28.2	18.2	16.5 kg	小原-1

挿表9 金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土位置	種類	素材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
F 1	21	5	154	S X-0 1	環状製品	鉄	9.4	0.8	0.7	畑-11
F 2	21	5	162	S X-0 1	環状製品	鉄	9.0	0.8	0.7	畑-13
F 3	21	5	155	S X-0 1	環状製品	鉄	9.5	0.8	0.7	畑-12
F 4	21	5	163	S X-0 1	環状製品	鉄	9.6	0.8	0.8	畑-14
F 5	21	5	157	S X-0 1	釘	鉄	2.2	0.3	0.3	畑-5
F 6	21	5	79	S X-0 1	釘	鉄	2.4	0.4	0.4	畑-2
F 7	21	5	159	S X-0 1	釘	鉄	3.2	0.3	0.3	畑-10
F 8	21	5	79	S X-0 1	釘	鉄	4.1	0.8	0.7	畑-1
F 9	21	5	159	S X-0 1	釘	鉄	4.5	0.6	0.3	畑-8
F 10	21	5	160	S X-0 1	釘	鉄	2.2	0.4	0.4	畑-7
F 11	21	5	158	S X-0 1	釘	鉄	2.0	0.5	0.4	畑-6
F 12	21	5	79	S X-0 1	釘	鉄	2.4	0.3	0.3	畑-4
F 13	21	5	159	S X-0 1	釘	鉄	3.0	0.4	0.3	畑-9
F 14	21	5	79	S X-0 1	釘	鉄	2.4	0.4	0.4	畑-3
C 1	32	6	41	遺構外	煙管	銅	5.2	0.9	1.2	畑-15

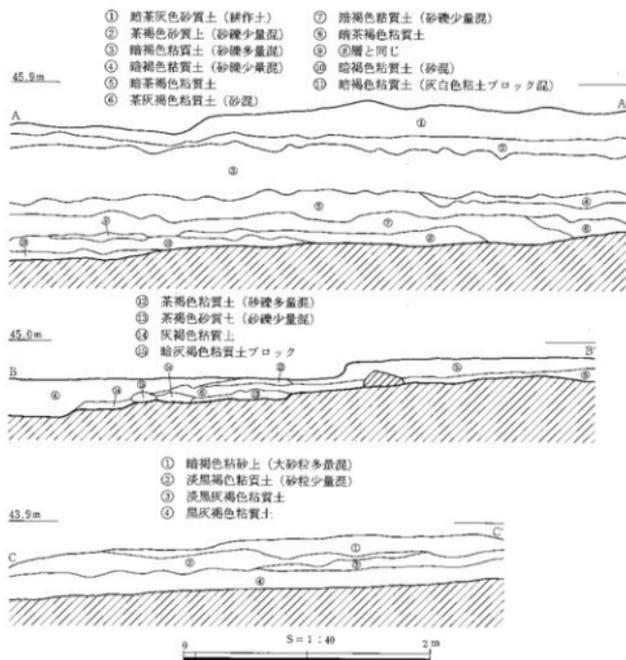
第4章 御内谷向田遺跡の調査



挿図33 調査前地形測量図



挿図34 全体遺構図



挿図35 調査地土層図

御内谷向田遺跡は、東に伸びる丘陵の谷筋先端部に位置する。調査地は、農道を挟み南北に別れる。北側は標高45.5m付近に位置し畑地として、南側は標高44.0m付近に位置し水田として利用されていた。検出した遺構は土坑5、溝状遺構2、道状遺構1、ピットである。ここでは各遺構について調査の結果を述べる。

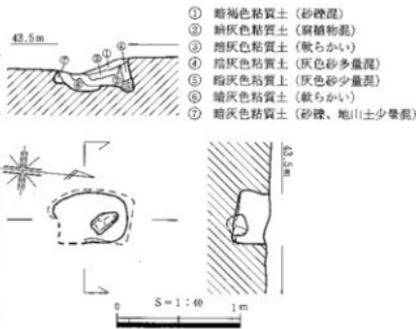
第1節 土坑

SK-01 (挿図36)

位置 J-5グリッド中央に位置し、調査地のほぼ西端で検出した。本遺構の北側約4mにSK-03、南側約4mにSK-02が位置する。埋土は7層に分層できた。基本となる埋土は、砂あるいは腐植物を含む粘質土である。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な隅丸長方形を呈し、断面形は土坑壁面をやや横に掘り拡げているため台形状となる。南側を杭列によって切られる。規模は土坑最大部分で長軸0.62m×短軸0.41m、底面で長軸0.70m×短軸0.43m、底面までの最大の深さは0.32mを測る。

遺物 土坑底面に張りつくように礫が1点出土したのみで、他に遺物は認められなかった。同様の礫が遺構の南西側に散在してい



挿図36 SK-01遺構図

たことから、本遺構に伴うものではなく、後に混入したものであろう。

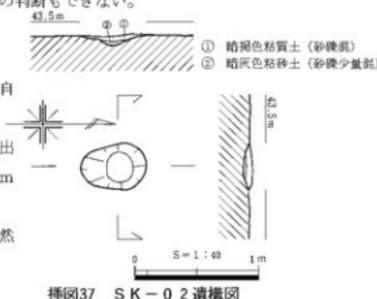
時期・性格 時期を推測する判断材料もなく、形態・埋土からは性格の判断もできない。

SK-02 (挿図37)

位置 J-5グリッド南端に位置する。埋土は2層に分層できたが、自然堆積によるものであろう。

形態 平面形は不整な楕円形を呈し、断面形は皿状となる。規模は検出面で長軸0.54m×短軸0.38mを測る。底面までの深さは最大でも0.07mと非常に浅い。

時期・性格 遺物は出土しておらず時期は不明であるが、形態から自然地形の窪地である可能性もある。



挿図37 SK-02遺構図

SK-03 (挿図38・40 図版7・8)

位置 M-5グリッド中央、調査地の南端付近に位置する。遺構の西側は調査地境にかかる。埋土は22層に分層できた。調査地境付近はほとんど水田耕作による荒乱をうけている。基本となるのは淡黒褐色～暗褐色の粘質土である。また底面は灰色の粗い砂となる。

形態 平面形は不整な楕円形である。断面形は底面がいびつであるためはっきりしないが、不整な隅丸長方形・道台形を呈する。規模は検出できた範囲で長軸7.70m×短軸2.50mを測り、底面までの深さは最大で0.60mとなる。

遺物 埋土中より縄文土器が出土した。そのうちP01～3を図化した。遺物はいずれも底面から浮いた状態で出土しており、遺構の時期を表すものではない。

時期・性格 判断材料に乏しく、不明である。



挿図38 SK-03遺物実測図

SK-04 (挿図39・40 図版7・8)

位置 I-5・J-5グリッドを中心とし、遺構西側は調査地境にかかる。本遺構の北側約4mにはSC-01が、南側約4mにSK-01が位置する。埋土は56層に分けられ、遺構の中央部分は下から砂～粘質土の順に、壁面付近ではシルト～粘質土の順に堆積している。また、中央部分は目の粗い砂と細かい砂が互層状になっている。底面は青灰色粘土である。

形態 平面形態はややいびつではあるが半円形を呈し、断面形は隅丸長方形で西側にむけて深くなる。規模は検出できた範囲で長軸5.15m×短軸2.50mを測り、底面までの深さは最大で0.84mとなる。

遺物 ①層中から縄文土器P04が出土したが、本遺構の時期を表すものではない。

時期 ①層は調査地東西断面の②層にあたる。東西断面②層は遺物を包含しており、最も時期の下る遺物として土師器甕P031・32がある。よって本遺構が完全に埋没したのは少なくとも奈良時代以降と思われる。

性格 当初、遺構の形態から土坑と想定していたが、埋土は砂・シルトを中心としており、水の影響を受けていたことがわかる。部分的にしか検出できなかったが、本来は自然河川状のものであろう。SK-03でも砂の堆積が見られ、他の埋土や形態が類似することを考えれば、同一の遺構であった可能性もある。



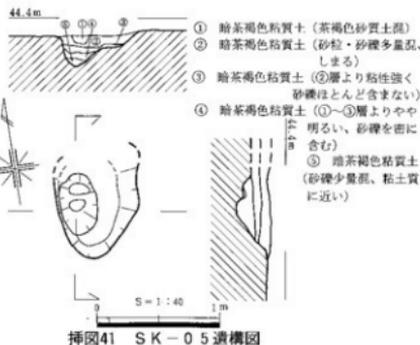
挿図39 SK-04遺物実測図

SK-05 (挿図41)

位置 C-2グリッド南端で検出し、本遺構の南東側約3mにはP2が、北側約6mにはSD-02が位置する。埋土は5層に分層でき、暗茶褐色粘質土を基本とする。

形態 平面形は不整な楕円形を呈する。東側の壁面は平坦面をもち緩やかに立ち上がるが、西側は急に立ち上がるため、断面形はいびつなV字状あるいは逆台形状となる。検出できた範囲で、長軸約1.0m×短軸0.66mを測り、底面までの深さは最大で0.24mである。

時期・性格 遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



挿図41 SK-05 遺構図

第2節 溝状遺構

SD-01 (挿図42)

位置 C-1グリッド北端で検出し、本遺構の南側約4mにはSD-02が位置する。埋土は3層に分層でき、基本は暗灰色のシルトである。

形態 遺構の西側が調査地外へと伸びるため正確な規模は不明だが、検出できた範囲で全長2.26m、幅0.72m~1.06m、深さは最大で0.12mである。遺構の走向はN-20°-Wである。

時期・性格 遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

SD-02 (挿図43)

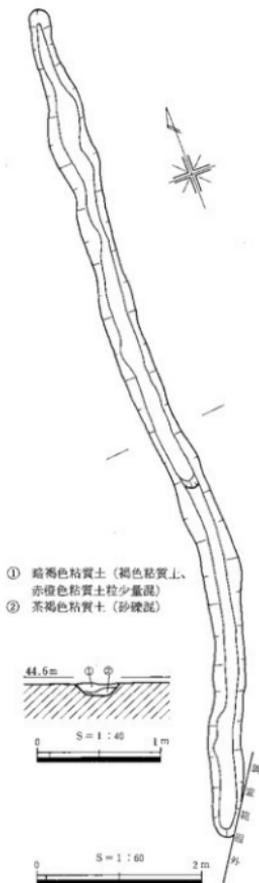
位置 B-1・C-1グリッドにまたがり、南側がやや蛇行するが、ほぼ真っ直ぐに伸びる溝である。標高44.3m~44.7mに位置し、北西に向けて緩やかに下る。埋土は2層に分層でき、暗褐色・茶褐色の粘質土である。

形態 遺構の南側が調査地外へと伸びるため正確な規模は不明だが、検出できた範囲で全長10.4m、幅0.24~0.63m、深さは最大でも0.12mと非常に浅い。遺構の走向はN-2°~18°-E、N-7°-Wである。

時期・性格 遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。北側のSD-01と形態・埋土ともに異なるため、何らかの遺構群を形成していたとも考えにくい。



挿図42 SD-01 遺構図



挿図43 SD-02 遺構図

第3節 道状遺構

SC-01 (挿図44~46 図版7・8)

位置 E-3及びH・I-4グリッドにまたがって検出された。標高43.2m~43.4mに位置し、北東-南西方向に縦断するようなかたちで調査地外へと伸びる。埋土はほぼ単層で、暗茶灰色粘質土を基本とする。

形態 検出できた範囲から推測すると、全長42m以上、東側溝で幅0.24m~0.80m、西側溝で幅0.28m~0.72m、深さは両側溝とも0.10m前後と浅い。側溝間の幅は北側が広く1.50m、南側は0.60m~0.70mと一定でないものの、埋土・側溝の形態から同一の遺構であろう。両側溝が浅いのは圃場整備による削平を受けているためとも考えられ、土盛り・敷石等の土木工事的な痕跡は認められなかった。遺構の走向は、北側がN-36°-E、南側がN-7°~14°-Eである。

遺物 肥前系陶器の皿P05と須恵器片が側溝底面より出土した。P05は内面を下に向けた状態であった。砂目積み段階で17世紀前半の所産である。埋土中には陶磁器の破片が見られた。これらはいずれも混入したものであろう。

時期 底面より出土したP05から17世紀前半頃の遺構である。

性格 集落と耕作地とを結ぶような農道の役割を果たしたものと考える。また、このまま北方に伸びれば金田家ノ脇遺跡のSS-01とつながる可能性もあるが、構造の違いもあり、時期が明確でないこともあわせ、推測の域をでない。

第4節 ビット

ビット (挿図45)

調査地内より検出したビットはわずか2個である。P1についてはSC-01に関連するものであろうが、その機能については不明である。P2については他の遺構との関連性は見出せなかった。遺物も出土しておらず時期も不明である。

第5節 遺構外の遺物

遺構外出土遺物 (挿図47・48 図版8)

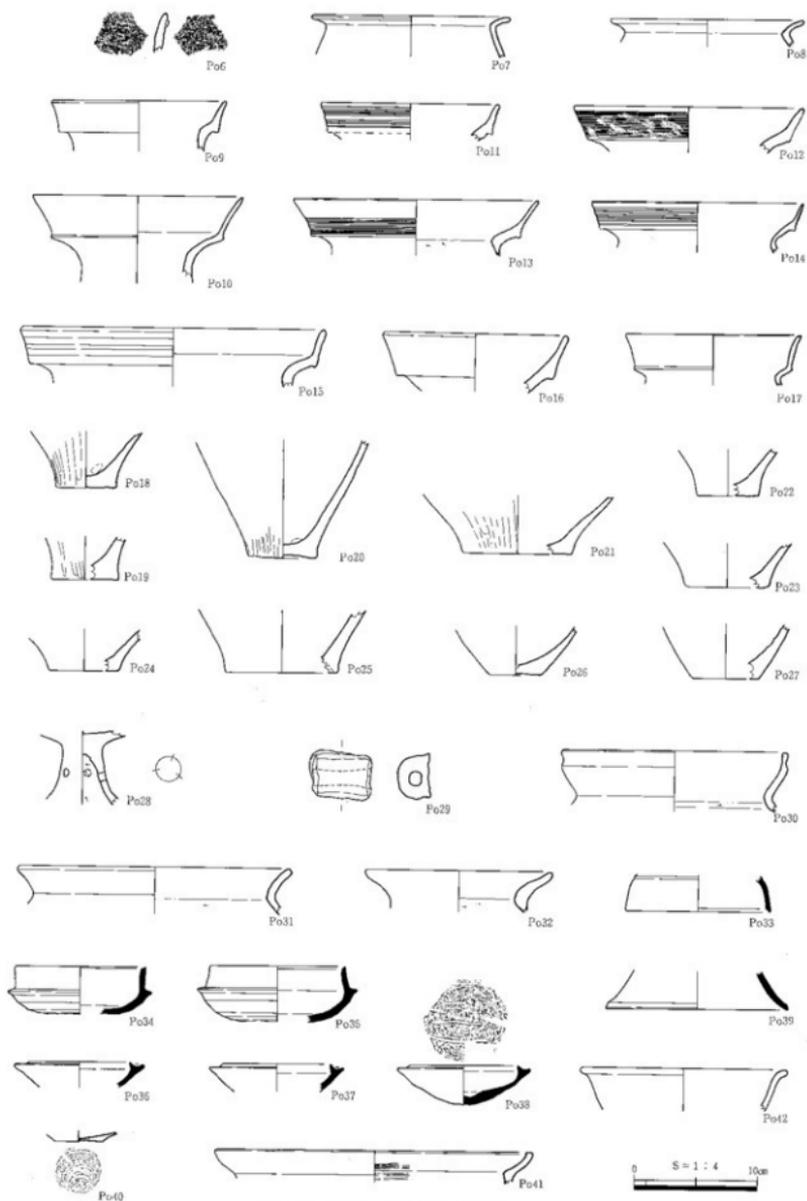
出土遺物は須恵器・陶磁器以外は全体的に風化が著しく、文様・調整等の残りは良くない。

P06は縄文時代晩期後半の突帯土器で、口縁部に刻みの入った突帯がめぐる。内外面とも風化が進んでいるが、ナデ調整であろう。

P07・8は弥生時代中期中葉の甕で、端部はつまみあげずに丸くおさめる。P09~17は複合口縁をもつ土器群である。P09・10は甕である。P09は口縁部外面に櫛状工具による文様は見られず、ヨコナデのみである。P010の口縁部は外傾しながら直線的にのびる。口縁部はつまみ出すようにして終わる。P011~17は甕である。11~14には口縁部に多糸平行沈線文が施される。P011・14は櫛状工具、12・13はハケ状工具によるものであろう。P017は器壁も薄くシャープなつくりで、口縁部は外側へつまむようにして仕上げ、面をもつ。P010・17は弥生時代終末~古墳時代初頭、それ以外は弥生時代後期後葉に位置づけられる。

P018~27は底部である。P018~21には外面にヘラミガキが確認できた。内面調整が不明であるが、外面調整・形態から弥生時代中~後期のものか。P026・27は底部と胴部の稜があまく、径も小さい。平底が尖底(丸底)化する直前の段階、弥生時代終末期のものであろう。P028は高坏で、脚柱部には3方向に円形透かしが入る。P029は甕形土器の把手である。小型で、ナデ調整によって仕上げられる。

P030~32は土師器製の口縁部である。P030は複合口縁が退化し、全体的に丸みを帯びる。



挿図47 遺構外出土物実測図(1)

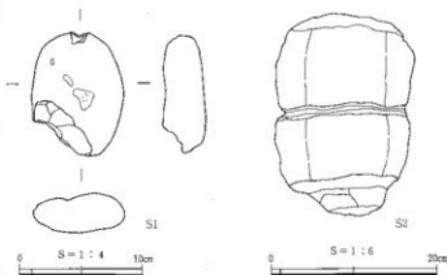
Po33は須恵器の杯蓋、34~38は坏身、39は脚部である。

Po40は土師質土器の皿で、底部に回転糸切りが確認できた。

Po41は瓦質鍋で、口縁部は屈曲して立ち上がり、内面をハケ調整する。13世紀代のものである。

Po42は青磁碗である。

S1は石錘である。扁平な不整形円形を呈し、両端を打ち欠くものと思われるが、片方を欠損している。



押図48 遺構外出土遺物実測図(2)

S2は五輪塔の空風輪部である。磨滅・欠損しているため全体の形状が明らかでないが、残存している部分を見ると空・風輪とも側面の張りが弱くやや直線である。

挿表10 土坑・土壌基一覧表

遺構名 SK	挿図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸×短軸)cm		深さ cm	長軸方向	遺物	時期	備考
					検出面	底面					
01	36		J-5	不整な隅丸長方形	62×41	70×43	32	N-5°-E	礎		
02	37		J-5	不整な楕円形	54×38	25×22	7	N-2°-W			
03	38・40	7・8	M-5	不整な楕円形	770×250	310×92	60	N-8°-E	縄文土器		
04	39・40	7・8	I・J-5	半円形	515×250	370×242	84	N-5°-W	縄文土器	奈良時代以降	
05	41		C-2	不整な楕円形	100×66	13×10	24	N-10°-E			

挿表11 溝状遺構一覧表

遺構名 SD	挿図番号	図版番号	規模(m) 全長×幅×深さ	遺物	時期	備考
01	42		2.26×0.72~1.06~0.12			
02	43		10.38×0.24~0.63~0.12			

挿表12 道状遺構一覧表

遺跡名	所在地	遺構名	幅(m)	形状	高さ△ 深さ▽(m)	波板状 凹凸度	側溝規模・形態 (m)	性格	時期	備考
御内谷向田遺跡	鳥取県西伯郡会見町字御内谷	SC-01	1.1~2.1	C		0	① 0.24~0.80~0.10 ② 0.28~0.72~0.10	生活道路か	近世後半?	

挿表13 ビット一覧表

ビット 番号	グリッド	規模(長軸×短軸 深さ) cm	層	土色・土質	柱礎 有無	遺物	備考
1	H-4	36×24-13	1	暗赤灰色粘質土	×		
2	D-2	39×32-13	2	① 暗褐色粘質土(粗粒わずかに含む) ② 暗茶灰色粘質土(粗粒多量混)	×		

SK-03

挿表14 土器観察表

遺物番号 挿図番号 図版番号	陶器 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調整 外面	調整 内面	胎土 産地	色調 丹州 河内	備考
Po1 38 8	縄文土器 深鉢	① 八 3.0	口で足縁に立ち上がる口縁部。口縁下に彫みが入った突帯がめぐる。口唇部にも彫み目を施す。	ナデ	ナデ	奈良	淡褐色 淡褐色	様-16

造物番号 詳細番号 図版番号	種類 名称	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 装 調 整		塗 土 塗 成	色調 外面 内面	備 考
Po 2 36 8	腐土土器 深鉢	① △ 2.8	直立外縁に立ち上る口縁部。口縁部下に耳みが入った突帯がある。	ナゲ	風化のため調整不明	密 不灰	淡茶褐色 淡茶褐色	図-17
Po 3 38 8	腐土土器 深鉢	① △ 2.7	やや外傾して立ち上る口縁部。口縁部外面を僅かに肥厚させ、耳みを入れる。口唇部にも耳みを入れる。	風化のため調整不明	風化のため調整不明	密。1~2mmの石灰を含む やや不灰	淡褐色 淡褐色	図-18

SK-04

造物番号 詳細番号 図版番号	種類 名称	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 装 調 整		塗 土 塗 成	色調 外面 内面	備 考
Po 4 39 8	腐土土器 深鉢	① △ 4.8	やや内傾して立ち上る口縁部。口縁部下に耳みが入った突帯がある。	短いナゲ	風化のため調整不明	密。砂粒を多く含む 良好	淡褐色 淡褐色	図-15

SC-01

造物番号 詳細番号 図版番号	種類 名称	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 装 調 整		塗 土 塗 成	色調 外面 内面	備 考
Po 5 40 8	陶器 底鉢	① △ 1.6 ② 4.0	浅台を削り出して取捨の底鉢。足込みには砂目縁が3ヶ所存在せられる。底面外面に算状の黒色顔料が施す。	底面露胎 縁は無胎	加飾	膩密 良好	外面黒胎 茶褐色 内面露胎 灰色、黒胎部 灰白色	図-15

遺構外

造物番号 詳細番号 図版番号	種類 名称	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 装 調 整		塗 土 塗 成	色調 外面 内面	備 考
Po 6 47 8	腐土土器 深鉢	① △ 3.3	やや外傾しながら立ち上る口縁部。口縁部底下に突帯をめぐらす。	風化のため調整不明	風化のため調整不明	密。1~2mmの砂粒を多く含む 良好	淡茶褐色 淡茶褐色	山崎-4
Po 7 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 16.2 ② △ 3.4	短く「J」字形に屈曲して開く口縁部。口縁部縁はまるくおさめる。	口縁→器部 ココナデ	口縁部ココナデ 以下風化のため調整不明	密。1~2mmの石灰を含む 良好	褐色 褐色	図-4
Po 8 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 15.8 ② △ 3.2	短く「J」字形に屈曲して開く口縁部。口縁部縁はまるくおさめる。	口縁→器部 ココナデ	風化のため調整不明	密。砂粒を多く含む やや不灰	褐色 褐色	図-5
Po 9 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 14.1 ② △ 4.2	外傾する複合口縁。口縁上部はややつまみ出すようにしておさめる。口縁下部の縁はあまりない。	ココナデ	ココナデ	密。砂粒を多く含む やや不灰	褐色 褐色	図-2
Po 10 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 17.0 ② △ 7.1	上方へのびる頸部から外傾して、外傾しながら立ち上る複合口縁。口縁部縁はつまみ出して締まる。	風化のため調整不明	風化のため調整不明	密 良	淡茶褐色 淡茶褐色	山崎-10
Po 11 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 14.4 ② △ 3.1	外傾する複合口縁。口縁下部の縁は欠損している。外面に7条以上の平行縦文を施す。	ココナデ	ココナデ	密。0.5mm内外の砂粒を含む	淡茶褐色 淡茶褐色	山崎-3
Po 12 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 18.4 ② △ 3.8	外傾して短く立ち上る複合口縁。口縁下部には縁をもたない。外面には18条の平行縦文を施す。陶文原形はハテ工具か。	ココナデ	ココナデ	密。砂粒を含む 良好	黄褐色 黄褐色	内面に黒胎あり 図-7
Po 13 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 19.8 ② △ 4.6	くの字に屈曲する頸部から外傾して立ち上る複合口縁。口縁部縁はつまみ出すようにして成形したため厚くなる。外面に10条以上の平行縦文を施すが上平はナゲ削られる。	ココナデ	口縁部ココナデ 縁部は左方向のハテグズ	密。0.5~2mmの砂粒を含む 良好	淡茶褐色 淡茶褐色	山崎-2
Po 14 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 17.1 ② △ 4.1	外傾する頸部から外傾して立ち上る複合口縁。口縁下部の縁は鈍め下方に突出する。外面に6条の平行縦文を施す	ココナデ	ココナデ	密。1~2mmの砂粒を多く含む やや不灰	淡茶褐色 淡茶褐色	山崎-9
Po 15 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 20.4 ② △ 4.8	外傾する頸部から外傾して立ち上る複合口縁。口縁下部の縁は下平する。外面は欠損がある。	口縁部は風化のため調整不明 加飾ココナデ	口縁部ココナデ 縁部は風化のため調整不明	密。砂粒を含む やや不灰	黄褐色 黄褐色	図-6
Po 16 47 8	弥生土器 深鉢	① 縦 14.8 ② △ 4.8	外傾する口縁部。口縁下部の縁は下平するがあまりない。	風化のため調整不明	風化のため調整不明	密。1~3mmの石灰を含む 良	黄褐色 黄褐色	図-1

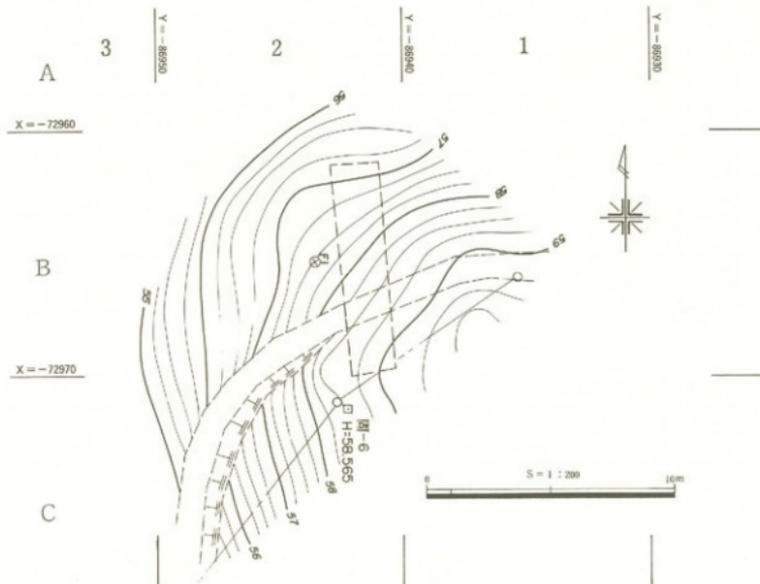
遺物番号 跡目番号 図章番号	種類 名称	法量 (mm)	形態上の特徴	外面	内面	結 核 成	色調 外面 内面	備考
Pa17 47 8	赤生土器 甕	① 戻 14.2 ② △ 4.3	やや外反気味に立ち上がる縦食口縁。口縁端部は円縁状に窪む。	風化のため調整不明	口縁部ココナデ 胎子は風化のため調整不明	密 不密	灰褐色色 淡赤褐色	山崎-8
Pa18 47 8	赤生土器 底部	① △ 4.6 ② 戻 4.8	平底。底面から外反気味に立ち上がる。	底面ナデ 胎子にかけてはナデ方向のヘラミガキ	底面指押さえ 胎子は風化のため調整不明	密。1~2mmの石灰を多く含む	淡赤褐色 淡赤褐色	小原-1
Pa19 47 8	赤生土器 底部	① △ 3.6 ② 戻 5.4	平底。底面から外反気味に立ち上がる。	底面ナデ 胎子は風化のため調整不明	風化のため調整不明	密 良好	赤褐色 灰色	小原-4
Pa20 47 8	赤生土器 胴部~底部	② △ 9.9 ③ 戻 5.6	やや上げ底となる平底。底面から外側して直線的にのびる胴部。	底面指押さえ 胎子ヘラミガキ 胴部は風化のため調整不明	底面指押さえ 胎子は風化のため調整不明	密。0.5~3mmの砂粒を含む	赤褐色 茶褐色	外田黒塚有 り山崎-7
Pa21 47 8	赤生土器 底部	② △ 4.8 ③ 戻 8.9	平底。底面から緩やかに開きながら立ち上がる。	底面ナデ 胎子ナデ方向のヘラミガキ	風化のため調整不明	密 良好	淡赤褐色 淡赤褐色	山崎-5
Pa22 47 8	赤生土器 底部	① △ 4.0 ② 戻 5.0	平底。底面から外反気味に立ち上がる。	底面ナデ 胎子は風化のため調整不明	風化のため調整不明	密。1~2mmの石灰を多く含む	赤褐色 茶褐色	小原-3
Pa23 47 8	赤生土器 底部	① △ 3.8 ② 戻 6.8	平底。底面から外反気味に立ち上がる。	風化のため調整不明	風化のため調整不明	密。2~3mmの砂粒を含む	淡赤褐色 淡赤褐色	小原-5
Pa24 47 8	赤生土器 底部	① △ 3.5 ② 戻 5.8	平底。底面から外反気味に立ち上がる。	風化のため調整不明	風化のため調整不明	密 やや小良	淡褐色 淡褐色	小原-6
Pa25 47 8	赤生土器 底部	① △ 5.1 ② 戻 9.2	平底。底面から外反気味に立ち上がる。	風化のため調整不明	風化のため調整不明	密 良	淡赤褐色 茶褐色	小原-7
Pa26 47 8	赤生土器 底部	① △ 4.0 ② 戻 4.2	平底。底面から外側して立ち上がる。	底面ナデ 胎子は風化のため調整不明	風化のため調整不明	密。1~4mmの石灰を多く含む やや小良	赤褐色 茶褐色	小原-2
Pa27 47 8	赤生土器 底部	② △ 4.5 ③ 戻 5.4	平底。底面から外側して立ち上がる。	風化のため調整不明	上方向のヘラミガキ	密。1~5mmの石灰を少し含む 胎	淡赤褐色 淡赤褐色	小原-8
Pa28 47 8	赤生土器 高杯	② △ 6.1	縁が縁やかに窪む胴部。胴中央に3ヶ所円形窪みを入れる。	風化のため調整不明	胴部左方向のヘラミガキ 胴部右側近側め上方向のヘラミガキ	密	淡赤褐色 淡赤褐色	小原-11
Pa29 47 8	把手	① 3.8 ② 5.1 ③ 2.5	長方形の把手。覆形土器のものか。	ナデ	不明	密。1mm内外の砂粒を多く含む 良好	淡赤褐色 淡赤褐色	山崎-6
Pa30 47 8	土師器 甕	① 戻 7.9 ② △ 4.9	胴部から内反気味に立ち上がる退化した縦食口縁。胎子は厚薄し、やや平坦となる。	ココナデ	口縁部ココナデ 胎子右方向のヘラミガキ	密。0.5~1mmの砂粒を含む 良好	淡赤褐色 淡赤褐色	山崎-1
Pa31 47 8	土師器 甕	① 戻 21.0 ② △ 3.8	縁が縁やかに「く」字状に折れて直線的に開く口縁部。胎子は平坦となる。	ココナデ	口縁部ココナデ 胎子左方向のヘラミガキ	密。0.5~3mmの砂粒を含む	黄褐色 黄褐色	山崎-12
Pa32 47 8	土師器 甕	① 戻 15.0 ② △ 3.4	立ち上がりは緩く、胎子は直線的に開く口縁部。胎子は厚くおきめる。	ココナデ	口縁部ココナデ 胎子右方向のヘラミガキ	密。砂粒を含む	褐色 褐色	山崎-3
Pa33 47 8	須恵器 坏	① 戻 11.6 ② △ 3.9	大耳部欠損。大耳部と体部の境に横口縁部が内側に緩やかな角をもつ。	回転ココナデ	回転ココナデ	密 良	灰褐色 灰褐色	山崎-13
Pa34 47 8	須恵器 坏	① 戻 10.5 ② △ 3.9	立ち上がりは直立し、胎部は1本の凹線により段をなす。受部は水平方向にのびる。胎部は直線平直。	胎部下半部2/3以下時計回りの回転ヘラミガキ 胎部は回転ココナデ	回転ココナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	山崎-9
Pa35 47 8	須恵器 坏	① 戻 10.9 ② △ 4.8	立ち上がりはやや内傾し、胎部は上方へつまみ出すようにしておきめる。受部は水平方向にのびる。胎部は直線平直。	胎部下半部2/3以下時計回りの回転ヘラミガキ 胎部は回転ココナデ	回転ココナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	山崎-8
Pa36 47 8	須恵器 坏	① 戻 8.2 ② △ 2.1	立ち上がりは直く、内傾する。胎部はつまみ出すようにしておきめる。受部はやや上方へのびる。	回転ココナデ	回転ココナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	山崎-10
Pa37 47 8	須恵器 坏	① 戻 8.6 ② △ 2.3	立ち上がりは直く、内傾する。胎部はつまみ出すようにしておきめる。受部はやや上方へのびる。	回転ココナデ	回転ココナデ	密 良	灰褐色 灰褐色	山崎-11

遺物番号 検出番号 図版番号	種類 器種	出来 (cm)	形態上の特徴	胴		軸上 装束	色調 外面 内面	備考
				外面	内面			
Po38 47 8	深鉢形 杯身	① 深 8.7 ② 3.3	立ち上がりは急く、内傾する。深部はつまみ出すようにしておさめる。受部はやや上方へのびる。	底面はへり切り状のナゲナゲ用し他は回転ココナゲ	底面は不整方向ナゲ回転ココナゲ	雲 良釘	灰褐色 灰褐色	図-12
Po39 47 8	深鉢形 胴部	② へ 3.2 ① 深 14.7	「へ」字状に開く部(胴)部。	回転ココナゲ	回転ココナゲ	雲 良釘	灰褐色 灰褐色	図-14
Po40 47 8	土師質土器 皿	① △ 6.9 ① 3.9	低い小皿の形の底面。	底面回転水切り 型は回転ナゲ	回転ナゲ	密。1~3mmの石実を僅かに含む 良釘	砂褐色 微褐色	小塚-9
Po41 47 8	瓦質土器 碗	① 深 26.0 ② △ 2.6	口縁上平部の基部が受け状を呈する。	ナゲ	口縁部ナゲ 口縁部下子から基部はコハケ	雲 良	淡青褐色 淡黄褐色	山崎-11
Po42 47 8	青磁 碗	① 深 16.4 ② △ 3.6	口縁部は外反する。	加輪	加輪	緑密 良好	海狗頭うぐいす色。裏面微褐色	山崎-10

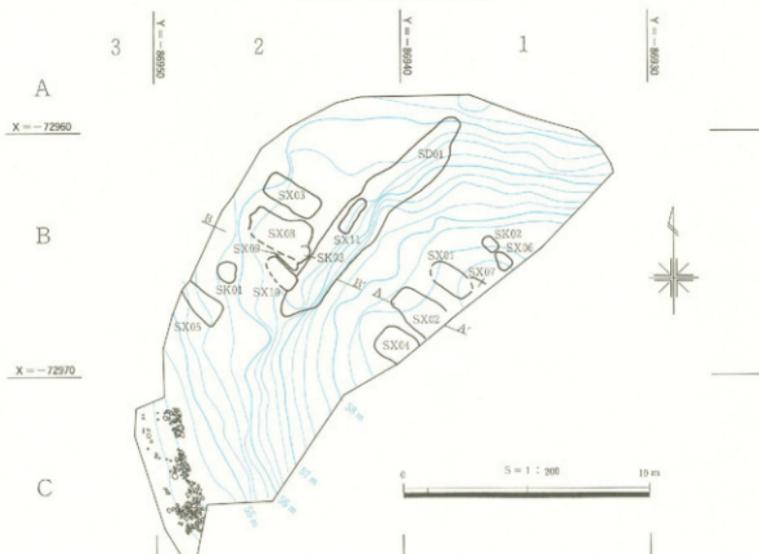
坪表15 石製品観察表

遺物番号	検出番号	図版番号	取上番号	出土位置	種類	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重	備 考
S 1	48	8	16	遺構外	石鏡		4.1	3.8	1.8	41.4 g	図-1
S 2	48	8	10	遺構外	空風輪	黒雲母角閃石安山岩	25.0	16.7	14.2	4.5 kg	山崎-1

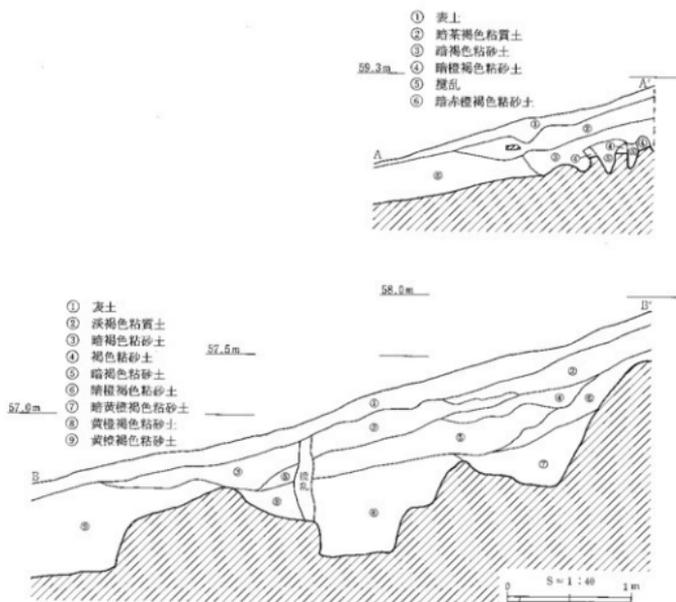
第5章 御内谷妙見塔遺跡の調査



挿図49 調査前地形測量図



挿図50 全体遺構図



挿図51 調査地土層図

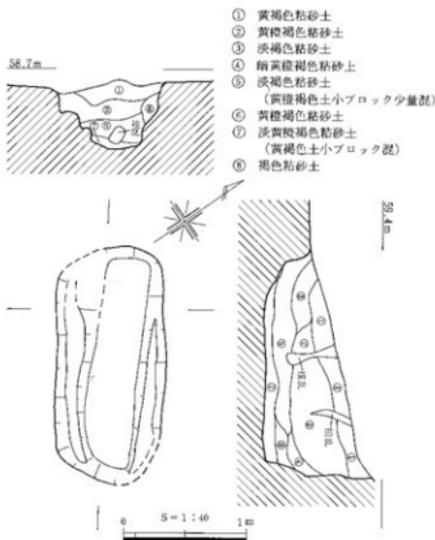
第1節 土坑・土壌墓

SX-01 (挿図52 図版10)

位置 調査地の東側、B-1グリッド西側で、尾根筋を区画するSD-01の南東側の標高58.8m付近に位置する。南東隅がSX-07と切り合いが前後関係は不明である。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形を呈する。規模(長軸×短軸)は、検出面(195×92)cm、底面(172×40)cm、底部までの残存最大深は76cmを測る。長側壁には段状の部分があり、2段掘りを意図している。埋土は7層以上に分層できる。上層等に明確な痕跡は残っていないが、土壌墓ないし木棺直葬墓と考えられ、土坑の形態からは木棺直葬墓の可能性が強い。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。



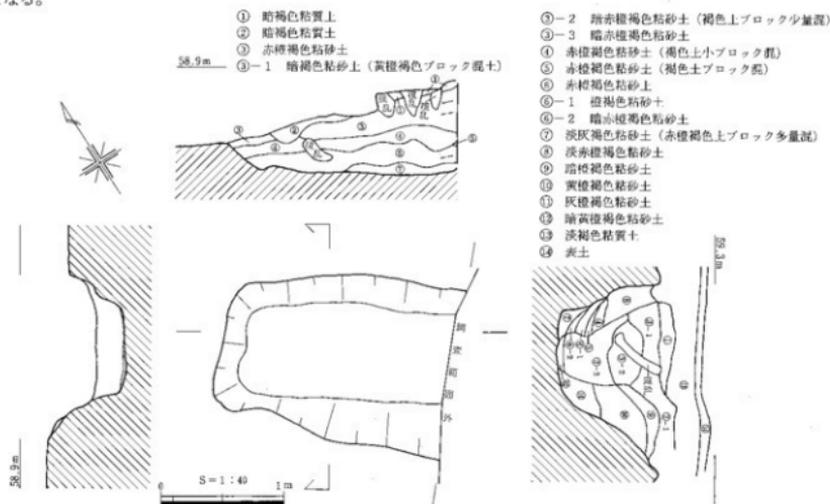
挿図52 SX-01遺構図

SX-02 (挿図53 図版9)

位置 調査地の東側、B-1グリッド南西側で、尾根筋を区画するSD-01の南東側の標高58.8m付近に位置する。SX-01と長軸方向がほぼ平行する。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形を呈するが、南東側が調査地外に伸びるため明確ではない。調査規模（長軸×短軸）は、検出面（199×138）cm、底面（169×79）cm、底部までの残存最大深は83cmを測る。埋土は12層以上に分層できる。土層中の③-2・3層は木棺に由来すると考えられ、木棺直葬墓と推測される。

出土遺物 遺構内からは遺物は出土していないが、遺構上方の表土層中から弥生土器の甕が出土した（挿図67参照）。この遺構に伴う土器ではないと判断したが、下限として考えるならばこの遺構の時期は弥生時代終末期以前となる。



挿図53 SX-02遺構図

SX-03（挿図54 図版10）

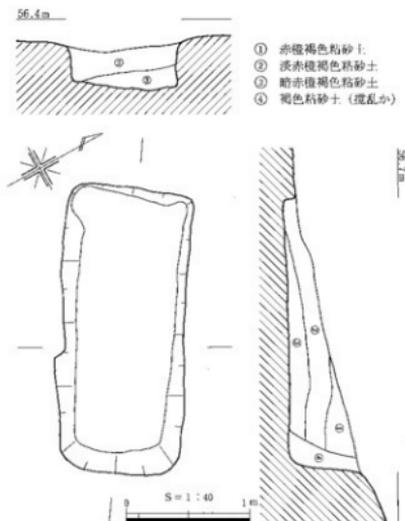
位置 調査地の北西側、B-2グリッド北側で、尾根筋を区画するSD-01の北西側の標高56.5m付近に位置する。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形を呈する。規模（長軸×短軸）は、検出面（234×103）cm、底面（211×81）cm、底部までの残存最大深は72cmを測る。埋土は3層以上に分層できる。土層等に明確な痕跡は残っていないが、土壇墓なし木棺直葬墓と考えられる。

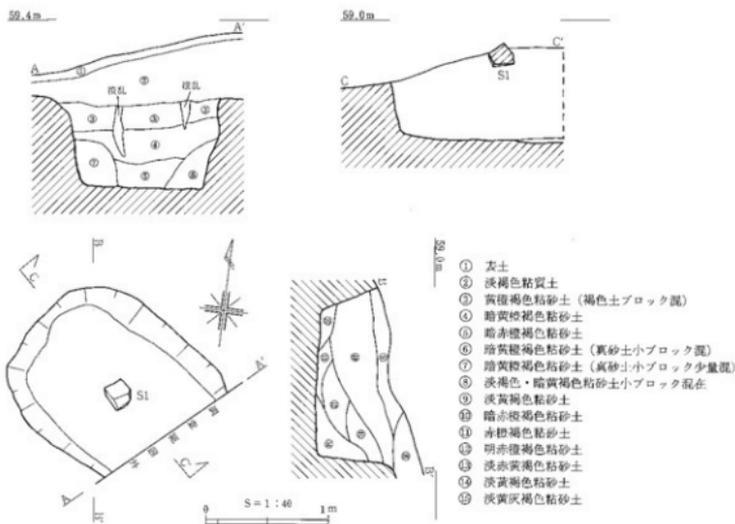
出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

SX-04（挿図55・56 図版9）

位置 調査地の南東側、B-2グリッド南東隅を中心とし、尾根筋を区画するSD-01の南東側の標高58.7m付近に位置する。会見町教育委員会の試掘調査でSK-01とされたものである。



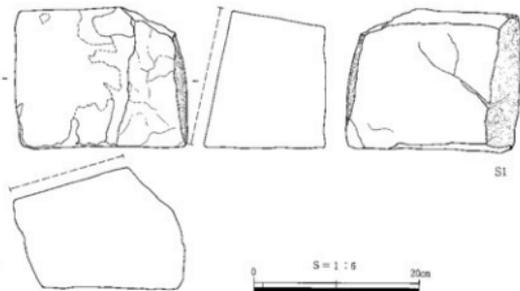
挿図54 SX-03遺構図



挿図55 SX-04遺構図

形態 平面形は検出面・底面ともに長形状を呈するが、南東側が調査地外に伸びるため本来の形態は明確ではない。調査規模(長軸×短軸)は、検出面(142×135)cm、底面(131×105)cm、底部までの残存最大深は74cmを測る。埋土は12層以上に分層できる。土層中の③層は木棺に由来し、⑥・⑦層はその裏込め土と考えられることから木棺直葬墓と推測される。

出土遺物 検出面から擦り面を持つ角礫が出土した。周囲からは御内谷神社に関する陶磁器類なども出土しており、この遺構に伴わない可能性も残る。時期は不明である。



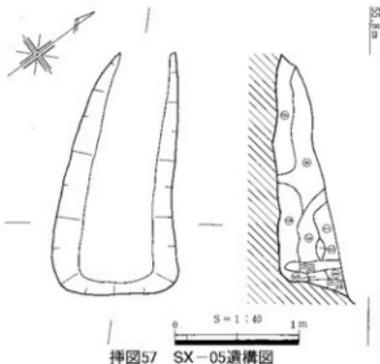
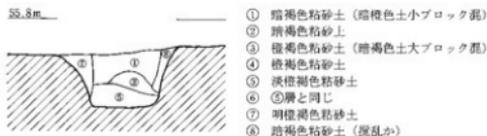
挿図56 SX-04遺物実測図

SX-05 (挿図57 図版10)

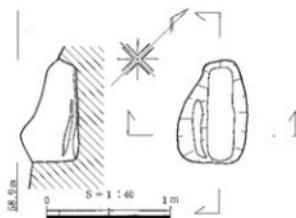
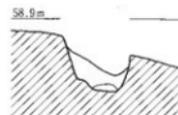
位置 調査地の西側、B-2グリッド南西寄り、尾根筋を区画するSD-01の西側の標高55.7m付近に位置する。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形を呈するが、北西側短側部は残っていない。調査規模(長軸×短軸)は、検出面(199×101)cm、底面(189×60)cm、底部までの残存最大深は59cmを測る。埋土は6層以上に分層できる。土層等に明確な痕跡は残っていないが、土壌墓ないし木棺直葬墓と考えられる。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。



挿図57 SX-05遺構図



挿図58 SX-06遺構図

SX-06 (挿図58)

位置 調査地の北西側、B-1グリッド中央部で、尾根筋を区画するSD-01の北西側の標高58.6m付近に位置する。

形態 平面形は検出面が不整な長方形、底面は長方形を呈する。規模(長軸×短軸)は、検出面(84×55)cm、底面(76×22)cm、底部までの残存最大深は35cmを測る。南側長側部に段がある。埋土は確認していない。埋土等から確認することは出来なかったが、その形態・規模から小児用の土壌墓なしし木棺直葬墓の可能性が考えられる。

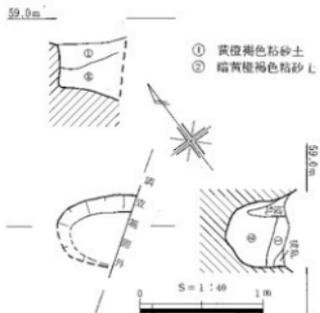
出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

SX-07 (挿図59 図版9)

位置 調査地の東側、B-1グリッドの西側で、尾根筋を区画するSD-01の南東側の標高58.8m付近に位置する。西側がSX-01と切り合いが前後関係は不明である。

形態 南東側は調査地外に伸び、西側はSX-01と切り合うため平面形は不明確だが、残存部は楕円形状を呈する。調査部分の長軸は55cm程度、残存最大深は53cmを測る。埋土は2層に分層できる。土壌墓の可能性が考えられる。

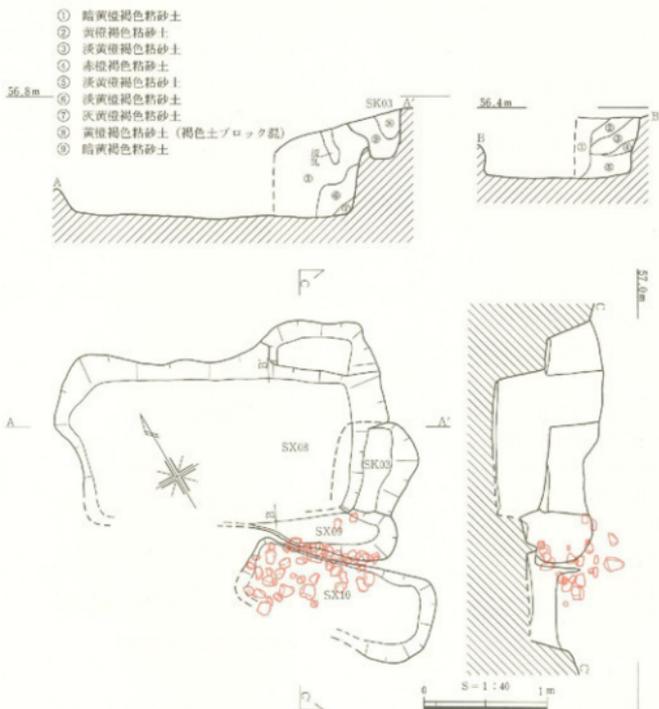
出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。



挿図59 SX-07遺構図

SX-08 (挿図60 図版10)

位置 調査地の北西側、B-2グリッド中央部で、尾根筋を区画するSD-01の西側の標高56.7m付近に位置する。南東隅でSK-03に切られる。SX-09とも切り合いが前後関係



挿図60 SX-08・09・10、SK-03遺構図

は不明である。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形を呈するが、北東隅に段状部が存在する。別遺構の可能性もあるが1つの遺構として扱った。調査規模(長軸×短軸)は、検出面(268×110)cm、底面(228×90)cm、底面までの残存最大深は85cmを測る。埋土は7層以上に分層できる。土層中の①層は木棺に由来し、②～⑤層はその裏込め土と考えられることから木棺直葬墓と推測される。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

SX-09 (挿図60 図版10)

位置 調査地の北西側、B-2グリッド中央部で、尾根筋を区画するSD-01の西側の標高56.6m付近に位置する。北側がSX-09・SK-03と切り合うが共に前後関係は不明である。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形を呈する。調査規模(長軸×短軸)は、検出面(119×39)cm、底面(103×26)cm、底面までの残存最大深は52cmを測る。埋土は確認していない。埋土等から確認することは出来なかったが、その形態・規模から小児用の土壙墓ないし木棺直葬墓の可能性が考えられる。

出土遺物 底面からやや浮いた位置で礎が出土した。加工痕を持つものではないが人為的に岩脈が崩されたことに関係する礎と考えられる。時期は不明である。

SX-10 (挿図60)

位置 調査地の北西側、B-2グリッド中央部で、尾根筋を区画するSD-01の西側の標高56.4m付近に位置

する。SX-09の南側に平行する。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形形状を呈する。調査規模（長軸×短軸）は、検出面（158×73）cm、底面（138×52）cm、底部までの残存最大深は39cmを測る。埋土は確認していない。埋土等から確認することは出来なかったが、その形態・規模から土壇墓ないし木棺直葬墓の可能性が考えられる。

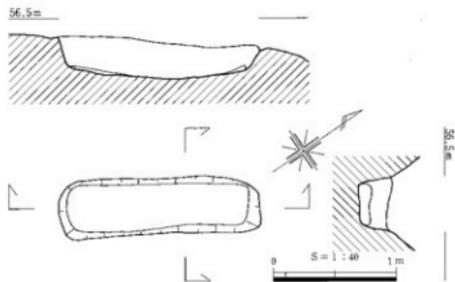
出土遺物 検出面付近から鏝が出土した。SX-09例と同じものである。時期は不明である。

SX-11（挿図61 図版10）

位置 B-2グリッドの北東寄り、標高56.3m付近に位置する。後述するSD-01の底面にあり、会見町教育委員会の試掘調査時点で検出されていたものである。SD-01との前後関係は不明である。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形を呈する。調査規模（長軸×短軸）は、検出面（161×48）cm、底面（145×39）cm、底部までの残存最大深は35cmを測る。埋土はすでに完掘されていたため確認できなかった。形態・規模から土壇墓ないし木棺直葬墓の可能性が考えられる。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。



挿図61 SX-11遺構図

SK-01（挿図62）

位置 調査地の西側、B-2グリッド西寄りの標高55.9m付近に位置する。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な円形を呈する。調査規模（長軸×短軸）は、検出面（88×79）cm、底面（45×43）cm、底部までの残存最大深は40cmを測る。埋土は1層のみであり、性格は不明である。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

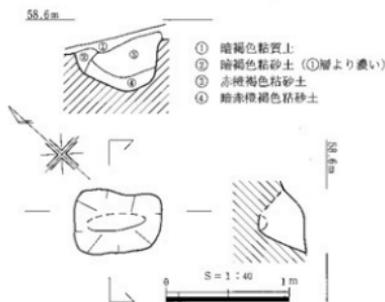
SK-02（挿図63）

位置 調査地の東側、B-1グリッド中央部の標高58.5m付近に位置する。

形態 平面形は検出面が長方形、底面は楕円形状を呈する。調査規模（長軸×短軸）は、検出面（70×53）cm、



挿図62 SK-01遺構図



挿図63 SK-02遺構図

底面(47×12前後)cm、底部までの残存最大深は51cmを測る。埋土は3層に分層できるが、①層は攪乱層の可能性がある。性格は不明である。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

SK-03 (挿図60)

位置 調査地の北西側、B-2グリッド中央部の標高56.7m付近に位置する。西側がSX-08を切る。

形態 平面形は検出面・底面ともに長方形状を呈する。調査規模(長軸×短軸)は、検出面(74×44)cm、底面(70×22)cm、底部までの残存最大深は49cmを測る。埋土は2層以上に分層できる。性格は不明である。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期も不明である。

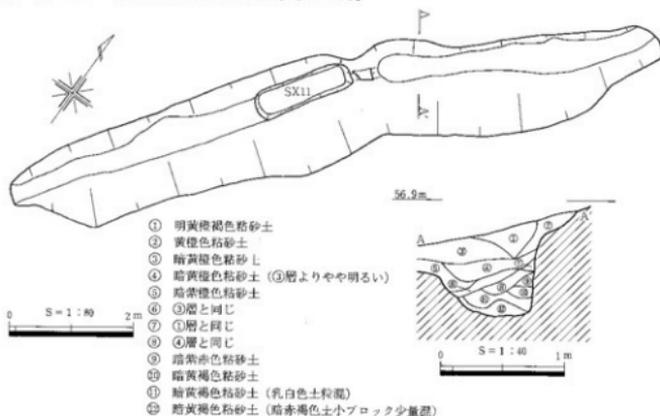
第2節 溝状遺構

SD-01 (挿図64 図版10)

位置 B-2グリッド東側部を中心とする標高56.0~57.6m付近に位置し、尾根筋に直交する。底面には前述したSX-11がある。倉見町教育委員会の試掘調査時点で溝状遺構とされているものである。

形態 遺構はほぼ直線状に伸びるが、やや東側に屈曲する。長さ約10.7m、最大幅約1.8m、最大深約1.3mを測る。埋土は12層以上に分層でき、流入による自然堆積と考えられる。本遺構により主軸方向を同じくする土壌群が尾根筋の上方と下方に区別されていることから土壌群の区画書としての性格が推測される。

出土遺物 本遺構に伴う遺物は出土していないが、遺構の上部から流入土に混じり赤彩の施された高坏Po7が出土した。本来は上方にある土壌に伴うと考えられるが、吉備地方からの搬入品と推測されるもので、弥生時代終末期の時期が与えられるものである。遺構の位置関係から土壌群とSD-01は密接な関係にあると推測されるが、遺物の面からその関係を捉えることは出来なかった。

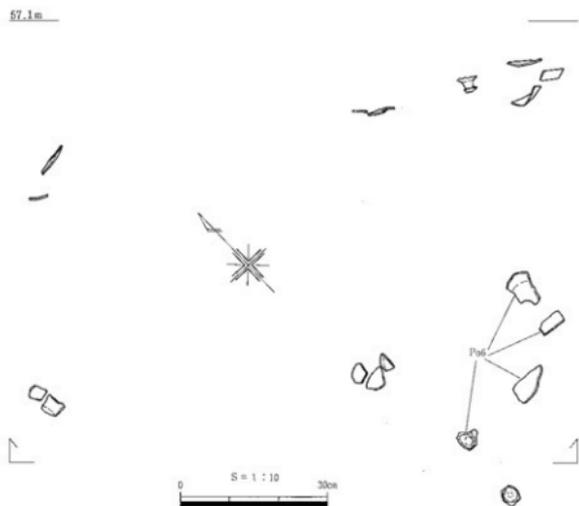


第3節 遺構外の遺物

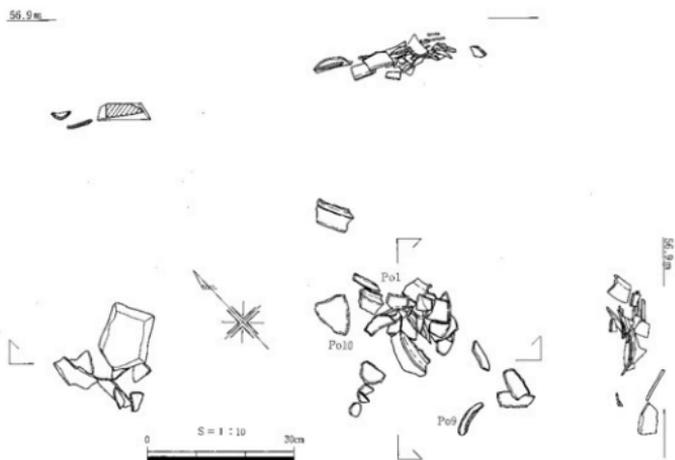
遺構外出土遺物 (挿図65~68 図版10・11)

出土した遺物の量は多くないが興味深い遺物が出土した。Po1はSX-02の上方から出土した弥生時代終

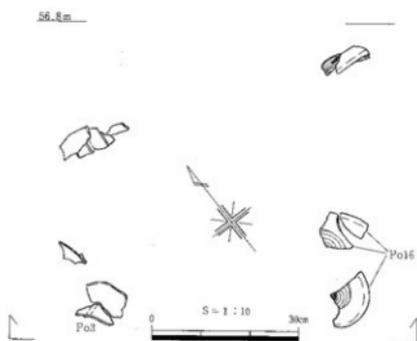
末期の臺である。Po3・16はSD-01西側から出土したものである。



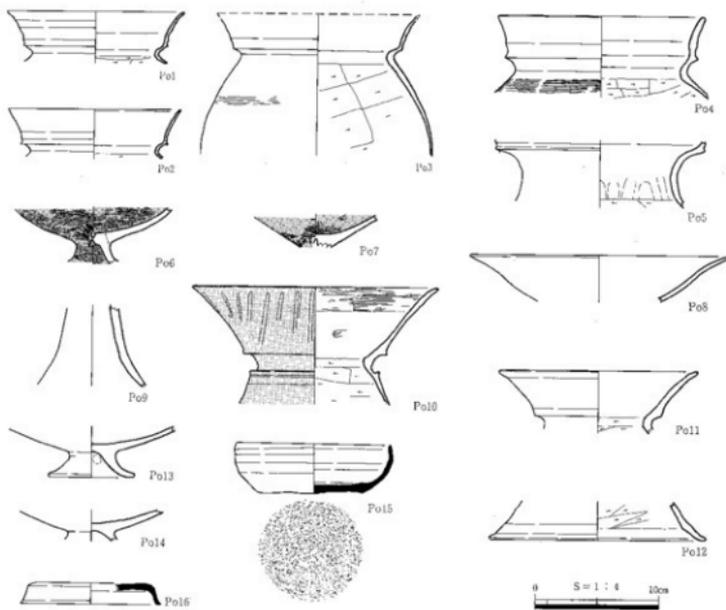
挿図65 遺構外遺物出土状況図(1)



挿図66 遺構外遺物出土状況図(2)



挿図67 遺構外遺物出土状況図(3)



挿図68 遺構外出土遺物実測図

挿表16 土坑・土壌墓一覽表

遺構名	探図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸×短軸)cm 検出面 底面	深さ	長軸方向	遺物	時期	備考
SX-0-1	52	10	B-1	長方形	195×92 172×40	76	N-51°-W			
SX-0-2	53	9	B-1	長方形	199×138 169×79	83	N-55°-W			
SX-0-3	54	10	B-2	長方形	234×103 211×81	72	N-56°-W			
SX-0-4	55・56	9	B-2	長方形	142×135 131×105	74	N-54°-W			
SX-0-5	57	10	B-2	長方形	199×101 189×60	59	N-57°-W			
SX-0-6	58		B-1	不整形長方形	84×55 76×22	35	N-45°-W			
SX-0-7	59	9	B-1	楕円形状	55×	53	N-53°-W			
SX-0-8	60	10	B-2	長方形	268×110 228×90	85	N-59°-W			
SX-0-9	60	10	B-2	長方形	119×39 163×29	52	N-47°-W			
SX-1-0	60		B-2	長方形	158×73 138×52	39	N-41°-E			
SX-1-1	61	10	B-2	長方形	161×48 145×39	35	N-34°-E			
SK-0-1	62		B-2	円形	88×79 45×43	40	N-5°-W			
SK-0-2	63		B-1	楕円形状	70×53 47×12	51	N-42°-W			
SK-0-3	60		B-2	長方形	74×44 70×22	49	N-43°-E			

挿表17 溝状遺構一覽表

遺構名 SD	探図番号	図版番号	規模 (m) 全長×幅×深さ	遺物	時期	備考
01	64	10	10.7×1.8 -1.3	混入土中で赤彩された高杯	弥生時代終末期	

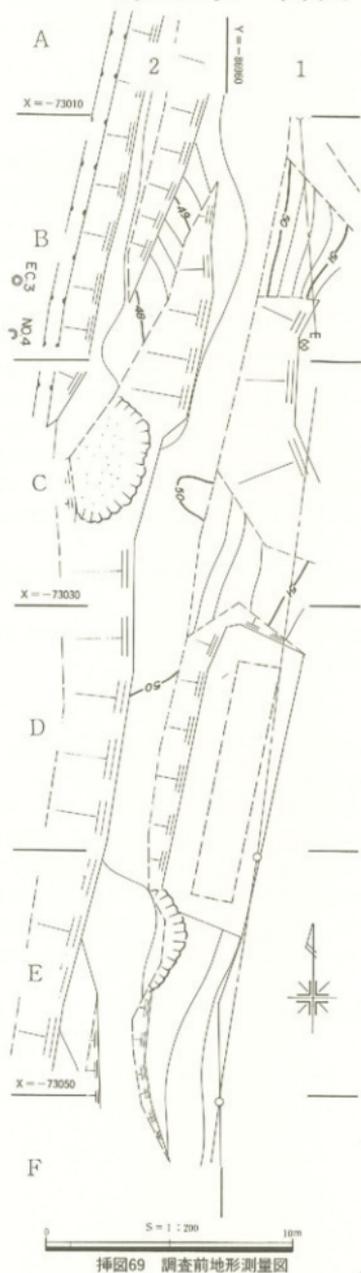
挿表18 土器観察表 ※復元値 △残存値

遺物番号 探図番号 図版番号	形制 群種	量値 (cm)	形 態 と の 特 徴	片 断 部	整 形 部	胎 土 質	色調 外表面	備 考
Po 3 68 11	赤土土器 高杯	① 深 14.4 ② △ 4.3	外反する唇口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部以下ヘラケメズ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	図-2
Po 2 69 11	赤土土器 高杯	① 深 14.0 ② △ 4.1	外反する唇口縁。口縁端部は丸く、内面を窪くナデス。	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部以下ヘラケメズ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	図-3
Po 3 68 11	赤土土器 高杯	① △ 11.5	外反する唇口縁。口縁端部は欠損する。	口縁部一断面ヨコナデ 胴部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 胴部以下ヘラケメズ	赤 良好	黄褐色 淡褐色	図-4
Po 4 68 11	土器 高杯	① 深 14.8 ② △ 4.7	外反する唇口縁。口縁端部は平らな断面を呈す。胴部に横線平行凸線を描く。	ヨコナデ	口縁部ヘラケメズ 胴部以下ヘラケメズ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	図-1
Po 5 68 11	赤土土器 高杯	① △ 5.6	口縁部を外反する鋭角の縁部。	ヨコナデ	口縁部調整不明 胴部以下ヘラケメズ	赤 良好	黄褐色 淡褐色	図-5
Po 6 68 11	赤土土器 高杯	① △ 4.7	口縁部部を欠損する高杯の残部。	ヘライゴキ	ヘライゴキ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-5 内面赤彩 内面赤彩
Po 7 68 11	赤土土器 高杯	① △ 3.8	口縁部部を欠損する高杯の残部。	ヘライゴキ	ヘライゴキ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-7 内面赤彩 内面赤彩
Po 8 68 11	土器 高杯	① 深 20.9 ② △ 3.8	内湾して口縁端部近くで外反する唇部。口縁端部は丸い。	調整不明	調整不明	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-4
Po 9 68 11	土器 高杯	① △ 6.7	「八」の字状に開く縁部。	調整不明	調整不明	赤 良好	黄褐色 淡褐色	図-6
Po10 68 11	土器 高杯	① △ 20.0 ② △ 9.6	唇部と胴部の間が狭い。数形割合。	唇部部ヨコナデ 胴部部ヘラケメズ 胴部部ヨコナデ	唇部部ヨコナデ 胴部部ヘラケメズ 胴部部ヨコナデ	赤 良好	黄褐色 淡褐色	図-8 内面赤彩
Po11 68 11	土器 高杯	① 深 16.2 ② △ 5.2	唇部と胴部の間が狭い。数形割合。	ナデ	唇部部ヨコナデ 胴部部ヘラケメズ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-3
Po12 68 11	土器 高杯	① △ 3.2 ② 深 17.6	数形割合の胴部。	ナデ	胴部部ヘラケメズ 胴部部ヨコナデ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-6
Po13 68 11	土器 高杯	① △ 4.2 ② 深 6.8	内湾する唇部と「八」の字状に開く唇部。	ナデ	ナデ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-1
Po14 68 11	土器 高杯	① △ 2.6	内湾する唇部。	調整不明	唇部調整不明 胴部ナデ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-2
Po15 68 11	土器 高杯	① △ 12.4 ② △ 4.3	内湾しながら立ち上がる口縁部。底面調整不明。	調整ナデ	ナデ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-1
Po16 68 11	土器 高杯	① 深 11.4 ② △ 1.8	口縁部は開き、底面は外方に傾斜する。	調整ナデ	調整ナデ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	小図-2 内面に赤彩

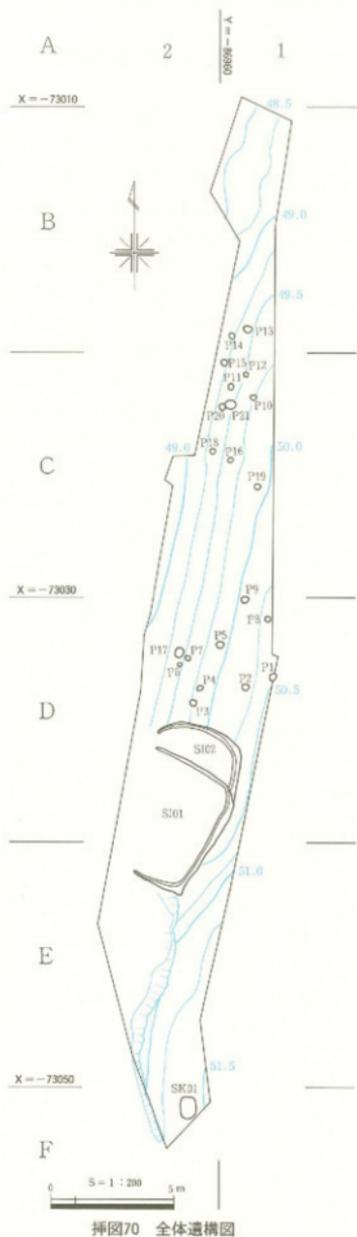
挿表19 石製品観察表

遺物番号	探図番号	図版番号	取上番号	出土位置	種類	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重	備考
S 1	68	11	10	SX-0-4	砥石?	花崗岩質アブライト	21.3	17.3	15.0	9.5 kg	図-1

第6章 御内谷第2遺跡の調査



挿図69 調査前地形測量図



挿図70 全体遺構図

御内谷第2遺跡は、竪穴住居跡2、土坑1、ピットを検出した。以下、遺構ごとに調査結果を述べる。

第1節 竪穴住居跡

S I - 0 1 (挿図71・72 図版12・13)

位置 調査地の中央南寄り、D-1~E-1グリッドにかけての標高50.4m付近に位置する。本遺構は後述するS I - 0 2を切っている。遺構の西側は現代の農道であり破壊を受けている。埋土は8層に分層でき、東側からの流入による自然堆積と推測される。②・③層からは多量の七器片が出土した。

構造 東側は壁体が良好に遺存していたが、西側は破壊により残存していない。壁体から推測される平面形は方形状であるが、残存する壁溝は隅丸方形状を呈する。住居跡東側では、壁溝から主柱穴であるP 2まで約1.1mであり西側も同程度と考えるならば、床面の規模は南北5.1m・東西4.2mに復元できる。残存壁高は最も遺存状態の良い南東部で86cmを測る。壁溝は壁体に沿って位置するが、西側には残っていない。幅は10~16cm、深さは3~7cm程度である。主柱穴はP 1~P 4の4個である。それぞれの規模(長軸×短軸-深さ)は、P 1 (28×23-42) cm、P 2 (32×24-37) cm、P 3 (33×28-33) cm、P 4 (18×14-30) cmを測る。P 1~P 2から順にP 4~P 1までの主柱穴間距離は、それぞれ1.7m・1.1m・1.7m・1.3mである。その他にP 5~P 7の柱穴を検出した。このうち、P 5・P 6は補助柱と推測されるものである。両柱穴は、壁溝に近すぎる点で疑問も残るが、主柱穴に対しての位置に企画性が認められ、柱穴底部標高もほぼ同じであることからS I - 0 1に伴う柱穴と考えた。両柱穴の規模はP 5 (55×46-37) cm、P 6 (46×36-20) cmである。柱穴間距離は4.4mを測る。この地域に多い中央ピットは認められなかった。

S I - 0 1は4個の主柱穴と2個の補助柱を持つ構造と考えられるが、管見の限りにおいてはこのような柱穴配置となる例は見あたらず、希有な例である。

出土遺物 図化できたのは弥生土器の甕Po 1~9、土師器甕Po 10~18、高杯Po 19~21、低脚杯Po 26~30などである。これらの遺物から、時期は古墳時代前期前葉と考えられる。

S I - 0 2 (挿図73 図版12・13)

位置 調査地の中央部、D-1グリッドの南東部を中心し、標高50.3m付近に位置する。本遺構は前述したS I - 0 1に切られている。遺構の西側は現代の農道であり破壊を受けている。埋土を4層に分層した。

構造 北から東側にかけては壁体が良好に遺存しているが、南側および西側は破壊のため残存していない。残存する壁溝から推測して、平面形は円形状であろう。残存部の規模は南北約2.6m・東西約3.2mである。残存壁高は最も遺存状態の良い東部で50cmを測る。壁溝は壁体に沿って位置するが、西および南側は破壊のため遺存していない。幅は16cm前後、深さは2~5cm程度である。本遺構に明確に伴う柱穴は検出されなかった。床面からは2個のピットを検出したが、規模が小さい点や位置が適当でないことからこの住居に伴う柱穴ではない可能性が高い。S I - 0 1で検出したP 7が本遺構に伴う可能性もあるが、対応するピットが検出されなかったことから除外した。

出土遺物 床面から散石と考えられるS 1が出土した。時期は不明である。

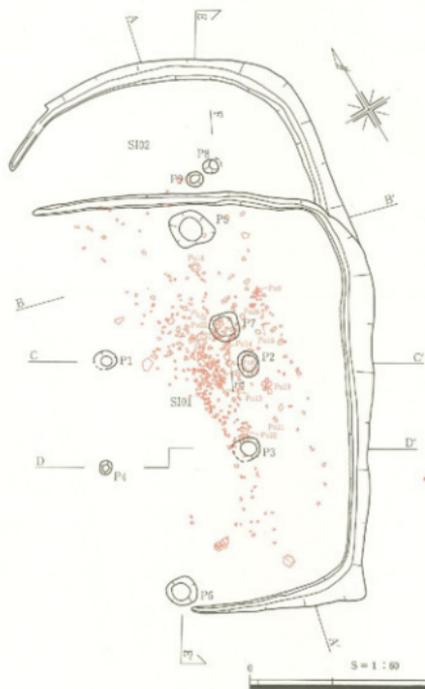
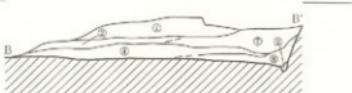
50.5m



50.5m

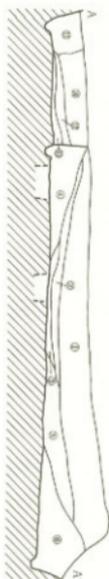


50.4m

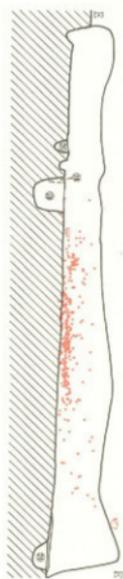


- ① 暗褐色粘砂土
- ② 褐色粘砂土 (淡黒褐色土粒多量混)
- ③ 暗褐色粘砂土 (①層より深い)
- ④ 暗茶褐色粘砂土 (暗褐色土ブロック混)
- ⑤ 暗茶褐色粘砂土
- ⑥ 暗褐色粘砂土
- ⑦ 茶褐色粘砂土
- ⑧ 淡茶褐色粘砂土
- ⑨ 暗褐色粘砂土
- ⑩ 暗褐色粘砂土 (褐色土小ブロック少量混)
- ⑪ 暗褐色粘砂土
- ⑫ 暗褐色粘砂土 (茶褐色土小ブロック多量混)
- ⑬ 褐色粘砂土
- ⑭ 暗褐色粘砂土
- ⑮ 暗茶褐色粘砂土 (暗褐色・黄褐色土ブロック少量混)
- ⑯ 暗茶褐色粘砂土 (黄褐色土ブロック少量混)
- ⑰ 暗茶褐色粘砂土
- ⑱ 暗茶褐色粘砂土 (黄褐色土粒混)
- ⑲ 暗茶褐色粘砂土 (黄褐色土小ブロック混)
- ⑳ 暗褐色粘砂土 (炭片混)
- ㉑ 暗茶褐色粘砂土
- ㉒ 暗茶褐色粘砂土
- ㉓ 褐色粘砂土 (黄褐色土ブロック多量混)
- ㉔ 暗褐色粘砂土
- ㉕ 褐色粘砂土 (黄褐色土小ブロック少量混)

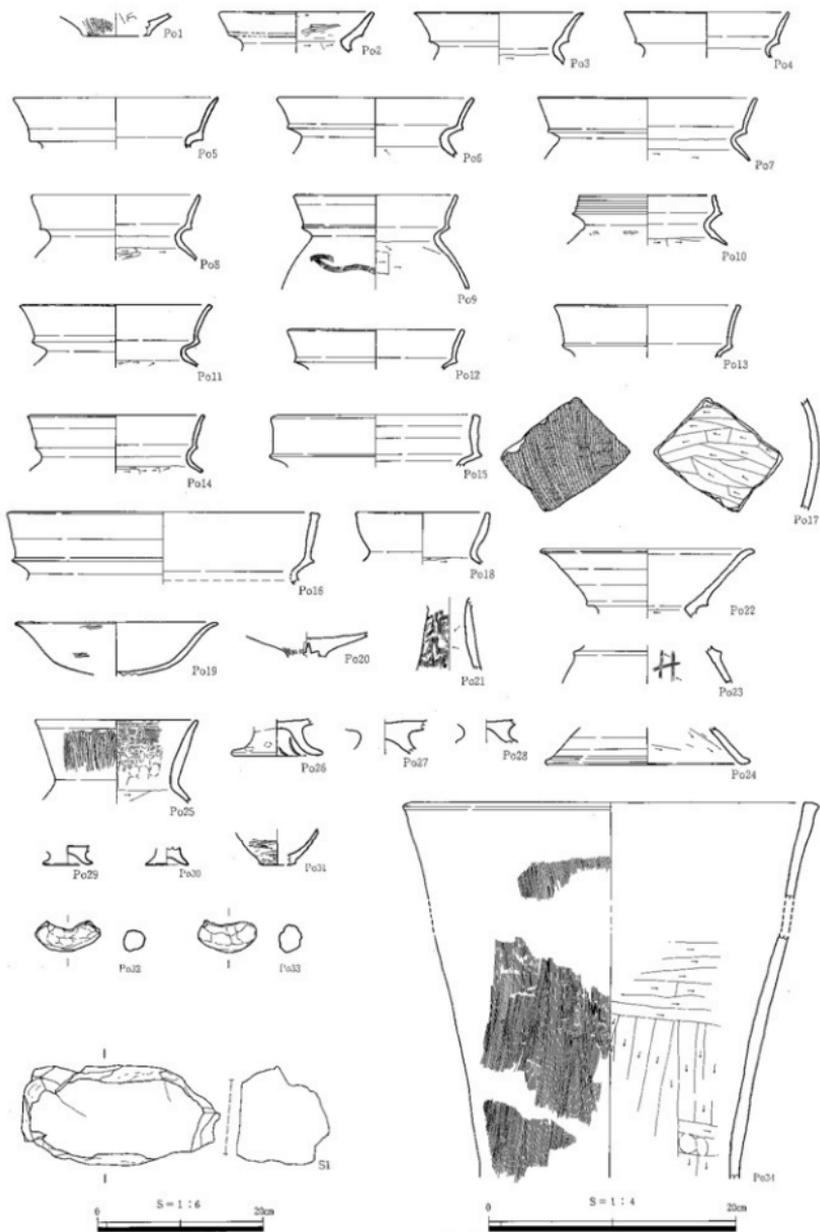
50.5m



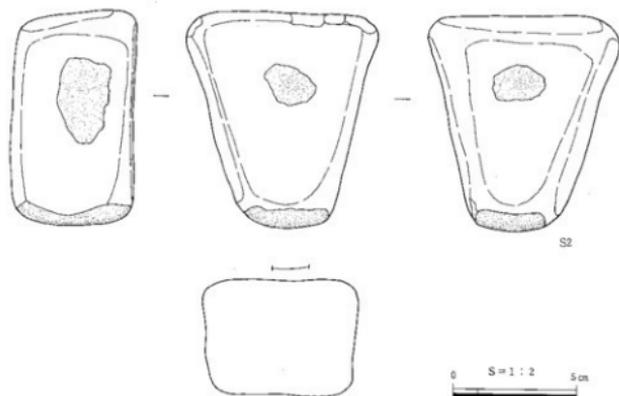
50.5m



挿図71 S1-01・02遺構図



挿図72 SI-01遺物実測図



挿図73 SI-02遺物実測図

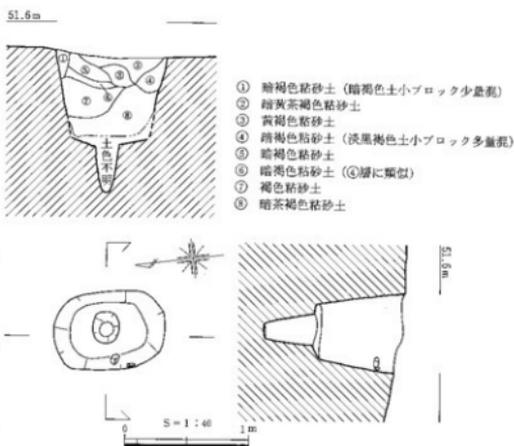
第2節 土坑

SK-01 (挿図74 図版12)

位置 調査地の南端、F-1グリッド北東部の標高51.4m付近に位置する。遺構は、尾根の裾部にできたわずかな平坦面にある。

形態 平面形は検出面・底面ともに楕円形を呈す。規模(長軸×短軸)は、検出面(82×65)cm、底面(63×45)cm、底部までの残存最大深は79cmを測る。底部中央には底面ビットがある。検出面の平面形は長円形で、規模は(26×22)cm、最大深は43cmである。形態から落とし穴と推測される。埋土は8層以上に分かれる。流入による自然堆積と推測される。

出土遺物 小礫が若干出土したが、明確な遺物の出土はない。時期も不明である。



挿図74 SK-01遺構図

第3節 ビット

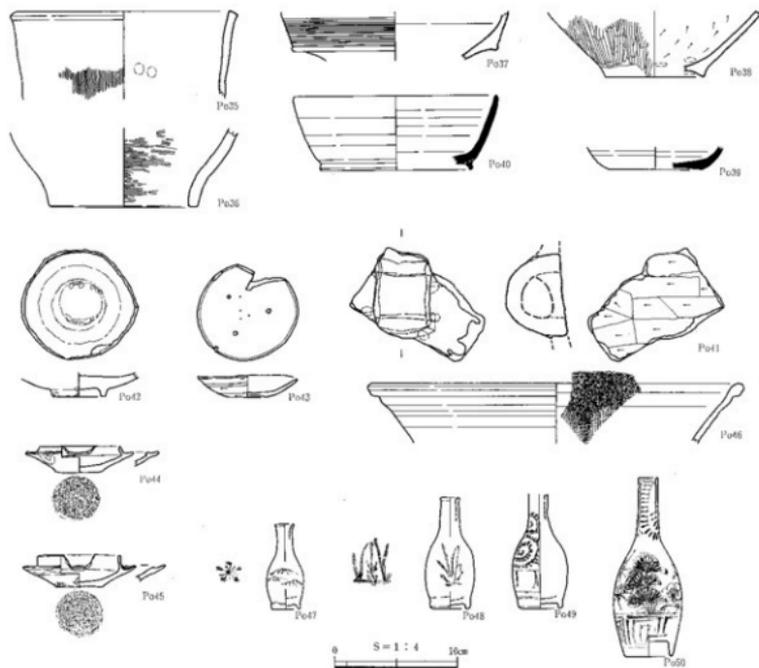
ビット (挿図70)

21個のビットを検出した。調査地中央付近に比較的集まり、何らかの遺構を構成すると推測されるが、明確な遺構として捉えることは出来なかった。詳細は挿表22のビット一覧表に譲る。

第4節 遺構外の遺物

遺構外出土物 (挿図75 図版13)

遺構外から若干の遺物が出土した。ほとんどは調査地北端付近から出土している。陶磁器類は隣接する御内谷神社に関連する遺物と推測される。なお、個々の遺物の詳細は挿表23の土器観察表に譲る。



挿図75 遺構外出土遺物実測図

挿表20 竪穴住居跡一覧表 () 推定値

遺構名 S I	挿図 番号	図版 番号	グリッド	平面形	規模 m	残存壁高 cm	主柱穴 本	遺物	時期	備考
01	71・72	12・13	D・E-1	方形状	5.1×(4.2)	86	4+2	弥生土器類、土器器 臺・高坏・低脚坏	古墳時代前期前半	SI-02を切る 壁溝は積丸方形状
02	71・73	12・13	D-1	円形状	(3.2)×(2.6)	50	0	礎石	古墳時代前期前半以前	SI-01に切られる

挿表21 土坑一覧表

遺構名 S K	挿図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸×短軸)cm 検出面 底面	深さ cm	長軸方向	遺物	時期	備考
01	74	12	F-1	楕円形	82×65 63×45	79	N-7°-E			縄文時代か?

挿表22 ビット一覧表

ビット番号	グリッド	規模(長軸×短軸×深さ) cm	層	土色・土質	住痕有無	遺物	備考
1	D-1	30×24-28	1	暗褐色粘質土	×		
2	D-1	27×26-20	1	暗褐色粘質土	×		
3	D-2	26×25-42	1	黒褐色粘質土	×		
4	D-2	23×21-31	1	黒褐色粘質土	×		
5	D-1	32×29-23	1	淡黒褐色粘質土	×		
6	D-2	17×16-38	1	黒褐色粘質土	×		
7	D-2	21×20-29	1	黒褐色粘質土	×		
8	D-1	25×17-32	1	暗褐色粘質土	×		
9	D-1	28×26-36	1	暗褐色粘質土	×		
10	C-1	29×23-18	1	淡黒褐色粘質土	×		
11	C-1	25×20-23	1	暗褐色粘質土	×		
12	C-1	23×20-21	1	暗褐色粘質土	×		
13	B-1	38×36-22	1	淡黒褐色粘質土	×		
14	B-1	29×25-23	1	暗褐色粘質土	×		
15	C-1	26×25-27	1	淡黒褐色粘質土	×		
16	C-1	28×27-19	1	暗茶褐色粘質土	×		
17	D-2	24×18-25	1	淡黒褐色粘質土	×		
18	C-2	46×35-50	1	暗褐色粘質土(褐色・黄褐色土粒混)	×		
19	C-1	31×24-16	1	淡黒褐色粘質土	×		
20	C-1	28×(25)-23	1	褐色粘質土	×		
21	C-1	68×28-62	1	黒褐色粘質土(暗褐色土小ブロック混)	×	陶器類	

挿表23 土器観察表

※復元値 △残存値

S1-01

遺物番号 調査区分 図説番号	発掘 時期	流量 (ca)	形 態 上 の 特 徴	外 観	調 整	内 観	胎 土 結 成	色調 外内	備 考
Po 1 72 13	弥生上層 灰層	① △ 1.9 ② 卍 5.5	平底。	ヘラミガキ		ヘラケズリ	密 良好	黒褐色 茶褐色	小瓶-4
Po 2 72 13	弥生上層 灰	① 卍 12.6 ② △ 3.4	外傾する複合口縁。	ヘラミガキ		口縁部ヘラミガキ 底部ヘラミガキ後ナブ 押し	密 良好	褐色 緑色	罐-29
Po 3 72 13	弥生上層 灰	① 卍 13.8 ② △ 4.3	外傾する複合口縁。口縁端部は尖る。	ヨコナデ		口縁部ヨコナデ 底部以下ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-18
Po 4 72 13	弥生上層 灰	① ※ 13.2 ② △ 3.9	外傾する複合口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ		口縁部ヨコナデ 胎土調整不明	密 良好	淡黄褐色 褐色	罐-20
Po 5 72 13	弥生上層 灰	① 卍 16.4 ② △ 4.3	外傾する複合口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ		口縁部ヨコナデ 胎土調整不明	密 良好	褐色 褐色	罐-5
Po 6 72 13	弥生上層 灰	① 卍 15.6 ② △ 4.9	外傾する複合口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ		口縁部ヨコナデ 胎土以下ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-6
Po 7 72 13	弥生上層 灰	① 卍 17.4 ② △ 5.3	外傾する複合口縁。口縁端部は丸い。	調整不明		口縁部上平調整不明 下ナブ胎土平調整不 明以下ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-16
Po 8 72 13	弥生上層 灰	① 卍 16.0 ② △ 5.4	外傾する複合口縁。口縁端部は丸い。	ヨコナデ		口縁部調整不明 胎土以下ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-15
Po 9 72 13	弥生上層 灰	① ※ 13.4 ② △ 7.8	外傾する複合口縁。口縁端部は丸味を持つ 面となる。胎土に炭状文。	ヨコナデ		口縁部調整不明 胎土ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-22
Po10 72 13	上層部 灰	① 卍 11.0 ② △ 4.2	口縁部が内傾する複合口縁。口縁端部は面 をなす。	ヨコナデ		口縁部ヨコナデ 胎土ナブ押し 胎土ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	小瓶-5
Po11 72 13	土師部 灰	① 卍 15.6 ② △ 8.2	外傾する複合口縁。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ		口縁部ヨコナデ 胎土ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-28 黒縁あり
Po12 72 13	土師部 灰	① 卍 14.4 ② △ 3.4	外傾する複合口縁。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ		ヨコナデ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-19 黒縁あり
Po13 72 13	土師部 灰	① 卍 14.9 ② △ 4.3	外傾する複合口縁。口縁端部は内面に肥 厚し面をなす。	ヨコナデ		口縁部ヨコナデ 胎土調整不明	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-21
Po14 72 13	土師部 灰	① 卍 14.0 ② △ 4.8	外傾する複合口縁。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ		口縁部調整不明 胎土ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	罐-17
Po15 72 13	土師部 灰	① ※ 16.1 ② △ 4.3	口縁部が直立する複合口縁。口縁端部は面 をなす。	ヨコナデ		ヨコナデ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	小瓶-6

遺物番号 碑式番号 図式番号	機軸 器種	質量 (ca)	形 態 上 の 特 徴	調 査 外面	調 査 内面	胎 土 成 成	色調 外面 内面	備 考
Po16 72 13	土師器 壺	① 重 24.0 ② △ 6.0	口縁部がほぼ直立する複合口縁。口縁端部は内側にやや膨厚し面をなす。	ココナデ	口縁部ココナデ 胴部以下調査不明	密 良好	淡灰褐色 淡黄褐色	小塚-3
Po17 72 13	土師器 胴部	① △ 9.5	胴部片。	タテヘラミガキ	ヘラケズリ	密。 底色の小粒を含む 良好	赤褐色 赤褐色	山崎-15 内面に赤銅 土質赤の塗が
Po18 72 13	土師器 壺	① 11.0 ② △ 4.4	口縁部はやや内傾した外傾する。口縁端部は良い。	調査不明	口縁部ココナデ 胴部以下ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	塚-25
Po19 72 13	土師器 高杯	① 重 16.4 ② △ 4.5	内傾して外傾し、口縁端部で外反する杯部。胴部は良い。	ココヘラミガキ	調査不明	密 良好	淡褐色 淡褐色	塚-24
Po20 72 13	土師器 高杯	① △ 2.1	内傾気味に傾く杯部。	杯部調査不明 胴部ハケ目	杯部ココナデ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	塚-23
Po21 72 13	土師器 高杯	① △ 6.0	直線的な胴部。	ハケ目	ヘラケズリ	密	淡黄褐色 淡黄褐色	小塚-10
Po22 72 13	土師器 高台	① 重 17.4 ② △ 5.7	鼓形高台の受変部。	ココナデ	受変部調査不明 胴部ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	塚-26
Po23 72 13	土師器 高台	① △ 3.1	鼓形高台の胴部。内面にヘラ記号。	ナデ	ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-11
Po24 72 13	土師器 高台	① △ 3.1 ② 重 16.6	鼓形高台の胴部。胴部は外方に拡張する。	ナデ	ヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	小塚-9
Po25 72 13	土師器 高台	① 重 13.0 ② △ 6.9	直線的に外傾する口縁部。	口縁部タテヘラミガキ 口縁端部ココナデ 胴部ナデ	口縁部ココナデ 胴部ナデ 胴部ナデ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-5
Po26 72 13	土師器 低脚杯	① △ 3.1 ② △ 7.5	「八」の字状に傾く胴部。内面にヘラ記号。	ナデ	ナデ	密。 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-6
Po27 72 13	土師器 低脚杯	① △ 2.9	胴部を欠損する胴部。	ナデ	ナデ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	小塚-8
Po28 72 13	土師器 低脚杯	② △ 2.0	胴部を欠損する胴部。	ココナデ	ココナデ	密 良好	褐色 褐色	塚-3
Po29 72 13	土師器 低脚杯	① △ 1.6 ② △ 4.1	「八」の字状に傾く小形の胴部。	調査不明	杯部調査不明 胴部ナデ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	塚-2
Po30 72 13	土師器 低脚杯	① △ 1.5 ② 3.5	直線的に傾く小形の胴部。	調査不明	調査不明	密。 良好	褐色 褐色	塚-1
Po31 72 13	土師器 底部	① △ 3.0 ② 重 3.0	平式。	タテヘラナデ?	ナデ	密 良好	淡褐色-淡褐色 淡褐色-淡褐色	山崎-13 Y様式番号?
Po32 72 13	土師器? 把手	① △ 5.3 ② △ 1.9	環状と垂直される把手。	ナデ		密 良好	茶褐色 系褐色	山崎-12
Po33 72 13	土師器? 把手	① △ 4.8 ② △ 2.3	環状と垂直される把手。	ナデ		密 良好	茶褐色 茶褐色	山崎-14 P7より出土
Po34 72 13	土師器? 瓶形土器	① 重 32.0 ② △ 30.9	直線的に外傾して傾く口縁部。	口縁端部ナデ 他はナデ後タテヘラ	口縁端部ナデ 他はヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-10
Po35 72 13	土師器? 瓶形土器	① 重 17.1 ② △ 7.2	直線的で直立気味の口縁部。	口縁端部ナデ 他はナデ後タテヘラ	ナデ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-9
Po36 72 13	土師器? 瓶形土器	① △ 6.5 ② 重 12.1	内傾してすぼまる杯部。胴部は直線的になる。	ナデ	ヘラミガキ	密。 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-8 外底保存者

遺構外

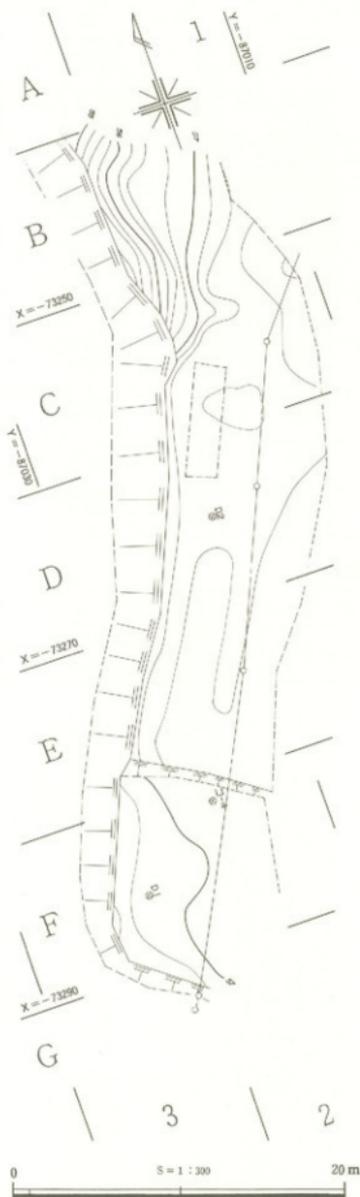
遺物番号 碑式番号 図式番号	機軸 器種	質量 (ca)	形 態 上 の 特 徴	調 査 外面	調 査 内面	胎 土 成 成	色調 外面 内面	備 考
Po37 75 13	赤土器 高台	① △ 4.0	外傾する受変部。	口縁部口縁 胴部ココナデ	ココナデ	密。 良好	淡褐色 濃褐色	塚-13
Po38 75 13	赤土器 底部	① △ 5.5 ② 重 8.0	上げ底状の平底。	胴部タテヘラミガキ 底部ココナデ・直線的	胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ後部直線的	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	塚-14
Po39 75 13	赤土器 底部	① △ 1.9 ② 重 7.6	直線的に傾く平底。	口縁部口縁ナデ 底部直線的	口縁部ナデ 底部ナデ	密 良好	淡褐色 淡褐色	小塚-7
Po40 75 13	赤土器 高台付き 杯	① 重 16.4 ② △ 6.1 ③ 重 12.6	直線的に外傾する口縁部。	口縁部ナデ	口縁部ナデ	密 良好	淡褐色 淡褐色	塚-10

遺物番号 採掘番号 図版番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	調 整		納 入 成	色調 外面 内面	備 考
				外面	内面			
Po41 75 13	土師器? 板形土器	① △ 7.1 ② △ 9.9 ③ △ 4.8	幅広い板状器十による把手。	ナデ	ヘラケスリ	密 良好	緑茶褐色 緑茶褐色	小塚-11
Po42 75 13	陶器 底部	① △ 2.1 ② 4.2 ③ 2.9	高台が付く底部。	蹴踏 砂目	蹴踏様塚状に蹴踏ぎ	密 良好	灰色 灰色	小塚-1
Po43 75 13	陶器 蓋	① 8.2 ② 1.0 ③ 3.0	平底。	口縁部調整不明 蹴踏同様にヘラケスリ 3ヶ所の跡が目	蹴踏	密 良好	黄灰色 黄灰色	塚-4
Po44 75 13	陶器 广形受皿	① 6.5 ② 2.2 ③ 2.9	内面に板状の仕切りを設ける。口縁部に凹 込みがある。	口縁部蹴踏 体部蹴踏ナデ 底部砂止赤切り	蹴踏	密 良好	黄緑部赤褐色 黄緑部赤褐色	塚-11
Po45 75 13	陶器 广形受皿	① 6.8 ② 2.7 ③ 2.8	内面に板状の仕切りを設ける。口縁部に凹 込みがある。	口縁部蹴踏 体部蹴踏ナデ 底部砂止赤切り	蹴踏	密 良好	黄緑部赤褐色 黄緑部赤褐色	小塚-2
Po46 75 13	陶器 杯鉢	① 径 30.2 ② △ 4.9	口縁部は丸い。内面におろしれ。	蹴踏ナデ	凹蹴ナデ	密 良好	茶色 茶色	塚-9
Po47 75 13	陶器 他物	① 1.5 ② 7.1 ③ 2.3	柄は垂らない。竹と草花文を置く発付。	高台部・底部蹴踏 他は蹴踏	口縁部蹴踏 他は蹴踏	密 良好	黄緑部乳白色 黄緑部灰白色	山崎-1
Po48 75 13	陶器 器利	① 径 1.5 ② 9.2 ③ 2.4	柄は垂らない。草花文を置く発付。	高台部蹴踏 他は蹴踏	口縁部蹴踏 他は蹴踏	密 良好	黄緑部乳白色 黄緑部灰白色	山崎-2
Po49 75 13	陶器 器利	① △ 9.5 ② 3.1	柄は垂らない。胡蝶文と草花文を置く発 付。	高台部蹴踏 他は蹴踏	蹴踏	密 良好	黄緑部乳白色 黄緑部灰白色	山崎-3
Po50 75 13	陶器 器利	① 径 1.5 ② 14.8 ③ 3.7	柄は垂らない。草花文を置く発付。	高台部蹴踏 他は蹴踏	口縁部蹴踏 他は蹴踏	密 良好	黄緑部乳白色 黄緑部灰白色	山崎-4

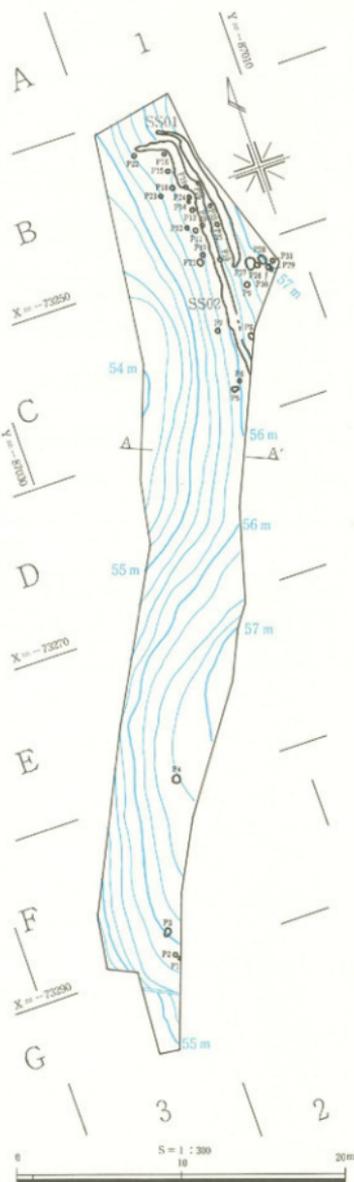
挿表24 石製品観察表

遺物番号	採掘番号	図版番号	取上番号	出土位置	種類	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重	備 考
S 1	72	13	49	S I - 0 1	砥石?	盤状安山岩	24.3	12.3	11.1	4.2 kg	塚-2
S 2	73	13	46	S I - 0 2	砥石	花崗閃緑岩	8.8	6.9	5.1	620 g	塚-1

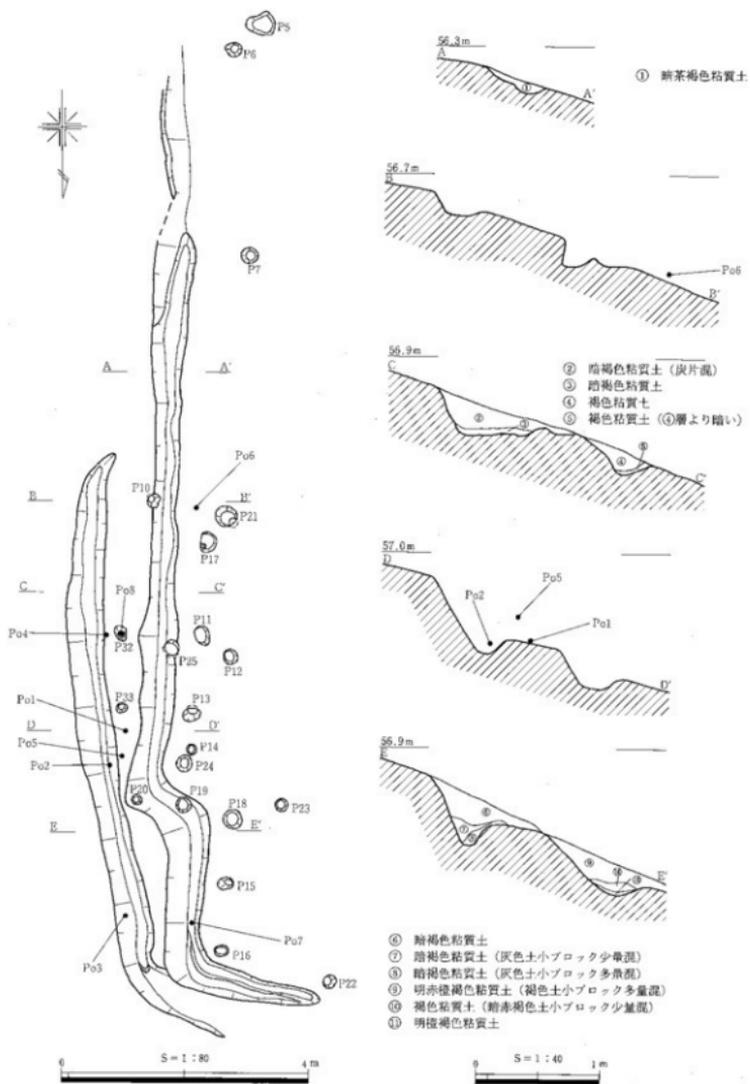
第7章 御内谷下々ヶ市遺跡の調査



挿図76 調査前地形測量図



挿図77 全体遺構図



坪図78 SS-01・02遺構図

御内谷下々ヶ市遺跡では、段状遺構2、ピットを検出した。以下、遺構ごとに調査結果を述べる。



挿図79 調査地土層図

第1節 段状遺構

SS-01 (挿図78・80 図版14・15)

位置 調査地の北端、B-1グリッド中央部の標高56.8m付近に位置する。遺構は、南西側が谷状になる斜面途中にある。

形態 遺構平面形は、ほぼ南北方向に細長く伸び、北端は緩く西側に屈曲する。長さは約9mを測る。断面形は、斜面をカットして「L」字状とし、さらに壁直下を掘り下げて溝状としている。その幅は30~40cm、深さは最大で約20cmである。底面部分に若干のピットが位置していたが、後述するSS-02に切られているためにピットが本遺構に伴うものなのか、他にピットが有るのかが不明であり、遺構の性格を明確にすることは出来ないが、斜面地に作られた段状遺構であり住居跡の可能性が考えられる。

出土遺物 土師質土器Po1~4が出土したが遺存状態は悪い。瓦質土器の鍋Po5も出土している。時期を特定するのは困難であるが、瓦質土器の鍋は口縁部を「L」字形に屈曲させ端部に平坦面を持つもので、13世紀代の時期が与えられる。遺構の時期も13世紀代であろう。



挿図80 SS-01遺物実測図

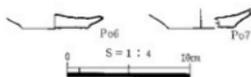
SS-02 (挿図78・81 図版14・15)

位置 調査地の北端、B-1グリッドからC-1グリッドにまたがる。標高56.8m付近に位置する。遺構は、SS-01の西側に沿うように位置する。

形態 遺構平面形は、ほぼ南北方向に細長く伸び、北端は西側に屈曲する。B-1グリッド中央部でも屈曲を繰り返す。形態から北端部は別遺構の可能性を考えたが、土層には切り合い関係は認められず、底面も平坦に続いている。南端は調査地外に続くため全長は不明であるが、検出部の長さは約15mを測る。断面形は、斜面をカットして「L」字状とし、さらに壁直下を浅く掘り下げているが、SS-01のように明確ではない。その幅は約30cm、深さは最大で約7cmである。底面部を中心にピットを検出した。

本遺構に伴う可能性はあるがその関係を明確にし得ないため別遺構として扱うこととする。

出土遺物 破片状態で土師質土器Po6・7が出土した。遺存状態が悪く調整等は不明瞭であるが糸切りの底部を持つものが認められる。



挿図81 SS-02遺物実測図

第2節 ピット

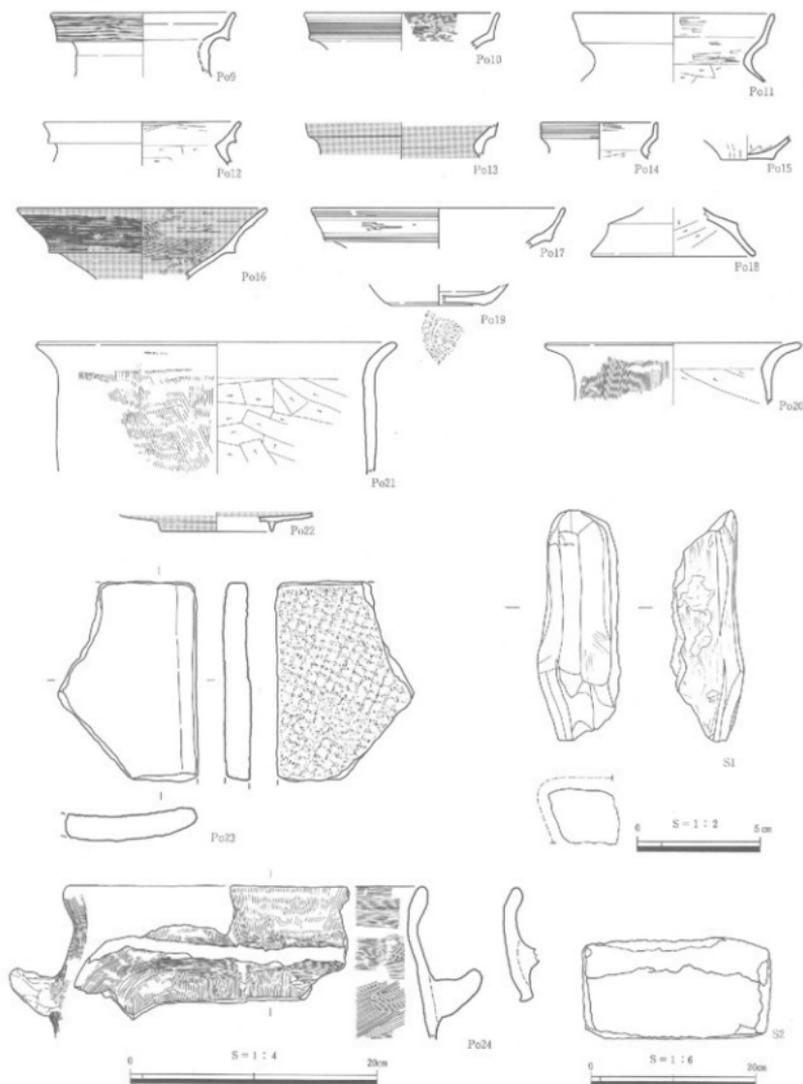
ピット (挿図77・82 図版15)

SS-01・SS-02の周辺からピットが集中して検出された。本来はSS-01・SS-02に伴うものもあると推測されるが、区別が出来ないためピットとして一括して扱う。規模等の詳細は挿表26のピット一覧表に記載する。



挿図82 P-32遺物実測図

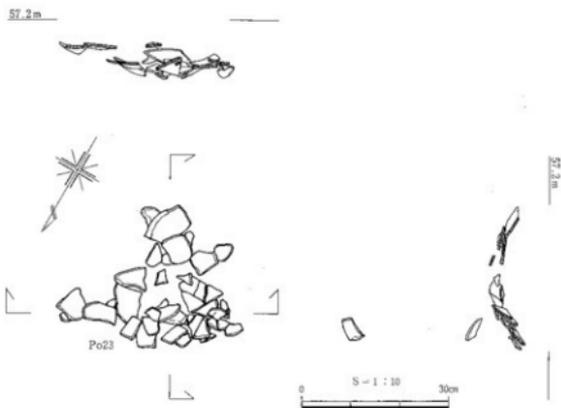
第3節 遺構外の遺物



押図83 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物 (挿図83・84 図版14・15)

谷状部分の包含層から上器類が出土した。人為的に谷状部を埋めて造成されたときに混入したものが大半を占める。C-1グリッド北東隅からカマド形土製品が出土した。調査地の際から出土したため遺構に伴うものかどうかわからないために遺構外の遺物に含めたが、出土地点は平坦面を作り出しているようにも感じられる所であり、今後この隣接外を調査する場合、その結果によってこの遺物の位置付けを変更する必要があるかもしれない。包含層からは弥生土器が多く出土することから周洲に弥生時代の遺跡が存在することが推測される。



挿図84 甕形土製品出土状況図

挿表25 段状遺構一覧表

遺構名 SS	挿図番号	図版番号	規模 (m) 全長×幅×高さ	遺物	時期	備考
0 1	78・80	14・15	9×0.3~0.4~0.2	土師質土器片、瓦質土器片	13世紀代	
0 2	78・81	14・15	15×0.3~0.07	土師質土器片		

挿表26 ビット一覧表

ビット 番号	グリッド	規模 (長軸×短軸×深さ) cm	層	土色・土質	柱根 有無	遺物	備考
1	F-3	18×17-8	1	暗褐色粘砂土 (黄褐色土大粒混)	×		
2	F-3	31×28-12	1	暗褐色粘砂土 (黄褐色土大粒混)	×		
3	F-3	48×30-54	1	暗褐色粘質土 (乳白色土小粒混)	×		
4	E-3	54×50-31	1	淡褐色粘質土	×		
5	C-2	40×32-21	2	①淡褐色粘質土 ②暗褐色粘質土	×		
6	C-2	26×21-23	1	暗褐色粘質土	×		
7	C-2	30×28-37	1	暗褐色粘質土	×		
8	C-1	36×-(10)	3	①淡黒褐色粘質土 ②黄褐色・淡黒褐色土ブロック混在 ③暗褐色粘質土 (淡黒褐色土大粒混)	×		
9	C-1	37×28-31	2	①暗褐色粘質土 ②暗褐色粘質土 (黄褐色土大粒多量混)	×		
10	C-1	16×14-21	1	暗褐色粘質土 (黄褐色土小ブロック混)	×		

ビット 番号	グリッド	規模(長軸×短軸×深さ) cm	層	土 色・土 質	柱根 有無	遺 物	備 考
11	B-2	27×25-15	1	暗褐色粘質土	×		
12	B-2	22×21-13	1	暗褐色粘質土	×		
13	B-2	2×21-60	1	明褐色粘質土(暗赤褐色土小ブロック混)	×		
14	B-2	16×14-8	1	明褐色粘質土(暗赤褐色土小粒混)	×		
15	B-2	22×17-30	1	明褐色粘質土(褐色土小粒混)	×		
16	B-2	19×15-11	1	明褐色粘質土(褐色土小粒混)	×		
17	B-2	33×26-22	1	暗褐色粘質土	×		
18	C-1	30×25-43	1	明褐色粘質土	×		
19	B-2	20×19-30	1	暗褐色粘質土	×		
20	B-1	14×14-31	1	褐色粘質土	×		
21	C-2	34×28-26	1	暗褐色粘質土(褐色・淡黒褐色土小ブロック混)	×		
22	B-2	20×18-15	1	暗褐色粘質土	×		
23	B-2	18×15-18	1	暗褐色粘質土	×		
24	B-2	25×22-38	1	明褐色粘質土	×		
25	B-2	26×22-37	1	暗褐色粘質土(炭片少量混)	×		
26	C-1	40×34-32	1	暗茶褐色粘質土(黄褐色土小ブロック・炭片混)	×		
27	C-1	62×40-40	2	①暗褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土(黄褐色土ブロック混)	×		
28	C-1	61×41-55	1	暗褐色粘質土	×		
29	C-1	19×13-28	1	不明	×		
30	C-1	20×14-24	1	不明	×		
31	C-1	30×26-17	1	不明	×		
32	B-1	20×15-43	1	褐色粘質土	×	上層質土帯	
33	B-1	16×14-11	1	褐色粘質土	×		

挿表27 土器・土製品観察表

※復元値 △残存値

SS-01

遺物番号 挿表番号 図版番号	種類 器種	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 面 調 整	内 面	胎 土 製 成	色調 外面 内面	備 考
Po 1 80 15	土師質十層 皿	① 実 7.6 ② 1.5 ③ 実 3.4	糸切りと推測される平底。	ナデ 底面調整不明	ナデ	滑 良	明赤褐色 暗赤褐色	山崎-5
Po 2 80 15	土師質十層 皿	① △ 1.5 ② 3.0	糸切りと推測される平底。	ナデ 底面調整不明	ナデ	密 良	明赤褐色 明黄褐色	山崎-2
Po 3 80 15	土師質十層 皿	① △ 1.1 ② 4.1	回転糸切りの平底。	ナデ 底面調整不明	ナデ	密 良	暗褐色 暗褐色	山崎-6
Po 4 80 15	土師質十層 皿	① △ 1.1 ② 6.3	回転糸切りと推測される平底。	ナデ 底面調整不明	ナデ	密 良	淡茶褐色 淡黄褐色	山崎-1
Po 5 80 15	瓦葺七層 皿	① 実 25.1 ② △ 4.1	器口「L」字状に屈曲する口縁部。	調整不明	調整不明	密。1~5mmの砂粒を含む 灰砂	淡褐色 淡褐色	雄-7

SS-02

遺物番号 挿表番号 図版番号	種類 器種	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 面 調 整	内 面	胎 土 製 成	色調 外面 内面	備 考
Po 6 81 15	土師質十層 皿	① △ 1.2 ② 5.4	糸切りと推測される平底。	ナデ 底面調整不明	ナデ	滑 不良	淡茶褐色 淡黄褐色	山崎-5
Po 7 81 15	土師質十層 皿	① △ 1.6 ② 実 5.6	糸切りと推測される平底。	ナデ 底面調整不明	ナデ	密 良	明赤褐色 黄褐色	山崎-11

P-32

遺物番号 挿表番号 図版番号	種類 器種	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 面 調 整	内 面	胎 土 製 成	色調 外面 内面	備 考
Po 8 82 15	土師質十層 皿	① △ 1.9 ② 実 5.4	糸切りと推測される平底。	ナデ 底面調整不明	ナデ	密 良	明赤褐色 明黄褐色	山崎-7

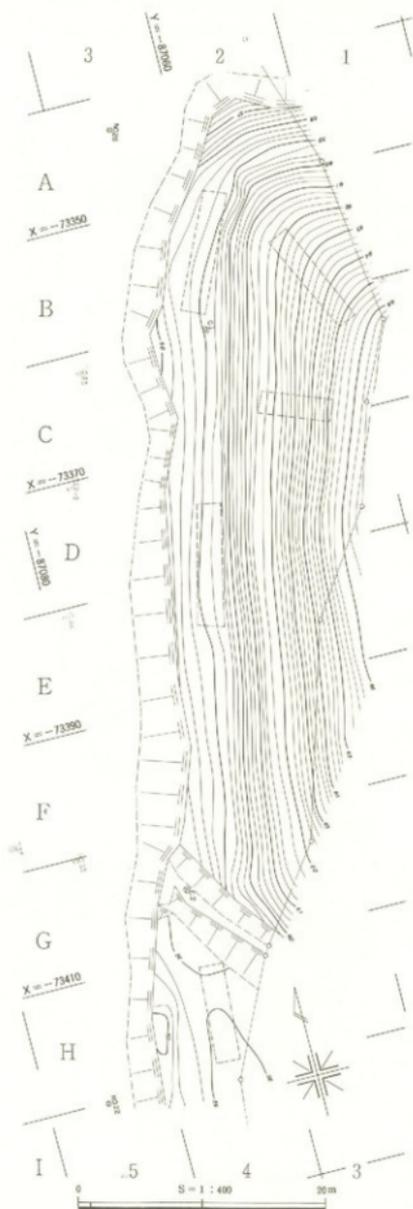
遺構外

遺物番号 挿入番号 図版番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	外面	調整 内面	胎土 土質	色調 外面 内面	備考
Po 9 84 15	赤生土器	① 長 14.7 ② △ 5.3	口縁部はやや外傾し、凹縁を施す。	ヨコナゲ	口縁部ヨコナゲ 胴部調整不明	青。砂粒を多く含む 良好	淡褐色 淡褐色	埋-4
Po 10 84 15	赤生土器 甕	① 長 15.7 ② △ 3.1	口縁部はやや外傾し、凹縁を施す。	ナゲ	ヨコヘラミガキ	密 良好	淡褐色 淡褐色	小原-3 外面磨材付
Po 11 84 15	赤生土器 甕	① 長 16.1 ② △ 5.7	口縁部は外傾する。	ヨコナゲ	口縁部ヨコヘラミガキ 胴部以下ヘラケズリ	青 良好	淡褐色 淡褐色	埋-2 内外磨材付
Po 12 84 15	赤生土器 甕	① 長 16.0 ② △ 3.6	口縁部は外傾する。	調整不明	口縁部ヨコヘラミガキ 胴部以下ヘラケズリ	青 良好	淡褐色 淡褐色	埋-3
Po 13 84 15	赤生土器 甕	② △ 3.0	口縁部は外傾するが胴部を欠損する。	ヨコナゲ	口縁部ヨコナゲ 胴部以下ヘラケズリ	青 良好	淡褐色 淡褐色	埋-1 内外磨材付
Po 14 84 15	赤生土器 甕	① 長 9.4 ② △ 3.0	口縁部は直立し凹縁を施す。	ヨコナゲ	口縁部ヨコヘラミガキ 胴部以下ヘラケズリ	青 良好	淡褐色 淡褐色	埋-8
Po 15 84 15	赤生土器 甕	② △ 2.0 ③ 長 4.2	平底。	タテヘラミガキ	ヘラケズリ	青 良好	淡青褐色 淡青褐色	山崎-4
Po 16 84 15	赤生土器 甕	① 長 20.2 ② △ 6.0	口縁部は直線状に外傾し口縁を施す。	調整不明	ヘラミガキ	青 良好	淡褐色 淡褐色	小原-2 内外磨材付
Po 17 84 15	赤生土器 甕	① 長 20.6 ② △ 3.3	口縁部は内側気味に外傾し凹縁を施す。	ヨコヘラミガキ	ナゲ	密 良好	淡褐色 淡褐色	埋-9 磨材付
Po 18 84 15	土師器 甕	② △ 4.1 ③ 長 13.2	高腿的な器。	ナゲ	ヘラケズリ	青 良好	淡褐色 淡褐色	山崎-8
Po 19 84 15	須恵器 底部	② △ 1.8 ③ 長 7.6	取柄の切り欠きによる平底。	円形ナゲ	円形ナゲ	密 良好	褐色 褐色	小原-1
Po 20 84 15	土師器 甕	① 長 20.3 ② △ 5.1	外反して開く口縁部。	口縁部ハケ後ナゲ磨し 胴部ハケ目	口縁部ヨコナゲ 胴部ヘラケズリ	青 良好	淡褐色 淡褐色	埋-6
Po 21 84 15	土師器 甕	① 長 28.8 ② △ 10.9	外反して開く口縁部。	口縁部ハケ後ナゲ磨し 胴部ハケ目	口縁部ヨコナゲ 胴部ヘラケズリ	密。1~4mmの砂粒含む 良好	淡褐色 淡褐色	小原-4
Po 22 84 15	土師器 甕	② △ 1.6 ③ 長 8.9	低い高台が付く器。	ヨコナゲ	調整不明	青 良好	淡褐色 淡褐色	埋-5 内外磨材付
Po 23 84 15	瓦	② △ 16.4 ③ △ 11.3 ④ △ 2.2		タテキ目	青目	青 良	淡褐色 淡褐色	山崎-9
Po 24 84 15	甕形土製品	① 長 29.9 ② △ 12.6	角状の把手が1対つく。	ハケ目	ハケ目	青。砂粒含む 良好	淡褐色-淡褐色 淡褐色-淡褐色	山崎-10

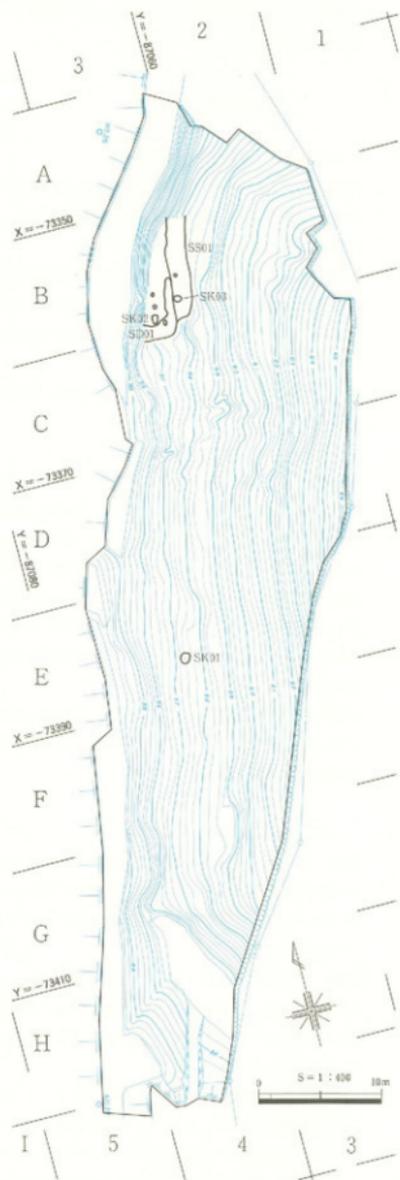
挿表28 石製品観察表

遺物番号	挿入番号	図版番号	取上番号	出土位置	種類	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重	備考
S 1	84	15	6	遺構外	砥石	砂質粘板岩	9.4	3.4	3.0	110 g	埋-1
S 2	84	15	9	遺構外	地輪	大山系安山岩質火砕岩		23.3	12.4	10.0 kg	小原-1

第8章 御内谷榎塔遺跡の調査



挿図85 調査前地形測量図



挿図86 全体遺構図

御内谷横谷遺跡は、西に伸びる尾根の先端部に位置する。調査地は尾根の傾斜変換点から西に向けて下る斜面部である。検出した遺構は、土坑3、溝状遺構1、段状遺構1、ピットである。ここでは各遺構について調査の結果を述べる。

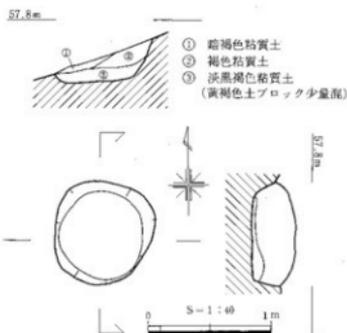
第1節 土坑

SK-01 (挿図87 図版16)

位置 E-3グリッドのほぼ中央に位置し、調査地の中央やや南寄りで見出した。標高57.3~57.7mに位置する。埋土は3層に分層でき、褐色系の土を基本とする。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な円形を呈し、断面形は皿状となる。規模は検出面で長軸0.85m×短軸0.76m、底面で長軸0.70m×短軸0.67m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.32mを測る。

時期・性格 遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



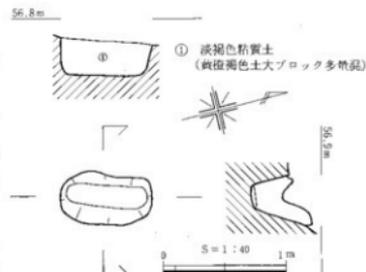
挿図87 SK-01遺構図

SK-02 (挿図88・90)

位置 B-3グリッド南端に位置し、調査地北側のSS-01内で検出した。遺構の南側はSD-01に近接する。標高56.8m付近に位置する。埋土は淡褐色土の単層であった。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な楕円形を呈し、断面形は長方形状となる。規模は検出面で長軸0.79m×短軸0.40m、底面で長軸0.66m×短軸0.18m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.35mを測る。

時期・性格 遺物は出土していない。切り合い関係は明確でないが、SS-01に伴う遺構と思われる、時期は弥生時代終末~古墳時代初期頭部であろう。



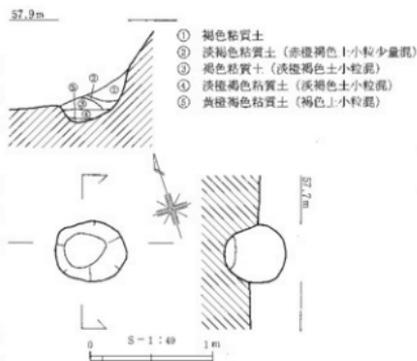
挿図88 SK-02遺構図

SK-03 (挿図89・90)

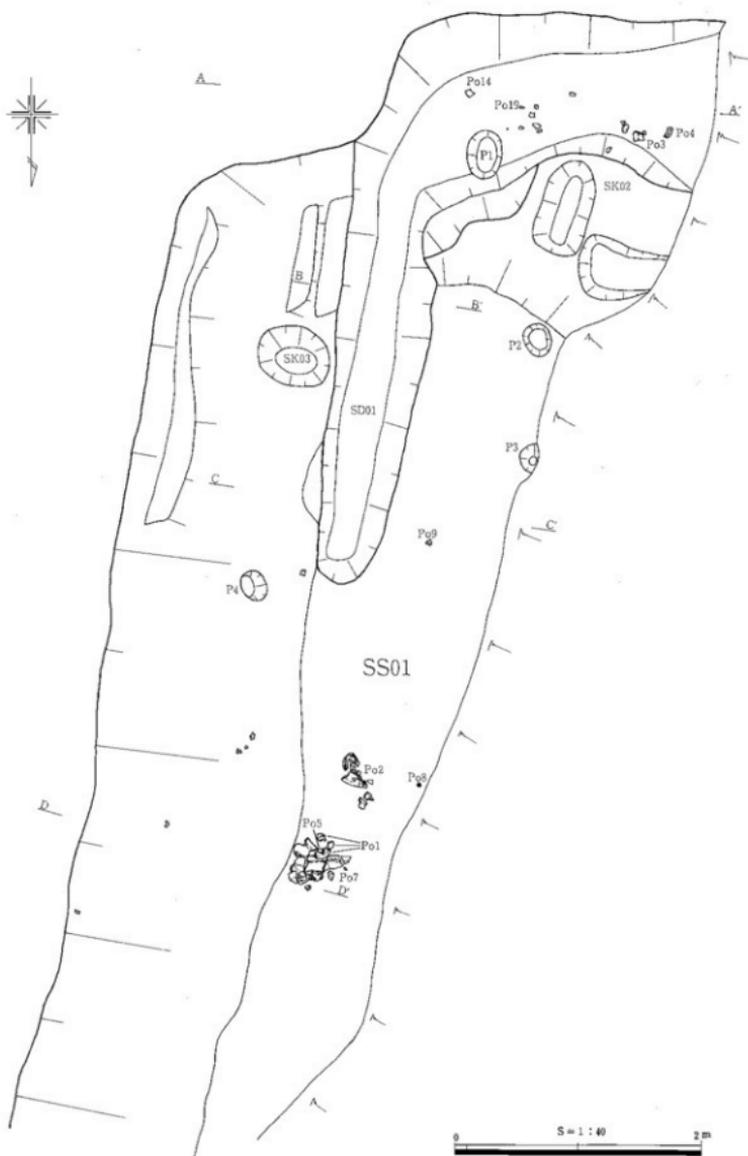
位置 B-3グリッド南西隅、調査地北側のSS-01内で検出された。遺構はSS-01の斜面部裾に築かれている。標高57.2m~57.5mに位置する。埋土は5層に分層でき、褐色系の土を基本とする。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な楕円形を呈し、断面は碗状となる。規模は検出面で長軸0.53m×短軸0.48m、底面で長軸0.33m×短軸0.27m、残存する部分で底面までの最大の深さは0.43mを測る。

時期・性格 遺物は出土していない。SS-01斜面部を掘り込んで造られており、SS-01内に形成された他の遺構と埋土・堆積状況に大きな差はなく、SS-01に伴う遺構と思われる。遺構の時期は弥生時代終末~古墳時代初期頭部であろう。



挿図89 SK-03遺構図



挿図90 SS-01、SD-01遺構図(1)

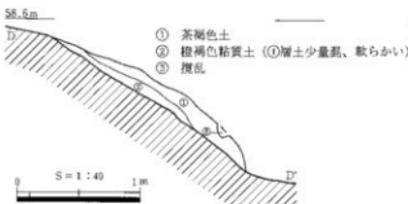


- ① 淡褐色粘質土
- ② 褐色粘質土
- ③ 暗褐色粘質土
- ④ 褐色粘質土 (暗黄褐色土粒混)
- ⑤ 淡褐色粘質土 (暗黄褐色土粒混)
- ⑥ 淡茶褐色粘質土 (暗黄褐色土粒混)
- ⑦ 暗褐色粘質土
- ⑧ 暗褐色粘質土
- ⑨ 暗黄褐色粘質土 (淡褐色土大ブロック多量混)
- ⑩ 褐色粘質土 (暗褐色土小ブロック混)

- ① 暗赤褐色粘質土
- ② 褐色粘質土 (暗赤褐色土小粒多量混)
- ③ 黄褐色粘質土 (淡黒褐色・暗赤褐色土粒混)
- ④ 暗褐色粘質土 (暗赤褐色土小ブロック少量混)
- ⑤ 暗褐色粘質土 (暗赤褐色土・褐色土小ブロック混)
- ⑥ 暗黄褐色粘質土



- ① 暗褐色土 (暗黄褐色土多量混)
- ② 暗褐色粘質土 (褐色強く軟らかい)
- ③ 暗褐色粘質土 (黄褐色土混、②層より橙色強い)
- ④ 暗褐色粘質土 (黄褐色土混、②層より軟らかい)
- ⑤ 暗褐色粘質土 (しまる)
- ⑥ 暗黄褐色土 (地山土混)



挿図91 SS-01、SD-01遺構図(2)

第2節 溝状遺構

SD-01 (挿図90・91 図版16)

位置 調査地の北側、B・C-3グリッドにまたがり、SS-01内で検出した。標高56.4m～57.3m付近に位置する。本遺構の東側にSK-03が、南側にはSK-02がそれぞれ直交するように隣接する。埋土は6層に分層でき、基本となるのは暗褐色土である。

形態 遺構南側が削平されており正確な規模は不明だが、検出できた範囲で、全長約6.4m、幅0.63m～1.48m、深さは最大で0.68mを測る。遺構の走向はN-10°-Eから、南側でN-72°-Eに屈曲して伸びる。

遺物 SD-01埋土上から弥生土器Po3・4・6・14が出土したが、これらは全て埋設過程に転落、堆積したと考えられ、本遺構ではなくSS-01に伴うものであろう。

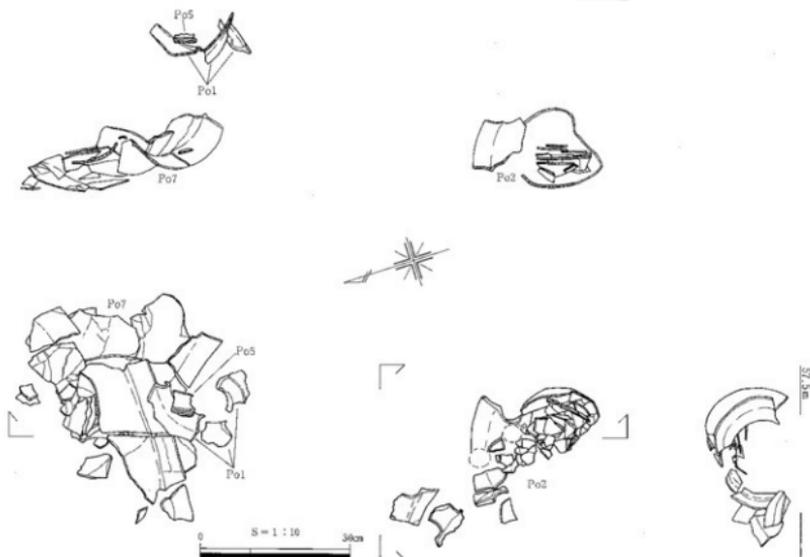
時期・性格 本遺構はSS-01後背斜面沿いに掘り込まれており、底面は南側屈曲部分から西に向けて緩やかに下るため、SS-01の排水溝的な役割を果たしたものと推測する。SS-01との関係から、本遺構の時期は弥生時代終末～古墳時代初期期であろう。

第3節 段状遺構

SS-01 (挿図90～94 図版16・17)

位置 B-3グリッド南西隅を中心とし、標高57.2m～58.5mに位置する。本遺構はSK-02・03、SD-01・ピット群と共に遺構群を形成する。埋土は10層に分層でき、褐色～暗褐色の上を基本とする。

形態 本遺構の北側は削平されており正確な形状・規模は明らかでない。平面形は検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は「L」字状である。残存する部分での検出規模は南北8.46m、東西3.26m、底面までの最大



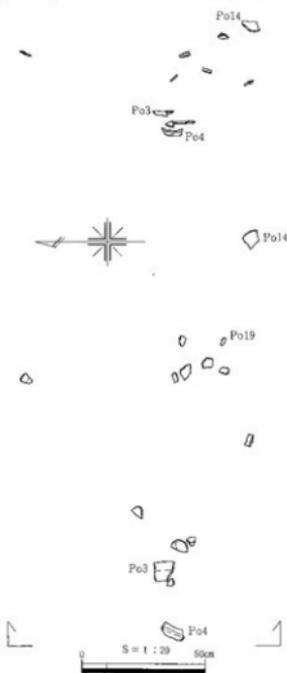
挿図92 SS-01遺物出土状況(1)

の深さは1.41mを測る。

遺物 SS-01からは弥生土器P01～P016が出土した。このうち、壺P02・甕P07が遺構北側の底面直上で互いに口縁部が向き合うようなかたちで出土した。口縁と口縁の間は50cm程度離れている。出土状況から、どちらも現位置に廃棄され、そのまま埋没したものであろう。壺P02の西側、甕P07の胴部～底部は木の根による攪乱をうけている。他に底部P08・9が底面直上で出土した。

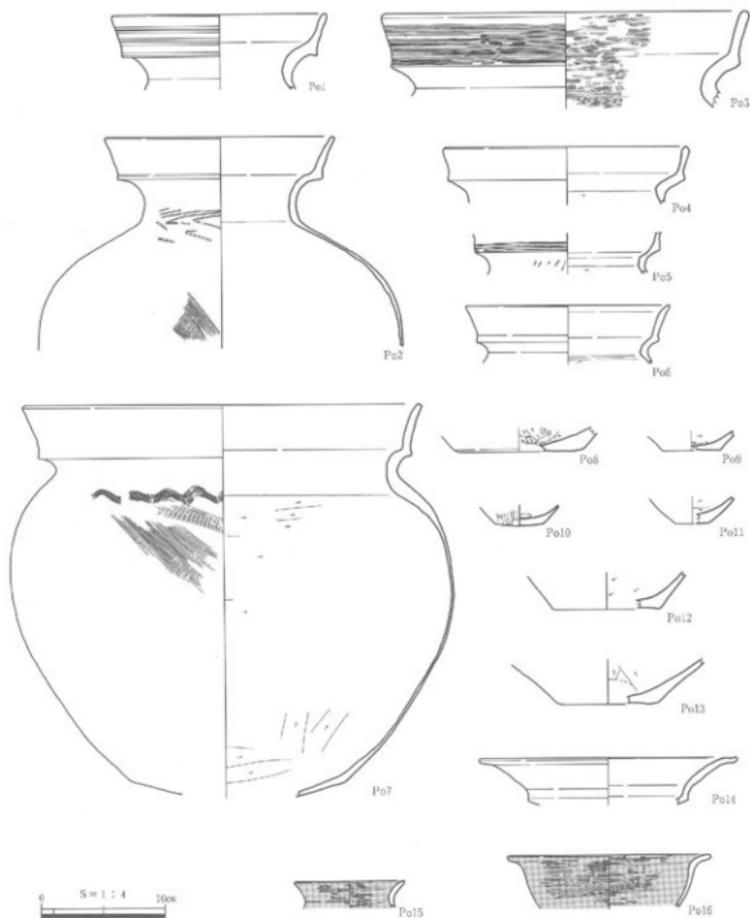
出土した土器について概略を述べる。P01・2は壺である。P01は口縁部外面に多条平行沈線文が施され、口縁端部はわずかに肥厚する。P02は口縁端部をやや押さえておさめ、肩部近くの胴上位に最大径をもつ。器壁は2～3mmと非常に薄い。頸部外面には板状工具による無軸羽状文が施される。P03～7は甕である。P07は口縁端部の処理・胴部最大径の位置・器壁の厚さがP02と同じ特徴を持つ。出土状況からみてもP02とP07は同時期のものであろう。P08～13は底部である。P09・10・11は尖底化し、胴部と底部の境も不明瞭である。P014は高杯の杯部で、杯底部から短く上方に屈曲した後口縁部は外反しながら立ち上がる。P015は小型の壺、P016は鉢か。どちらも内外面とも赤彩されている。

時期 底面直上出土のP02・7から、弥生時代終末～古墳時代初頭期であろう。



挿図93 SS-01遺物出土状況(2)

性格 遺構の北・西側が削平されているため定かではないが、底面・後背斜面に掘り込まれたビットの存在から、SS-01内に建物が築かれていた可能性が考えられる。ただ、西側の谷へ向かう斜面の角度からSS-01の底面は決して広くなく、残存するビットの規模から推測しても簡単な上屋構造しか想定できない。また、その性格も不明である。Po2・7が意図的に口縁部を向かい合わせて廃棄されたのかどうか疑問が残るが、他の出土遺物から考えて、祭祀的な意味合いは感じ取れない。



挿図94 SS-01遺物実測図

第4節 遺構外の遺物

遺構外出土遺物 (挿図95 図版17)

出土遺物は少なく、全て丘陵部から転落したものと考えられる。

Po17は弥生土器の壺で、口縁部には5条以上の凹線文を施す。口縁部は上下に拡張し、内傾する。内外面とも丹塗りする。胎土から搬入品と思われ、形態から鬼川市II式段階のものであろう。

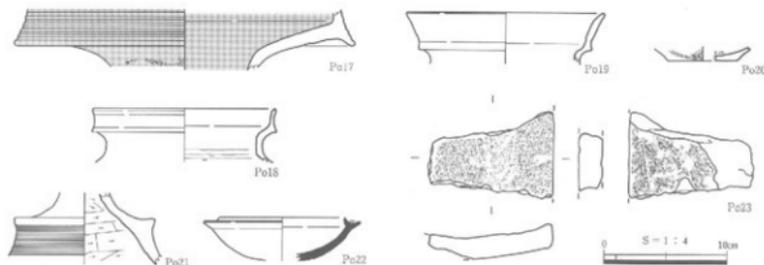
Po18・19は弥生土器の甕である。Po18は口縁部が外反するもの直立する。Po19は口縁端部をつまみ出すようにしておさめる。両者とも弥生時代終末期に比定できる。

Po20は底部で、外面へラミガキ、内面には指頭圧痕が確認できる。後期後葉段階のものか。

Po21は器台の脚台部で、外面に13条以上の平行沈線文を施す。弥生時代後期後葉段階に比定できる。

Po22は須恵器の坏身で、立ち上がりは内傾し端部は先細り気味におさめる。

Po23は瓦で、凹面には布目痕が認められる。



挿図95 遺構外出土遺物実測図

第5節 まとめ

御内谷嶺塔遺跡は全体が斜面地であるため、検出できた遺構は僅かであった。出土遺構・遺物ともに弥生時代終末～古墳時代初頭を主体とする。ここでは出土した遺構・遺物の中で特徴的なものについて触れ、一応のまとめをしたい。

Po17は第4節でも述べた通り吉備地方からの搬入品と思われ、鬼川市II式に比定できる壺である。同時期の細頸壺と小器台が見町田住桶川遺跡で出土している⁽¹⁾。従来から日野川は山陽側の物資・情報を伝える主要なルートと考えられており、西白善地域は中期後葉段階に吉備系の土器が日野川中流域の中山間地帯で確認されている⁽²⁾が、日野川左岸(同河川支流小松谷川流域)に位置する会見町でも鶴田合清水遺跡で吉備系の長頸壺・台付壺と分銅形土製品が出土しており、早くからの交流が窺える。今回の調査地は尾根斜面部～裾部にあたり、出土遺物は尾根上から転落したものが殆どであろう。Po17もその可能性が強い。山陰地方東部における弥生時代後期の吉備系長頸壺は、主に墳丘墓・土壇墓群から出土することを特徴とする⁽³⁾。御内谷妙見塔遺跡から供献土器と思われる吉備系の高坏が出土しており、これらを勘案すれば本遺跡の立地する尾根頂部に当該期の墓が築かれている可能性があるが、想像の域を超えない。

SS-01は西に向けて下る斜面の中腹に築かれた遺構である。西側は後世の削平を受けているが、底面あるいは後背斜面部にピットがあり、本来は上部施設を持っていたと考えられる。同様な形態の段状遺構は周辺地域

でも幾つか確認されており⁽⁸⁾、弥生時代であれば概ね中期中葉～後期に比定できる。東宗像遺跡で検出された中期中葉の段状遺構は堅穴住居が近接しており、住居ではなく倉庫的な役割を果たしたと考えられている⁽⁹⁾。堅穴住居と段状遺構の位置関係は後期になっても大きな違いは無い。本遺跡でSS-01（に含まれる土坑・溝・ピット）以外に築かれた遺構は時期・性格とも不明な土坑1基だけで、敢えて急峻な斜面に生活の場をもつ必要に迫られていたとは思われない。SS-01が属する集落を検出していないが、周囲に遺構が全く見られないため、集落の一部であれば縁辺部に当るであろう。調査結果から住居あるいは倉庫であると結び付けるには資料に乏しく、その性格について詳しく言及できない。仮にSS-01が単独で築かれたのであれば、異なる性格を持っていることも考えられ、同様な立地・形態をとる段状遺構の類例を検討した上で論じる必要がある。

註

- (1)『小町石橋ノ上遺跡 朝倉第2遺跡・田住桶川遺跡・田住第8遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1997年
 (2)松井 潔『東の土器、南の土器—山陰地方東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初期の非在地系土器の動態—』『古代古蹟 第19集』 1997年

(3)註(2)文献

(4)本調査で出土したものは別に、試掘調査でも内外面赤彩の高杯が1点出土している。残存する部分の形態は在地の高杯と大きな違いは見られないが、胎土は御内谷妙見塔遺跡出土の吉備系高杯に似ている。

『1996年度 町内遺跡発掘調査報告書』 会見町教育委員会 1997年

(5)弥生時代中期～後期の類例としては、米子市東宗像遺跡、同吉谷トコ遺跡、同陰田第6遺跡、西伯町清水谷遺跡、会見・岸本町越敷山遺跡群、岸本町小町越敷野原第1遺跡、羽谷町南谷大山遺跡、東郷町宮内第4・第5遺跡等が挙げられる。

『東宗像遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1985年

『吉谷トコ遺跡』財団法人米子市教育文化事業団 1994年

『陰田遺跡群(本文編I) 陰田第6遺跡 陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区』

財団法人鳥取県教育文化財団 1996年

『清水谷遺跡』西伯町教育委員会 1992年

『越敷山遺跡群<第2分冊>』 会見町教育委員会・岸本町教育委員会 1994年

『坂長宮田ノ上遺跡 坂中第5遺跡 坂長佛谷遺跡 小町越敷野原第1遺跡、小町越敷野原第2遺跡』

財団法人鳥取県教育文化財団 1997年

『南谷大山遺跡 南谷ヒジリ遺跡 南谷22・24～28号墳』財団法人鳥取県教育文化財団 1993年

『南谷大山遺跡II 南谷29号墳』財団法人鳥取県教育文化財団 1994年

『宮内第1遺跡 宮内第4遺跡 宮内第5遺跡 宮内2・63～65号墳』財団法人鳥取県教育文化財団

1996年

挿表29 土坑一覽表

遺構名 SK	挿器番号	版図番号	グリッド	平面形	規模(長軸×短軸)cm		深さ	長軸方向	遺物	時期	備考
					検出面	底面					
0.1	87	16	E-3	不整な円形	8.5 × 7.6	7.0 × 6.7	3.2	N-27°-E			
0.2	88		B-3	不整な楕円形	7.9 × 4.0	6.6 × 1.8	3.5	N-17°-E			
0.3	89		B-3	不整な楕円形	5.3 × 4.8	3.3 × 2.7	4.3	N-65°-W			

挿表30 溝状遺構一覧表

遺構名 S D	挿図番号	図版番号	規模 (m) 全長×幅×深さ	遺 物	時 期	備 考
0 1	90・91	16	6.4 × 0.64 ~ 1.48 ~ 0.68	流入した弥生土器	弥生時代終末～古墳時代初期	

挿表31 段状遺構一覧表

遺構名 S S	挿図番号	図版番号	規模 (m) 全長×幅×高さ	遺 物	時 期	備 考
0 1	90~94	16・17	8.46 × 3.26 ~ 1.41	弥生土器壺・甕・高杯・鉢。赤彩されたものを含む	弥生時代終末～古墳時代初期	

挿表32 ビット一覧表

ビット 番号	グリッド	規模 (長軸×短軸×深さ) cm	層	土 色・土 質	柱石 有無	遺 物	備 考
1	B-3	40 × 29 - 17	1	淡褐色土 (暗褐色土混)	×		
2	B-3	26 × 22 - 12	1	暗黄褐色土	×		
3	B-3	23 × 21	1	暗黄褐色土	×		
4	B-3	25 × 20 - 25	1	暗黄褐色土 (砂礫多量混)	×		

挿表33 土器観察表

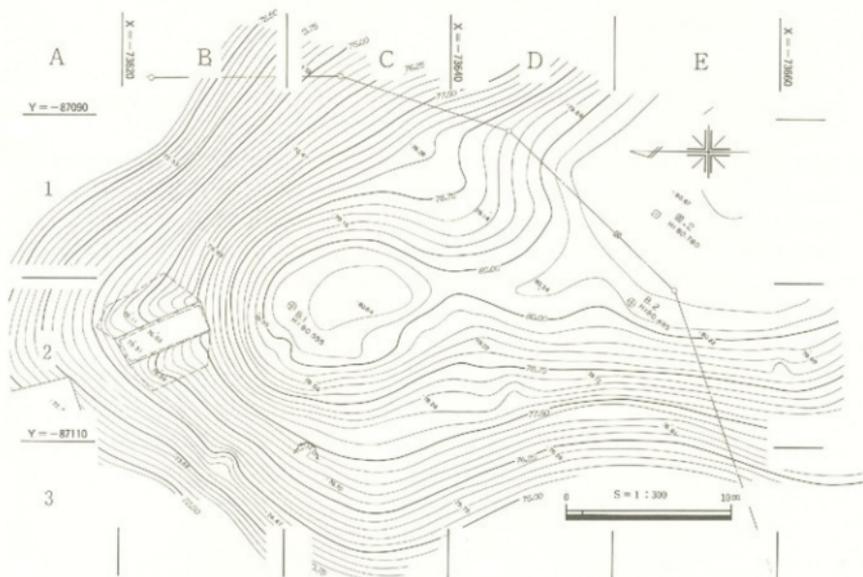
遺物番号 挿図番号 図版番号	種類 器種	出量 (個)	形 態 上 の 特 徴	外 観 内 容	胎 土 施 成	色調 丹 内 面	備 考
Po 1 94 17	弥生土器 壺	① 17.9 ② 八 6.2	外反する肩部から外傾して立ち上がる複合口縁。肩部は丸くおさまる。下部の縁は斜め下方に突出する。口縁部外面に多量平行沈線を加した段ナゲ滑し。	コナダ	口縁部コナダ 加ナダ	赤 不良	赤褐色 茶褐色 山崎-18
Po 2 94 17	弥生土器 壺	① 18.2 ② 17.2	外反しながら上方へびる肩部から外傾して高縁的に立ち上がる複合口縁。口縁部外面を持つ。口縁部肩部に1条の沈線を入れて縁を強調するが、縁自体はあまり。肩部から肩帯に向けて「ハ」字状に開き、肩帯付近に段大縁を持つ。	口縁部コナダ 肩部～肩部風化のため 判断不明 以下斜め方向のハケ	口縁部コナダ 加ナダ 以下ハケナゲと要加 あるが風化のため器種 判断困難のケズリの方 向は右か	赤。1～2mmの長石 を多く含む 黄	にぶい赤褐色 ～黒色 にぶい赤褐色 ～黒色 山崎-5
Po 3 94 17	弥生土器 壺	① 30.2 ② 21.0	外反する肩部から外傾して高縁的に立ち上がる複合口縁。肩部は丸くおさまる。下部の縁はほぼ水平方向に突出するがあまり。口縁部外面に13条の平行沈線を加す。具数観察によるものか。	コナダ	口縁部・肩部とも東方 向の縁がいへラリどき	赤 良好	黄褐色 黄褐色 山崎 16
Po 4 94 17	弥生土器 壺	① 30.4 ② 4.7	外反する肩部から外傾して高縁的に立ち上がる複合口縁。肩部は丸くおさまる。下部の縁は斜め下方に突出する。	コナダ	口縁部コナダ 肩部右方向のヘラクス 不良	赤。0.5～1mmの砂 粒を含む	黄褐色 山崎-17
Po 5 94 17	弥生土器 壺	① 3.5	外反する肩部を持つ複合口縁だが、肩部を欠く。外面下部部に凹縁の平行沈線を加す。肩部にはへラによる刻み目を施して入れる。	コナダ	口縁部コナダ 肩部もコナダだが凹 縁を持つ。ヘラクスリ 後ナゲ 以下左方向のヘラクス リ	赤。砂粒を含む 良好	褐色 茶褐色 口縁部外面 に横付着 山崎-13
Po 6 94 17	弥生土器 壺	① 16.4 ② 4.9	外反する肩部から外傾して立ち上がる複合口縁。肩部は丸くおさまる。下部の縁は斜め下方に突出するがあまり。	コナダ	コナダ	赤 良好	黄褐色 山崎-9
Po 7 94 17	弥生土器 壺	① 32.0 ② 八 32.1	外反する肩部から外傾して立ち上がる複合口縁。肩部は丸くおさまる。下部の縁は斜め下方に突出する。胴部には2/3に段大縁を持つ。胴部と底部の境は不明瞭で、腹面中央部を穿らむ本完全な平底を施す。肩部に段状文を施す。	口縁～肩部コナダ 肩部付近では斜め方向 のハケ目を確認できた が、以下は風化により 不明	口縁～肩部コナダ 肩部右方向、底部付近 は丸くおさまるハケ クスリ	赤。2mm程度の石英・ 長石を多く含む 良	にぶい赤褐色 ～にぶい黒褐 色 にぶい黄褐色 ～にぶい黒褐 色 山崎-7

遺物番号 洞窟番号 図記番号	遺物 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	表面 外面	内面	胎土 統 成	色調 外面 内面	備 考
Pa 8 94 17	弥生土器 底部	② △ 1.9 ③ ※ 10.6	平底。底部と胴部の接はあまい。	風化のため調整不明	不定方向のヘラケズリ	密 良	赤い、黄褐色 に濃い黒褐色	小塚 1
Pa 9 94 17	弥生土器 底部	② △ 1.6 ③ ※ 4.8	小型の平底。	ナデ	右方向のヘラケズリ及び 指痕圧痕	やや粗。砂粒を含む 良	黒褐色 茶褐色	山崎-1
Pa10 94 17	弥生土器 底部	② △ 1.7 ③ ※ 4.0	小型の平底。底部と胴部の接はあまい。	風化のため調整不明	縦方向のヘラキガキ	密。 良好	赤褐色 黒褐色	山崎-2
Pa11 94 17	弥生土器 底部	② △ 2.3 ③ ※ 2.6	尖底化を指向する平底。	風化のため調整不明	右方向のヘラケズリ	やや粗	黒褐色 黄褐色	山崎-4
Pa12 94 17	弥生土器 底部	② △ 3.1 ③ ※ 8.8	平底。	風化のため調整不明	斜め下方向のヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 赤黄褐色	山崎 5
Pa13 94 17	弥生土器 底部	② △ 3.7 ③ ※ 8.3	平底。	風化のため調整不明	底面ナデ 立ち上がり部分上方向 のヘラケズリ	密。 良好	赤褐色 黒褐色	山崎-6
Pa14 94 17	弥生土器 高杯	① ※ 20.5 ② △ 3.9	杯底部から一直上方向へ短く屈曲した後、 やや外反しながら大きく湾曲して立ち上る 複合口縁状の高杯。	ヨコナデ	ヨコナデ	密。 良好	赤褐色 淡黄褐色	山崎-14
Pa15 94 17	口縁部	① ※ 8.7 ② △ 2.3	短く外反する口縁。小型の器あるいは腰か。	縦方向の細かいヘラキ ガキ	縦方向の細かいヘラキ ガキ	密 良好	赤褐色 赤褐色	内外面とも 赤形 山崎-7
Pa16 94 17	杯部	① ※ 16.0 ② △ 4.4	短杯の杯部。口縁部は外反して開く。や や小型の高杯、あるいは大形の底脚杯に なるか。	縦方向の細かいヘラキ ガキ	縦方向の細かいヘラキ ガキ	密 良好	赤褐色 赤褐色	内外面とも 赤形 山崎-8

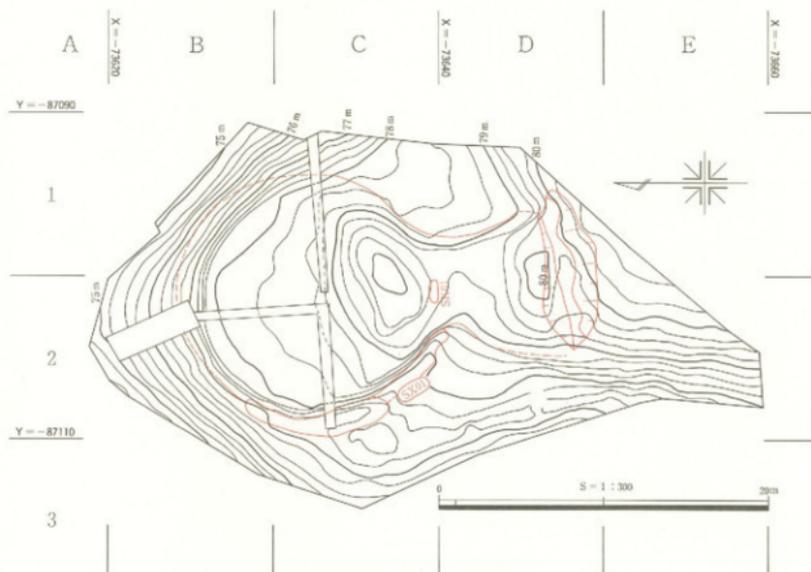
遺構外

遺物番号 洞窟番号 図記番号	遺物 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	表面 外面	内面	胎土 統 成	色調 外面 内面	備 考
Pa17 95 17	弥生土器 蓋	② △ 5.0	胴部からやや外反しながら大きく開いて 立ち上がる口縁。口縁端部は上下に拡広し、 内傾する。膨脹された口縁端部外側に はより集積上の凹線文を画す。	胴部の口縁に向けての 立ち上がり部分には縦 方向のハケが認められ る 軸はヨコナデ	ヨコナデ	密。 良好	赤褐色 赤褐色 赤褐色	内外面とも 赤形 山崎-19
Pa18 95 17	弥生土器 蓋	① ※ 14.6 ② △ 4.4	外反しながら上方へ伸びる断面から短く 上方へ立ち上がる口縁。端部は丸くおさ めらる。下端部の縁は斜め下方へ突出。	ヨコナデ	口縁部～胴部上半ヨコ ナデ 以下左方向のヘラケズ リ	密 良	赤褐色 黄褐色	口縁部内側 窪形 山崎-12
Pa19 95 17	弥生土器 蓋	① ※ 15.9 ② △ 4.4	外反する断面から外反して立ち上がる口 縁。胴部はつまみ出すようにしておさめ らる。下端部の縁は斜め下方へ突出するが あまい。	ヨコナデ	口縁部～胴部上半ヨコ ナデ 以下右方向のヘラケズ リ	密 良好	淡黄褐色 赤褐色	口縁部中央 ～胴部外側 窪形 山崎-9
Pa20 95 17	弥生土器 底部	② △ 1.5 ③ ※ 5.9	平底。	底面ナデ 底面斜め方向のヘラキ ガキ	指痕圧痕	密 良好	赤褐色 黄褐色	山崎 3
Pa21 95 17	弥生土器 胴部	② △ 5.9	すぼまった胴部から「ハ」の字状に開 き、縁は複合口縁状となる脚。胴部を 欠く。胴部あるいは唇部の隅。複合口縁 状となる部分には外面に3条以上の平行 凹線文を画す。	ヨコナデ	右方向のヘラケズリ	密。 1～2mmの砂粒 を多く含む 良好	赤褐色 黄褐色	胴部内側 窪形 山崎-15
Pa22 96 17	須恵器 杯身	① ※ 10.2 ② △ 3.6	立ち上がりは内傾し、胴部は上方へつま み出すように先回り気取におさめらる。受 部はやや上方へのび、胴部は丸くおさめ らる。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 良好	灰色 灰色	山崎-11
Pa23 96 17	瓦	② △ 10.2 ③ △ 7.1 ④ 2.0	布目のある平瓦。	凸面風化のため調整不 明	凹面布目	密。 1～3mmの石瓦 を多く含む 良好	褐色 褐色	山崎-1

第9章 御内谷法城遺跡の調査



挿図96 調査前地形測量図



挿図97 全体遺構図

第1節 古墳

法城古墳 (挿図96~111 図版18~22)

位置 古墳は谷に張り出す尾根上の平坦面から斜面へと変わる地形変換点に位置する。水田部との比高差は約26mを測る。

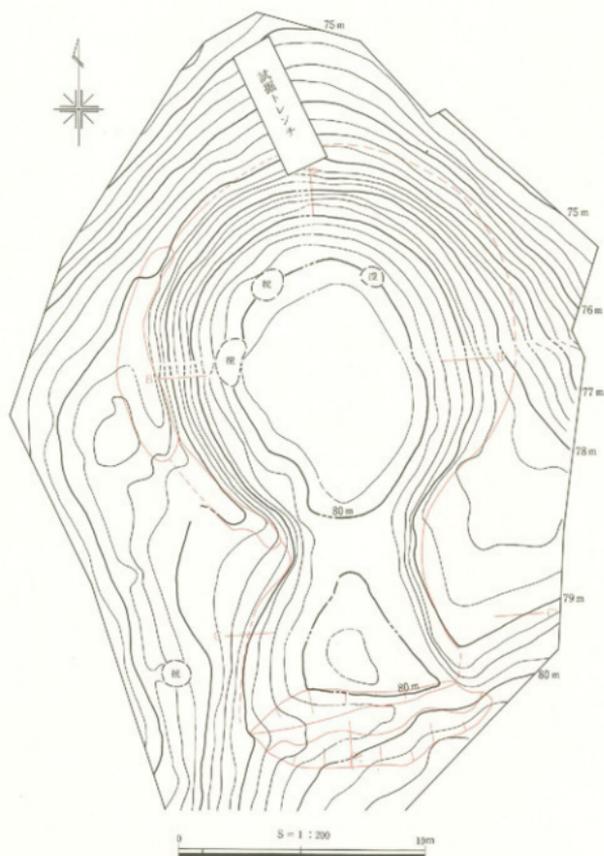
墳丘 古墳は後円部に北に向ける前方後円墳だが、調査前には明確な墳丘を持つ後円部に対し前方部は不明瞭であり、円墳の可能性も考えられた。前方部前端に当たる南側のわずかな窪みが辛うじてその痕跡を留める程度であった。土層断面に基づく墳丘の規模は全長22.8m、後円部径11.8m、不明確な前方部幅は約9mを測る。後円部の高さは盛土が最大2.2m、地山を削り出している西側周溝底からは3.4mを測る。前方部の高さは盛土が最大1mである。標高は後円部上で80.44m、前方部上では80.27mを測り、後円部と前方部の各頂部の標高は大差がないが、後円部がやや高くなっている。



挿図98 法城古墳検出測量図

墳丘の築造方法は、地山の掘削調整と盛土からなる。地山の掘削調整は後門部北側と前方部西側を除く箇所で認められる。後門部西側からくびれ部にかけては削り出しにより墳形を整えると共に浅い周溝を造っている。その規模は幅0.7~1.7m、深さ10cm程度である。後門部東側から前方部端部にかけては削り出しにより墳形を整えているが周溝は造っていない。谷側から見えないことや墳丘盛土の供給源としての意識が強く手抜きが行われたのであろう。前方部前端は尾根筋に直交するように掘削して周溝を造り出している。その規模は幅0.8~2.5m、深さ50cm程度を測る。くびれ部の墳丘下でSK-01が検出されたが、その位置は後門部を企画する円形ライン上にほぼ合致することからいわゆる企画講的な性格を持っていると推測される。盛土は挿図100・101の③層の上面から行われている。盛土の実施では、特に下層部では外縁部に土手状に積んだ後に内を埋めていく方法が採られている。墳丘上には葎石や埴輪は存在しない。

主体部 後門部に主体部の存在が推測されたが、平面的に主体部を確認することは出来なかった。しかし、遺物の出土状況と時期差から2基の主体部が存在した可能性が強く、上層断面の観察で対応する墓室輪郭を検出した



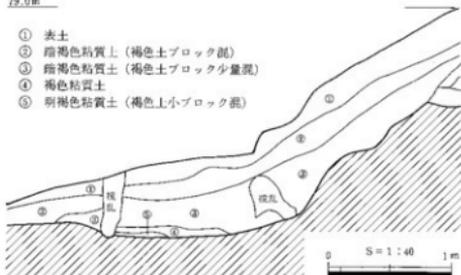
挿図99 法城古墳墳丘測量図

が、非常に不明瞭なもので乾燥の具合では別の輪郭ともできる状態であった。

第1主体 後円部の中央に位置し、主軸は古墳の長軸に対して直交すると考えられる。前述したように平面的に検出することが出来なかったため明確な平面形・規模は不明であるが、残存部から推定される主体部規模は全長2.8m以上、幅約1m、墳丘表面からの深さ約0.9mである。主体部内には木棺が埋納されていたと推測されるが、

79.0m

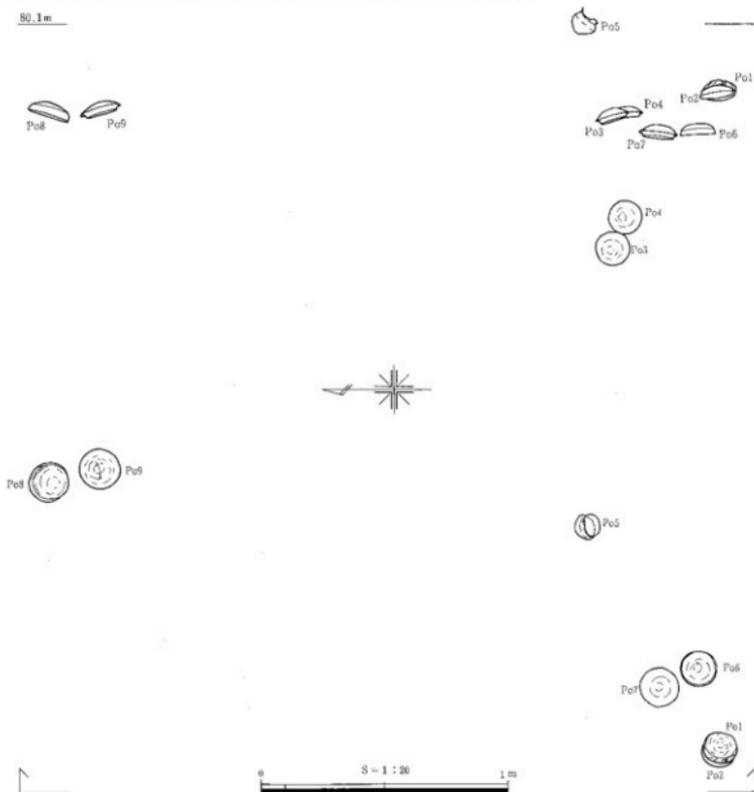
- ① 表土
- ② 暗褐色粘質土 (褐色土ブロック混)
- ③ 暗褐色粘質土 (褐色土ブロック少量混)
- ④ 褐色粘質土
- ⑤ 明褐色粘質土 (褐色土小ブロック混)



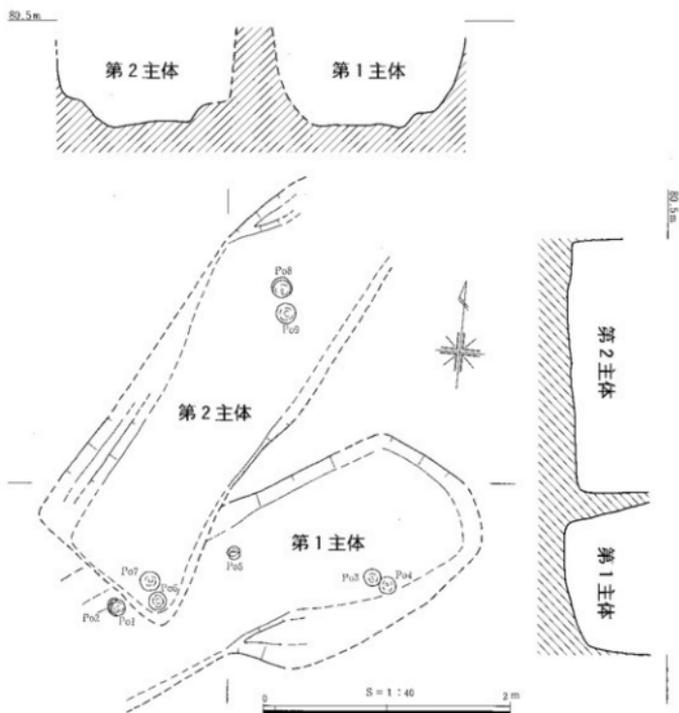
挿図103 周溝断面図

木棺の真跡も含め主体部埋土の分層は出来なかった。底面が平坦状を呈することから考えて箱形木棺であろう。墓壇の底部と推測される位置から須恵器が出土した。西側では口縁部を下に向け重ねられた杯蓋Po1・2が出土し、東側でも口縁部を下にした杯身Po3・4が出土した。また、短須壺Po5が中央部北寄りから出土した。Po1～4は時期的に対応しセット関係になるもので、田辺編年のMT15形式に併行し、大谷編年のA2a型にあたる。Po5は類例が少ないものであるが、これらの杯類に伴うと考えられる。

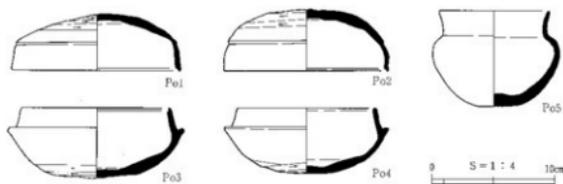
80.1m



挿図104 埋葬主体内遺物出土状況図



挿図105 埋葬主体位置推定図

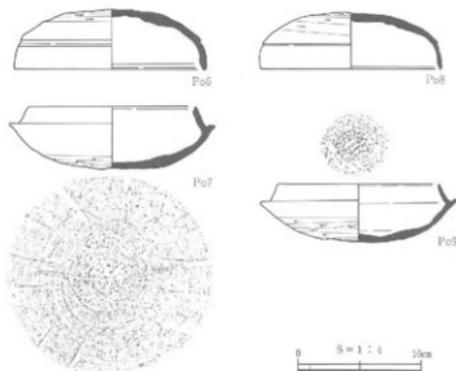


挿図106 第1主体出土遺物実測図

第2主体 後門部の中央に位置し、主軸は古墳の長軸に対し斜交すると考えられる。平面的に検出することが出来なかったため明確な平面形・規模は不明であるが、新しい形態を示すPo8・9が古い形態のPo3・4より深い位置から検出されたことから、第2主体が第1主体を一部破壊して掘り込まれ、その端はPo3・4とPo8・9の間にあると推測される。残存部から推定される規模は全長3.4m以上、幅約1.1m、墳丘表面からの深さ約0.8mである。第1主体と同じく、主体部内には木棺が埋納されていたと推測されるが、木棺の痕跡も含め主体部埋土の分層は出来なかった。底面が平坦状となることから考えて箱形木棺であろう。墓底の底部と推測される位置から須恵器が出土した。北側から口縁部を下にした坏蓋Po6と坏身Po7、南側からも同じく口縁部を下に向

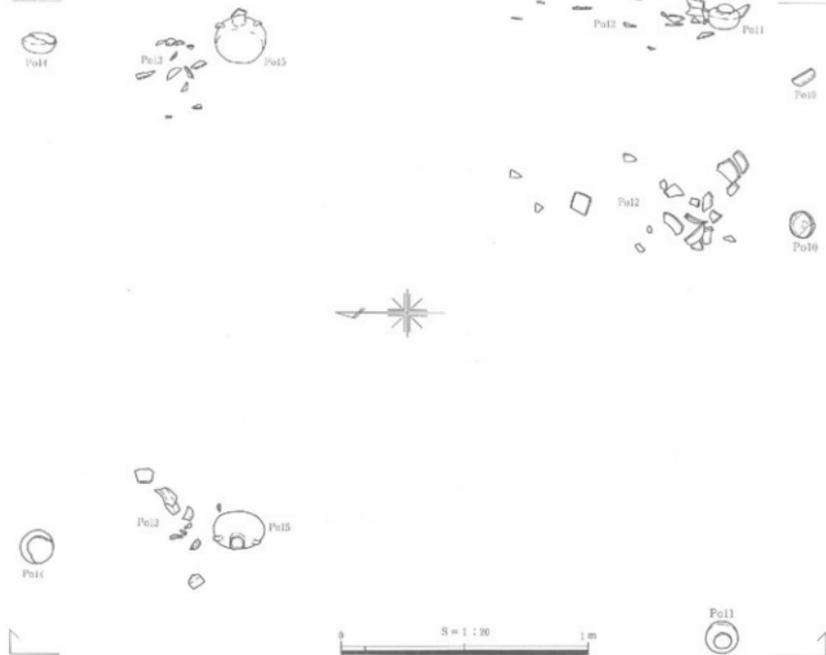
けた坏蓋Po8と坏身Po9が出土した。Po6・7とPo8・9はそれぞれセット関係にあり両者の時期は一致し、第1主体出土の坏類より大型化する。田辺編年のTK10形式に併行し、大谷編年のA3a型にあたる。

後円部中央付近の表土直下から須恵器の有蓋短頸壺・提瓶・壺が出土した。第1・第2主体の推定範囲にはほぼ重なる位置から出土したことから、それぞれの主体部に伴う遺物と推測される。第1主体に伴うと考えられるのは、有蓋短頸壺Po10・11、壺Po12である。短頸壺Po11は第1主体と第2主体が切り合う境界付近から出土したが、対応する蓋の出土から第1主体に伴うと判断した。第2主体に伴うと考えられるのは、有蓋短頸壺Po13・14、提瓶Po15である。Po14の出土位置は第2主体の推定範囲外となることから、第2主体の範囲は西側に拡がる可能性もある。

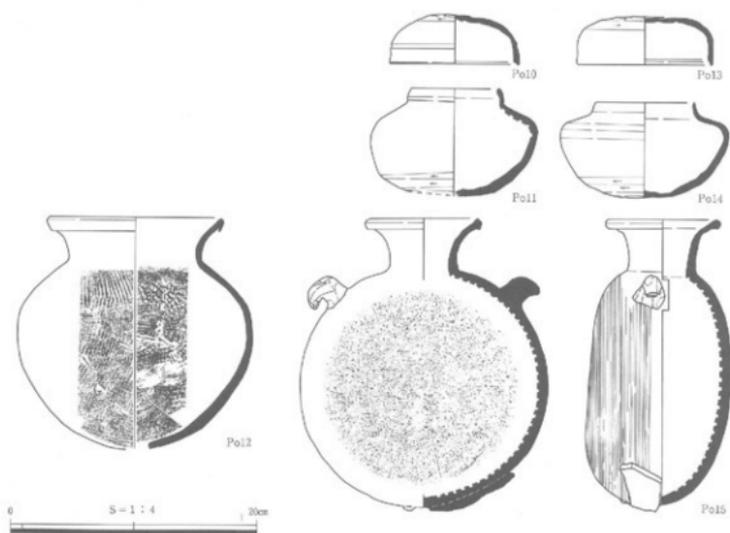


挿図107 第2主体出土遺物実測図

縦5m



挿図108 後円部遺物出土状況図



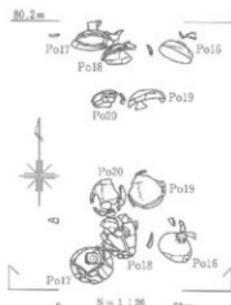
挿図109 後円部出土遺物実測図

前方部中央付近の表土直下から口縁部を下に向けた土師器高坏Po16~18、同じく口縁部を下にした須恵器坏蓋Po19と坏身Po20が出土した。Po19・20は第1主体出土の蓋坏と第2主体出土蓋坏の中間的な形態を呈しており、田辺編年のTK10形式古相に併行し、大谷編年のA2b型に相当する。これらの遺物の出土と盛土もくびれ部付近とは色調が変化するため主体部の存在も考えたが、盛土の堆積状態に連続性が認められることから主体部は存在しないと判断した。しかし、土器がまとまって埋納されていることから、何らかの祭祀行為が行われた可能性は強い。

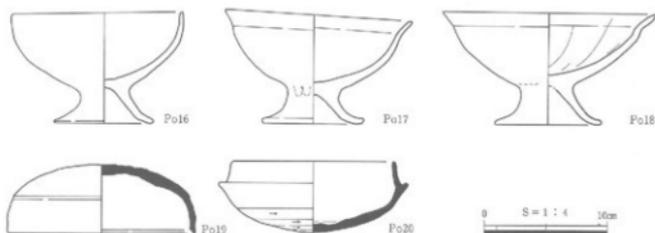
参考文献

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

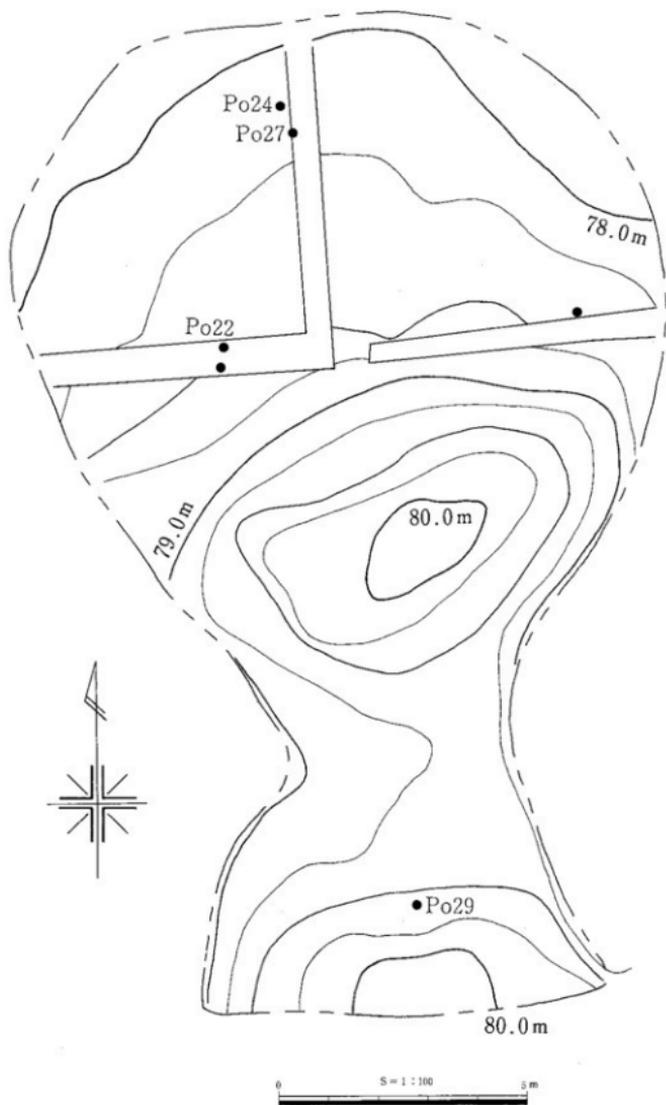
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11 1994



挿図110 前方部遺物出土状況図



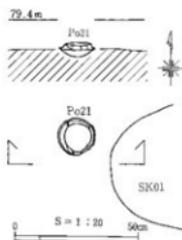
挿図111 前方部出土遺物実測図



挿図112 墳丘除去後測量図

古墳調査が終了した後に墳丘を除去して墳丘の下を調査した。検出できた遺構はくびれ部分で検出された後述するSK-01のみであるが、SK-01の西脇から須恵器坏身Po21が完形で出土した。Po21は第1主体から出土した坏類と同時期に当たるものであり、古墳築造直前に置かれたと推測される。

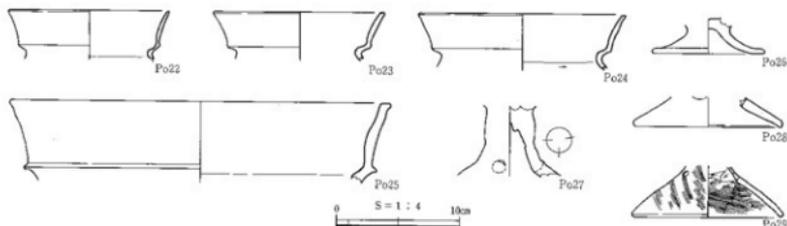
後円部部分の南側は小山状に地山が残っていたが、他は人為的に造成されたと推測される平坦面となっていた。この面からPo22~28などの弥生時代終末~古墳時代初期の土器片が出土したことから古墳築造に直接伴うものではないと判断した。しかし、部分的にはあるが炭片が検出されており、その性格が注目される。



挿図113 くびれ部墳丘下
遺物出土状況図



挿図114 くびれ部墳丘下
出土遺物実測図



挿図115 墳丘下出土遺物実測図

第2節 土坑・土壌墓

SK-01 (挿図116 図版20)

位置 C-2グリッド南東隅、法城古墳くびれ部の墳丘下で検出した。標高79.5m付近に位置する。

形態 平面形は検出面が楕円形、底面は長方形を呈する。両短側部は段を持つ。規模(長軸×短軸)は、検出面(146×63)cm、底面(94×22)cm、底部までの残存最大深は68cmを測る。埋土は2層以上に分かれる。本遺構の位置は、法城古墳後円部の円形企画ラインにはほぼ合うことから区画溝的な性格が推測される。

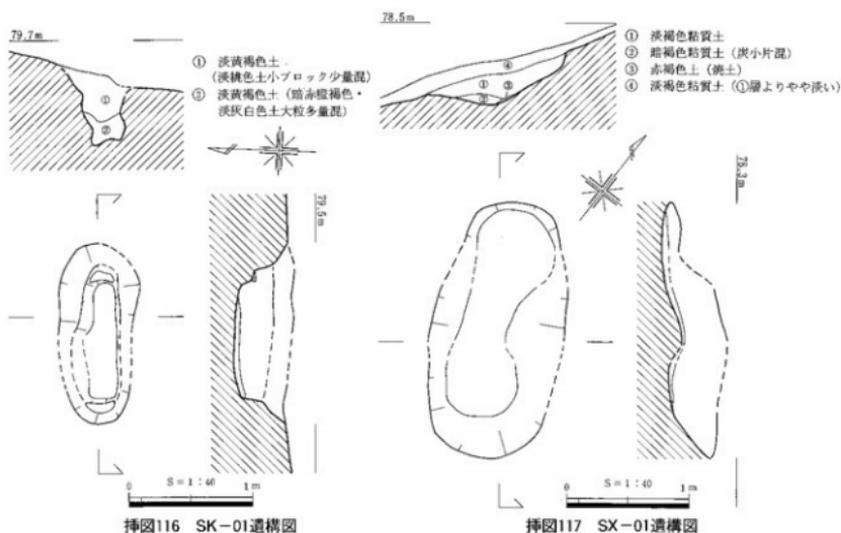
出土遺物 土坑に伴う明確な遺物の出土はないが、西側約10cmの地山直上から須恵器坏身Po21が出土した。土坑との関連を認めるならば、古墳築造直前の6世紀中葉の時期が推測される。

SX-01 (挿図117 図版20)

位置 C-2グリッド中央部の標高78.2m付近に位置する。遺構は法城古墳の後円部南西側の周溝埋土を掘り込んでいる。

形態 平面形は検出面が楕円形、底面は不定形を呈する。規模(長軸×短軸)は、検出面(210×108)cm、底面(170×38)cm、底部までの残存最大深は52cmを測る。古墳の周溝掘り下げ途中に気付いた遺構のため遺存状態は良くない。埋土は3層以上に分かれ、③層は焼土層である。

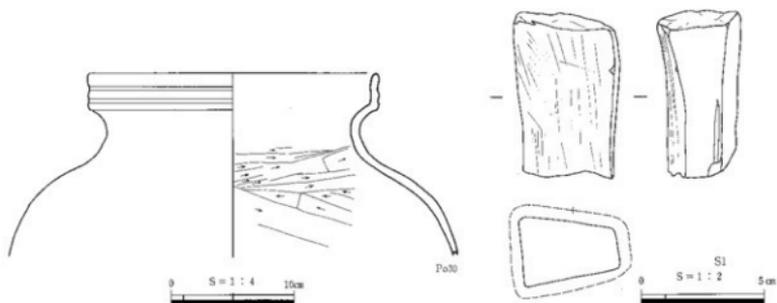
出土遺物 遺物の出土はない。時期も不明である。



第3節 遺構外の遺物

遺構外出土遺物 (挿図118 図版22)

本調査地では、遺構外から出土した遺物はわずかであった。このうち、S1は法城古墳の前方部墳丘上から出土したものであるが、表土層の上面から検出したため古墳に伴うものではないと判断し、この項で報告する。なお、詳細は挿表33・36の遺物観察表に譲る。



挿図118 遺構外出土遺物実測図

挿表34 土坑・土墳墓一覽表

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸×短軸)cm 掘出面	深さ cm	長軸方向	遺物	時期	備考
SK-01	116	20	C-2	楕円形	146×63	94×22	68 N-88°-E		6世紀中葉?	
SX-01	117	20	C-2	楕円形	210×108	170×38	52 N-23°-W			

挿表35 土器観察表

※復元値 △残存値

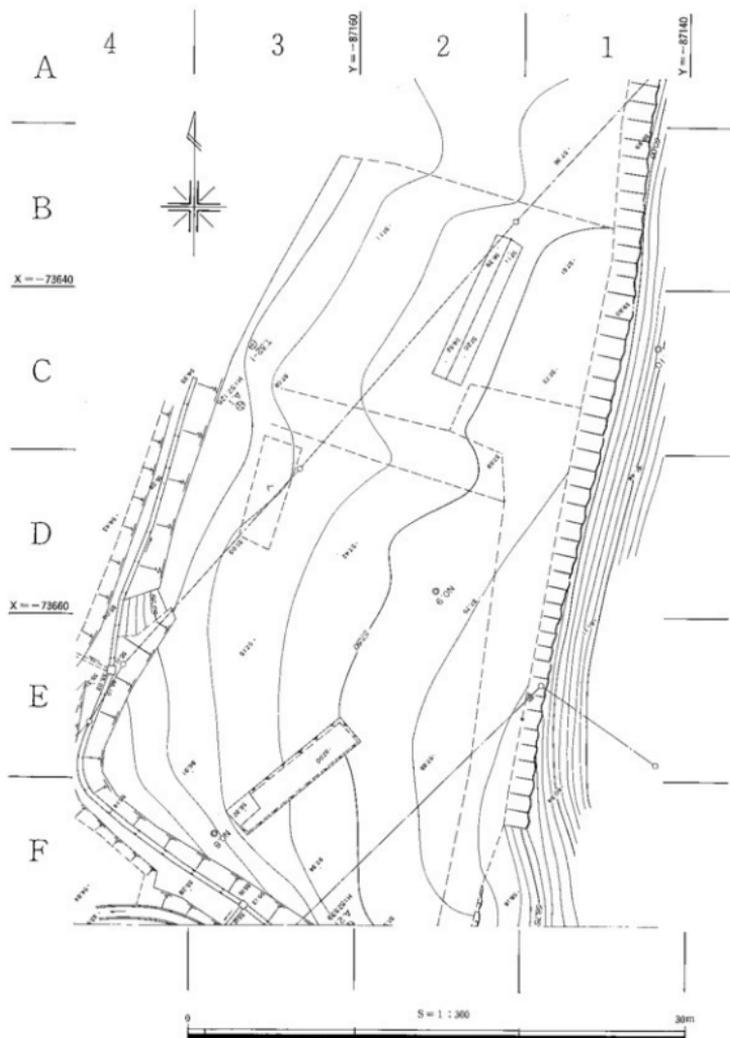
遺物番号 挿図番号 図版番号	発掘 層級	数量 (cm)	形態上の特徴	器 身 内 面	装 土 成	色調 内 面 外 面	備 考	
Po 1 106 21	Ⅱ	① 14.5	口縁端内面に化粧を入れ段状にする。洗 刷とナデにより線を表現。	天井部回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-5	
		② 4.7						
Po 2 106 106 21	Ⅱ	① 13.2	口縁端内面に化粧を入れ段状にする。洗 刷とナデにより線を表現。	天井部回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密 良好	淡灰褐色 淡灰褐色	類-5	
		② 5.1						
Po 3 106 21	Ⅱ	① 11.8	立ち上がりは短く、直立気味で、端部内面に 化粧を入れ段状にする。	底部ヘラ切り機 組ヘラで消し 位まで回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-4	
		② 5.8						
Po 4 106 21	Ⅱ	① 11.1	立ち上がりは短く直立気味で、端部内面に 強くナデで段を表現。	底部ヘラ切り機 組ヘラで消し 位まで回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	西川-1	
		② 5.3						
Po 5 106 21	Ⅱ	① 8.8	口縁部は短く、外反する。	長軸方向の上 具ナデ 他は回転ナデ	密 やや不良	灰白色 灰白色	類-8	
		② 7.9						
Po 6 107 107 21	Ⅱ	① 15.3	口縁部を肥厚させ内面に化粧を入れ段状 にする。化粧により線を表現。	頂部ヘラ切り機 組 天井部回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-12	
		② 4.9						
Po 7 107 21	Ⅱ	① 13.3	立ち上がりは短く、内傾する。端部内面に 化粧を入れ段を表現。	底部切り機し 組ナデ新し機 中位まで回転ヘ ラケズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-13	
		② 5.2						
Po 8 107 21	Ⅱ	① 14.5	口縁端内面を強くナデで段状にする。洗 刷により線を表現。	天井部回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-1	
		② 4.7						
Po 9 107 21	Ⅱ	① 12.9	立ち上がりは短く、内傾する。端部内面を やや強くナデで段を表現。	天井部回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-3 内底面に 当て黒灰	
		② 4.1						
Po 10 109 109 22	Ⅱ	① 16.4	口縁部端部を強くナデで段を表現。化粧 により線を表現。	天井部回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰白色 青灰色	類-6	
		② 4.1						
Po 11 109 22	Ⅱ	① 7.1	口縁部端部は丸く内傾する。肩線が強く、 器身が歪む。	底面回転ヘラケ ズリ 他は回転ナデ	同軸ナデ	灰褐色 灰褐色	類-7	
		② △ 8.8						
Po 12 109 22	Ⅱ	① 13.5	口縁部端部は下方に拡張される。肩線は器身 に直い。	タタキ後回転ナ デ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-6 類-6	
		② △ 19.5						
Po 13 109 22	Ⅱ	① 10.8	口縁部端部内面に化粧とナデで段を表現する。	天井部回転ヘラ ケズリ 他は回転ナデ	密、1~3mmの石英を 多く含む 良好	灰褐色 灰褐色	類-9	
		② 3.9						
Po 14 109 22	Ⅱ	① 7.9	口縁部端部は尖り、直立気味になる。肩線が 強く、器身が歪む。	天井部回転ヘラケ ズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-10	
		② 7.9						
Po 15 109 22	Ⅱ	① 8.7	口縁部端部は肥厚し外面に若干の面を有する。 肥厚は半円状、肩線の背面は扁平で、口縁 部に反し斜めになる。	口縁部回転ナデ 新製内面ナデ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-25	
		② 23.6						
Po 16 111 22	Ⅱ	① 13.7	杯部は内筒し、杯部は丸い。肩線は「ハ」 の字状に開く。	ナデ状だが調整 不明	杯部底面ナデ状 他はナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-25
		② 9.2						
Po 17 111 22	Ⅱ	① 14.9	杯部は内筒するが端部近くで外方に傾く。 肩線は「ハ」の字状に開く。	杯部底面ナデ状 調整不明	ナデ	密 良好	淡緑色 淡緑色	類-26
		② 9.4						
Po 18 111 22	Ⅱ	① △ 8.0	杯部は内筒するが端部近くで外方に傾く。 肩線は「ハ」の字状に開く。	杯部底面ナデ状 調整不明	ナデ	密 良好	淡褐色 淡褐色	類-27
		② △ 8.6						
Po 19 111 22	Ⅱ	① 15.0	口縁部端部内面を強くナデで段状にする。洗 刷とナデにより線を表現。	天井部調整不明 口縁部回転ナデ	密 不良	淡灰白色 淡灰白色	類-14	
		② 5.6						
Po 20 111 22	Ⅱ	① 12.9	立ち上がりは短く、直立気味。端部内面に 化粧はない。	底面回転ヘラケ ズリ 他は回転ナデ	密 不良	淡灰白色 淡灰白色	類-15	
		② 5.9						
Po 21 115 22	Ⅱ	① 11.3	立ち上がりは短く、やや内傾する。端部内 面に化粧はない。	底部回転ヘラケ ズリ 他は回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	類-11	
		② 5.3						

遺物番号 採取番号 図版番号	種類 形態	長さ (cm)	形態上の特徴	調 整 外面 内面		軸 土 灰 色 質	色調 外面 内面	備 考
Pa22 115 22	赤生土器 壺	① 径 13.0 ② △ 4.0	外反する複合口縁。口縁端部は丸い。	調整不明	調整不明	赤 良	淡黄褐色 淡黄褐色	図-18
Pa23 115 22	赤生土器 壺	① 径 13.8 ② △ 4.0	外反する複合口縁。口縁端部は丸い。	調整不明	調整不明	赤 良	淡黄褐色 淡黄褐色	図-19
Pa24 115 22	赤生土器 壺	① 径 14.6 ② △ 4.5	外反する複合口縁。口縁端部は丸い。	調整不明	口縁部ヨコナデ 底部ヘラナズリ	赤 良	淡黄褐色 淡黄褐色	図-17
Pa25 115 22	土師器 壺	① 径 30.8 ② △ 6.6	外反する複合口縁。口縁端部は平坦な美文 なす。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤 良好	淡褐色 橙褐色	図-16
Pa26 115 22	土師器 低脚杯	② △ 2.9 ③ 8.8	「ハ」の字状に開く頸部。	ヨコナデ	杯部ナデ 脚部調整不明 他はヨコナデ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	図-21
Pa27 115 22	土師器 高杯	② △ 5.8	「ハ」の字状に開き始める頸部。杯定で4 方向の円形通し。内面頂部に工具による刻 痕。	調整不明	ヘラナズリ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	図-22
Pa28 115 22	土師器 高杯	② △ 2.4 ③ 径 11.6	直線的に開く頸部。円形通しの通し。	ナデ	ナデ	赤 良好	淡褐色 淡褐色	図-23
Pa29 115 22	土師器 高杯	② △ 4.2 ③ 径 11.8	内面寛縁に開く頸部。円形通しの通し。	ナデ・ナメハ エ	調整ヘラナズリ 脚部縁かい単位 のナメハエ	赤 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	図-24
Pa30 118 22	赤生土器 壺	① 径 23.2 ② △ 14.9	ほぼ直立する複合口縁。口縁端部は丸い。 外面に凹縁を施す。	口縁部ナデ 他は調整不明	口縁部ナデ 底部以下ヘラナ ズリ	赤 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	図-20

挿表36 石製品観察表

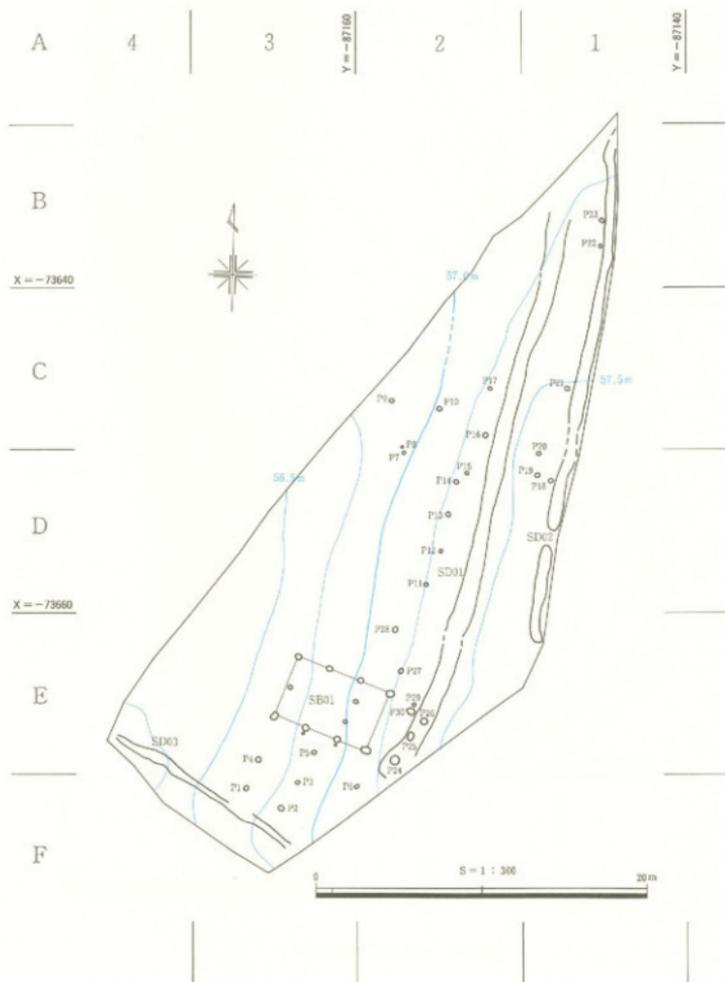
遺物番号	挿表番号	図版番号	取上番号	出土位置	種類	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重	備 考
S 1	118	22	25	前方部上	砥石	花園岩質アブライト	6.8	4.2	3.4	130 g	図-1

第10章 御内谷ガシン畑遺跡の調査



押図119 調査前地形測量図

御内谷ガシソ畑遺跡は、南東側山塊から派生する支丘陵根部の裾部に立地する。本遺跡の北東、同一尾根の頂部には御内谷法城遺跡（法城古墳）が位置する。調査前は耕作土を浅く盛り、畑地として利用されていた。重機による表土剥ぎを行前調査地の東西境に沿ってトレンチを入れたところ、遺構面が2つあることを確認した。調査地の基本層序は、上から耕作土→明褐色粘質土→黒灰色粘質土→黄灰色～茶褐色砂質土（地山）となっており、地山が西に向けて下っていくため、耕作土を除けば各層とも西側ほど堆積が厚くなっている。ただ、調査地の尾根裾沿いには明褐色粘質土の堆積は見られなかった。遺構は黒灰色土・黄灰色～茶褐色砂質土（地山）上面で検出され、前者を第1の遺構面（第1面）、後者を第2の遺構面（第2面）とした。以下調査の結果を述べる。



挿図120 第1面全体遺構面

第1面の調査

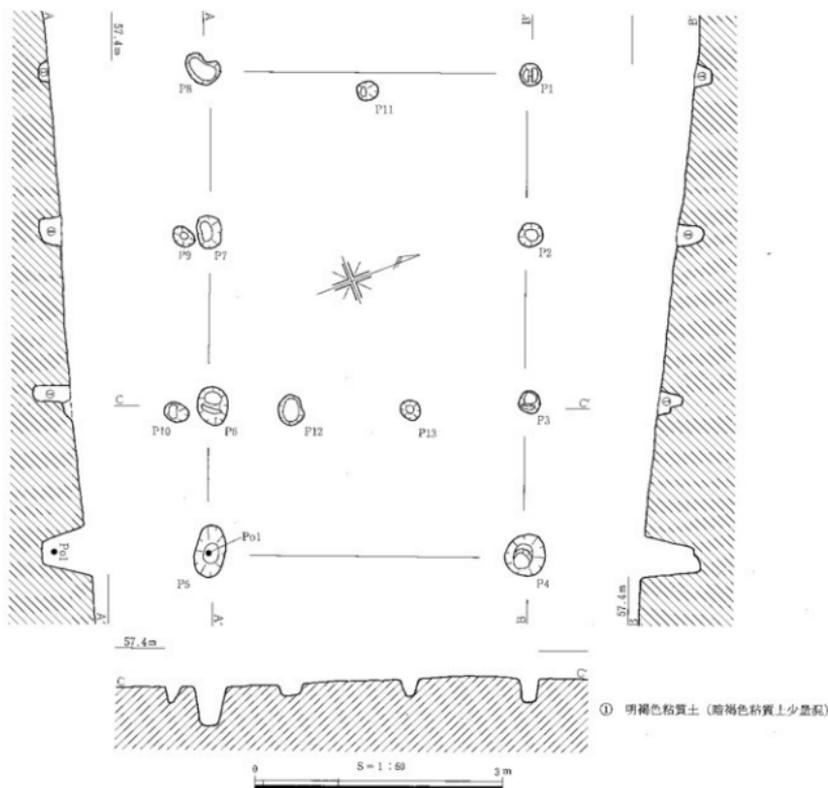
第1面では掘立柱建物跡1、溝状遺構3、ピットを検出した。遺構の埋土は基本的に明褐色粘質土であるが、SD-01から尾根裾にかけてはその堆積が見られず、SD-01・02の埋土は他と異なる。

第1節 掘立柱建物跡

SB-01 (挿図121・122 図版23・25)

位置 調査地の南寄り、E-3グリッドの南東部を中心とし、標高56.6~57.2mに位置する。本遺構の南西約7mにSD-03、東側約2mにSD-01が位置する。埋土はすべて暗茶褐色粘質土混じりの明褐色粘質土である。

形態 桁行3間6.0m、梁行1間3.8mの掘立柱建物跡である。柱穴は13個で、それぞれの規模(長軸×短軸×深さ)は、P1(27×26-20)cm、P2(30×28-33)cm、P3(30×26-29)cm、P4(57×48-71)cm、P5



挿図121 SB-01遺構図

(63×36-60) cm, P 6 (50×38-45) cm, P 7 (41×29-29) cm, P 8 (44×27-14) cm, P 9 (29×21-17) cm, P 10 (30×24-21) cm, P 11 (27×24-17) cm, P 12 (38×28-16) cm, P 13 (26×24-21) cmを測る。主柱穴はP 1～P 8である。柱穴間距離はP 1-P 2から順にP 8-P 1まで2.0m・2.0m・2.1m・3.8m・1.9m・2.1m・2.0mである。

P 9・P 10は、地形が西に向かって低くなっていくことからP 6・P 7の補助的な柱穴であったとは考えられず、簡的なものの柱穴か。P 7-P 9・P 6-P 10の柱穴間距離はそれぞれ0.3m・0.5mである。P 11はP 1とP 8のほぼ中間に位置することから、西側の両主柱穴を補助するため、P 12・P 13は間仕切りのための柱穴と推測する。

主軸はN-67° -Wである。

遺物 土師器甕の口縁P o 1がP 5の底面から約15cm浮いたところで出土した。

時期 上方に堆積した明褐色粘質土中から出土した遺物には瓦質土器・陶磁器が含まれず、土師器・須恵器が中心であることから、奈良～平安期の建物跡で中世段階までは下らないと推測する。



挿図122 SB-01出土遺物実測図

第2節 溝状遺構

SD-01 (挿図123 図版23)

位置 B-1・C-1・C-2～F-2グリッドにまたがり、標高57.3m～57.4mに位置する。遺構は尾根の裾に対してほぼ平行するようなかたちで調査地外へと伸びる。本遺構の東側約3mには主軸が多少ふれるもののSD-02が、西側には本遺構に近接するようにピット群が位置する。埋土はすべて単層で、砂礫が多量に混じる暗茶褐色粘質土である。

形態 遺構南側は調査地外へ続いており本来の規模は不明である。また遺構の北側は浅くなり終わっているが、調査地外へ伸びていたと思われる。検出規模は、全長約36m、幅0.75m～2.25mを測り、深さは最大でも0.11mと非常に浅い。遺構の走向はN-14° -Eである。

遺物 埋土中より須恵器片が出土したが、図化できなかった。

時期 SD-01はP25・26を切っており、ピットの埋土はSB-01同様明褐色粘質土を基本とするためこれらよりも新しい。

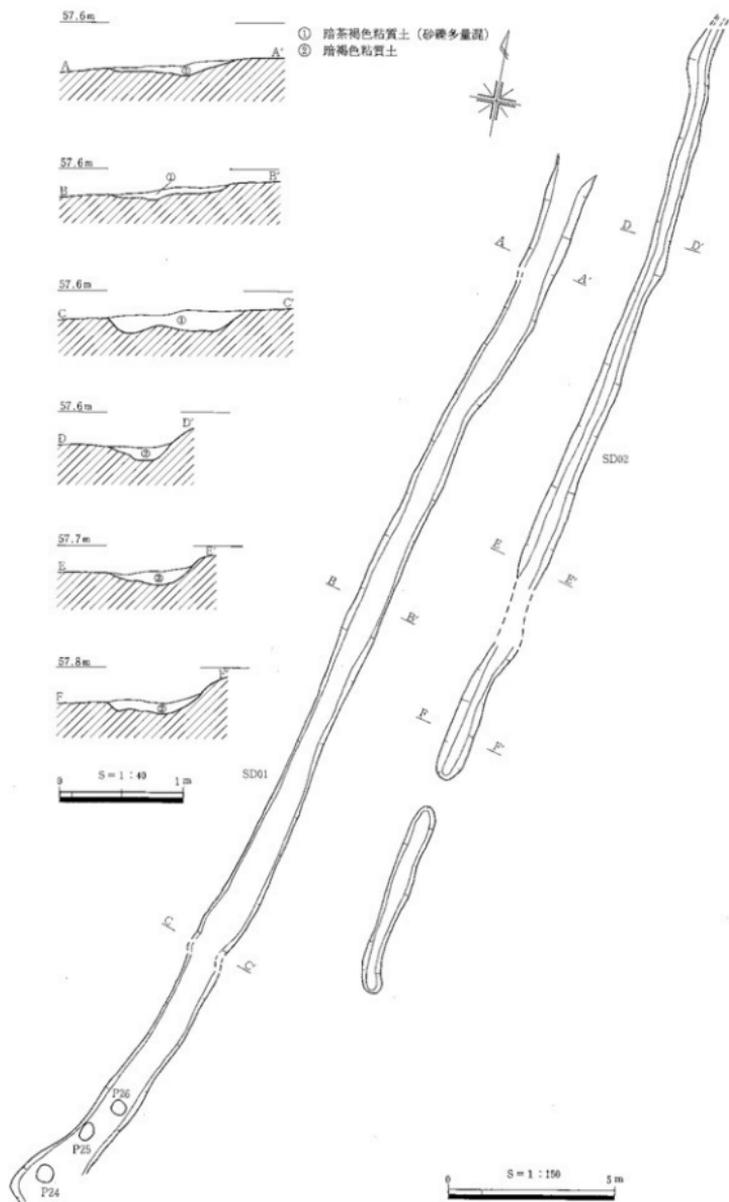
SD-02 (挿図123 図版23)

位置 B 1～E 1グリッドにまたがり、標高57.3m～57.5mに位置する。表土から20cm前後下で検出した。遺構はSD-01にはほぼ平行し、尾根の裾に沿って調査地外へと伸びる。埋土はすべて単層で、暗褐色粘質土である。

形態 遺構北側は調査地外へ続いており本来の規模は不明であるが、検出規模は全長31.3m、幅0.53m～0.90m、深さは最大で0.28mを測る。遺構の走向はN-7° -Eである。

遺物 埋土中より須恵器片・磁器片が出土したが、図化できなかった。

時期 出土した磁器片から近世後半以降と思われる。



挿圖123 SD-01・02遺構図

SD-03 (挿図124 図版23)

位置 E・F-3・4グリッドで検出し、標高55.8m~56.9mに位置する。遺構は調査地をほぼ横断するように伸び、西に向けて下る。本遺構の北側約6mにSB-01が位置する。埋土は6層に分層出来たが場所によって様相が異なり、自然堆積とは考えられない。

形態 遺構東側は調査地外へ続いており本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長12.5m、幅0.30~0.75m、深さは最大で0.39mを測る。遺構の走向はN-58°-Wである。

遺物 埋土中より鉄滓が出土した。

時期・性格 時期決定できる遺物が出土しておらず、性格も不明である。

第3節 ピット

第1面からは総計30個のピットを検出した。ピットは主にSB-01周辺及びSD-01西側に集中している。それぞれ遺構に伴うものなのかは不明である。ただP25~P27については規模が大きく深さもあるため、調査地外へと続く別の独立柱建物跡である可能性もある。これらを除けば規模は比較的小さいものが多く、径20~30cm、深さ10~20cmのものが大半を占める。埋土は単層あるいは2層で、明褐色粘質土・暗茶褐色粘質土である。柱根をもつものはなかった。幾つかのピットから遺物が出土したが、土師器・須恵器の小片、鉄滓で図化できるものは無かった。すべて埋土上位~中位からの出土である。なお、詳細は挿表41のピット一覧表を参照していただきたい。

第4節 遺構外の遺物

遺構外出土遺物 (挿図125 図版25)

個々の遺物の詳細は挿表42の土器観察表に譲り、ここでは概略について述べる。

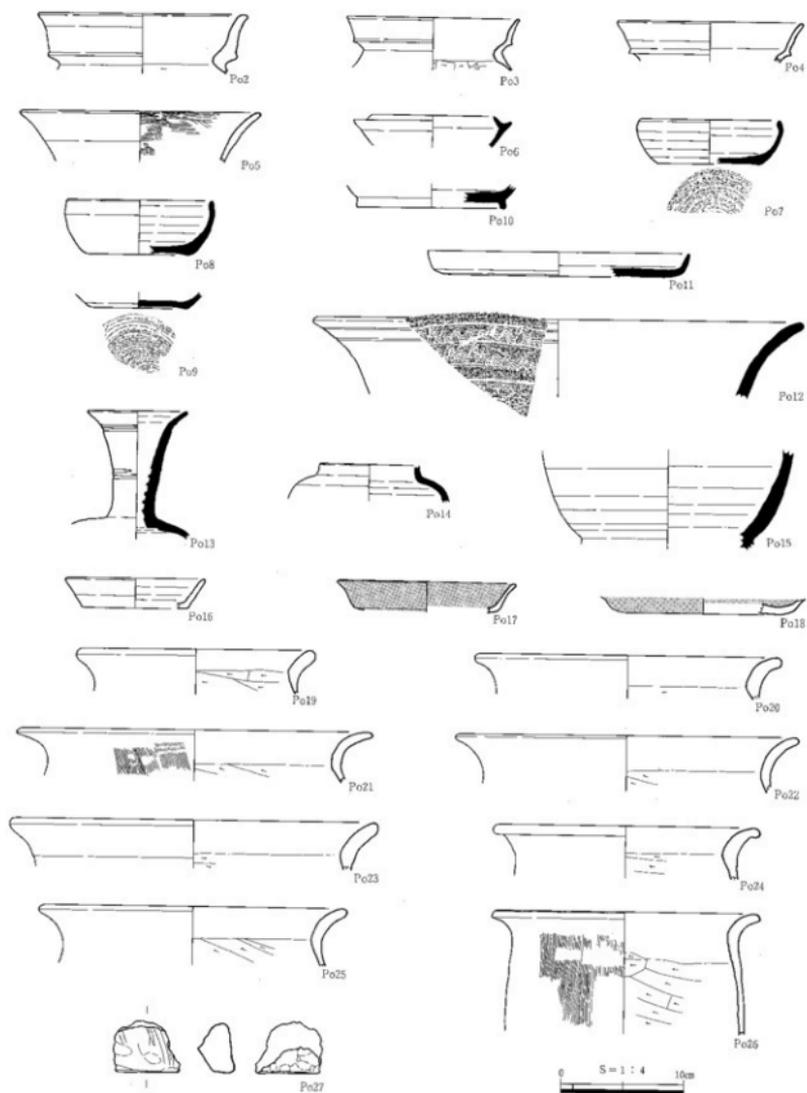
出土遺物の量は多くなく、大部分が律令期を中心とする土師器・須恵器である。

P02~4は複合口縁を呈する甕の口縁部である。P02はP03・4に比べ厚手で、口縁下部は外方へ突出するがややあまい。P05は波形器台の受部で、内面には細かいヘラミガキが認められる。

P06~15は須恵器である。P06は坏身で、立ち上がりは内傾する。P07~10は坏で、P07~9の底部には糸切り痕が認められ、P010は底部に高台が付く。P011は皿である。P012は甕の口縁部で沈線の下に波状文が入る。P013は長頸甕で口縁部・頸部ともに2次の沈



挿図124 SD-03遺構図



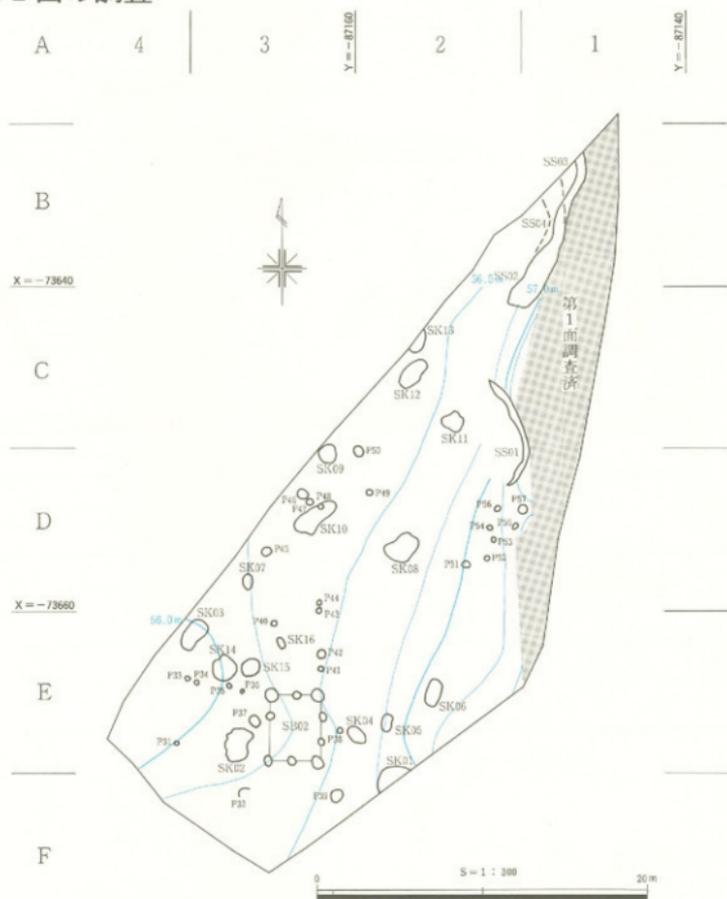
挿図125 遺構外出土遺物実測図

線を施す。頸部の沈線はあまく、一周するがつながらない。P o 14は短頸壺で、口縁はほぼ直立する。P o 15は壺の胴部で、底部には高台が付く。

P o 16~26は土師器である。P o 16~18は土師器の皿で、P o 17・18は内外面ともに丹塗りされる。P o 19~26は、いずれも外反する単純な口縁をもつ甕である。外面調整は粗いタテハケ、内面調整はヘラケズリである。P o 26は長胴型の胴部をもつ。

P o 27は支脚の脚部で、外面に工具痕のようなものが見られる。

第2面の調査



挿図126 第2面全体遺構図

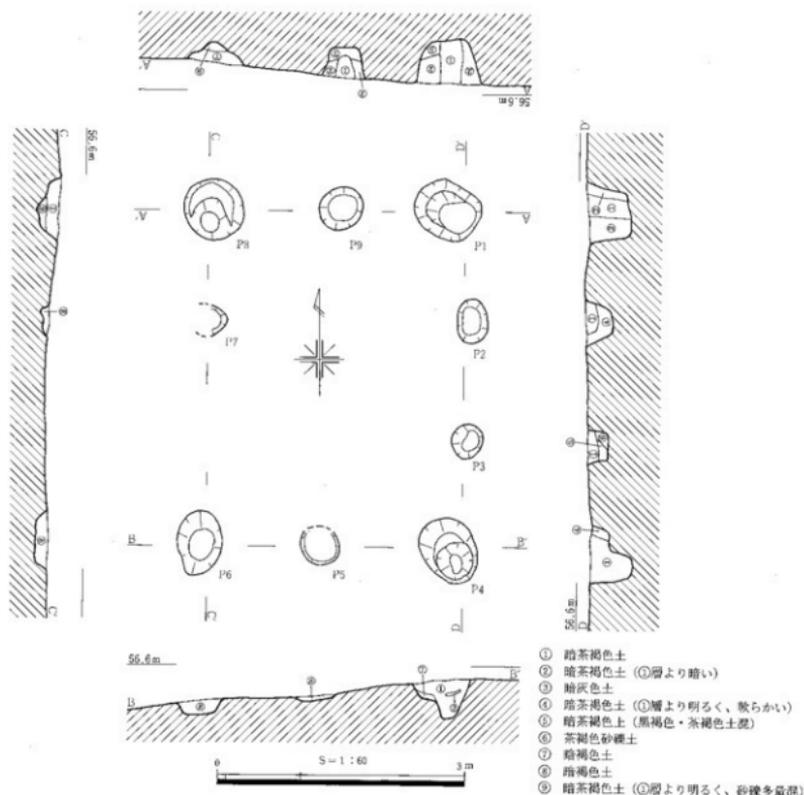
第1面の遺構群を形成していた黒灰色土を除去し、黄灰色～茶褐色砂質土の上面で遺構を検出した。検出できた遺構は、掘立柱建物跡1、土坑16、段状遺構4、ピットである。遺物はSK-06・07で出土しただけで、他の遺構では見られなかった。また、SK-06・07の遺物も埋土の中間～上位で出土し小片であることから、遺構の時期を直接表すものではなからう。第2面の遺構の時期は、SB-01よりも古いとしか言えない。第2遺構面を覆っていた黒灰色土中から出土した遺物はわずかで、弥生時代後期後葉の土器を中心とし、鉄滓も数点出土した。以下、第1面同様に各遺構について調査の結果を述べる。

第5節 掘立柱建物跡

SB-02 (挿図127 図版24)

位置 E-3グリッドの南東部を中心とし、標高56.1m～56.5mに位置する。本遺構の西側約1.4mにはSK-02が、東側約2mにはSK-04がある。埋土は9層に分層でき、P1・P9で柱痕跡を示す層が存在した。

形態 桁行3間4.1m、梁行2間3.1mの掘立柱建物跡である。柱穴は9個検出できた。それぞれの規模(長軸×短軸・深さ)は、P1(80×68-58)cm、P2(54×38-34)cm、P3(43×40-24)cm、P4(86×65-53)



挿図127 SB-02遺構図

cm、P 5 (52×44-6) cm、P 6 (80×55-18) cm、P 7 (51×38-8) cm、P 8 (77×72-28) cm、P 9 (56×52-37) cmを測るが、P 5・P 7は上部が検出できなかったため、本来は長軸・短軸ともこの計測値よりも大きかった可能性が高い。柱穴間距離は、P 1-P 2から順にP 9-P 1まで1.4m・1.5m・1.3m・1.7m・1.4m・2.8m・1.4m・1.6m・1.3mである。

検出できた柱穴は9個であるが、本来はP 6とP 7の間に柱穴が存在していた可能性が高く、3間×2間の建物であったと思われる。

主軸はほぼ真北である。

時期 遺物を伴わないため時期決定は困難だが、遺構面の上方に堆積した黒灰色土より奈良～平安期を下る遺物が出土していないことから、少なくともそれ以前に形成・埋没した建物跡である。

第6節 土坑

SK-01 (挿図128)

位置 E-2・F-2グリッドの境を中心とし、標高56.7m～56.9mに位置する。本遺構の北側約3mにSK-05がある。埋土は6層に分層でき、黒色系の埋土を基本とする。

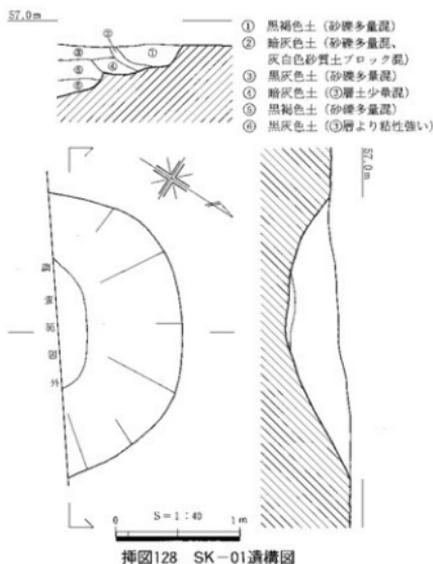
形態 本遺構の南東部分は調査地外にかかるため本来の形態は不明であるが、検出できた範囲での平面形は検出面・底面ともに不整な半楕円形を呈し、断面形は長軸方向で緩やかな台形状である。規模は、検出面では長軸2.35m×短軸1.10m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.43mを測る。

時期・性格 遺構の詳しい時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。

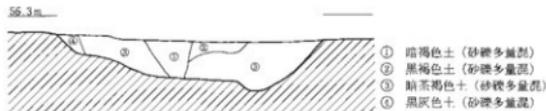
SK-02 (挿図129 図版24)

位置 E-3グリッド南西端を中心とし、標高56.0m付近に位置する。本遺構の東側約1.4mにSB-02が、北側約3mにSK-14・15がある。埋土は4層に分層でき、黒色系の埋土を基本とする。

形態 平面形は、検出面はいびつな楕円形、底面は2段状になった不定形を呈し、断面形は皿状である。規模は検出面で長軸2.18m×短軸1.24m、1段目の底面で長軸0.64m×短軸0.60m、底面で長軸0.42m×短軸0.15m、底面までの最大の深さは0.42m



挿図128 SK-01遺構図



挿図129 SK-02遺構図

を測る。

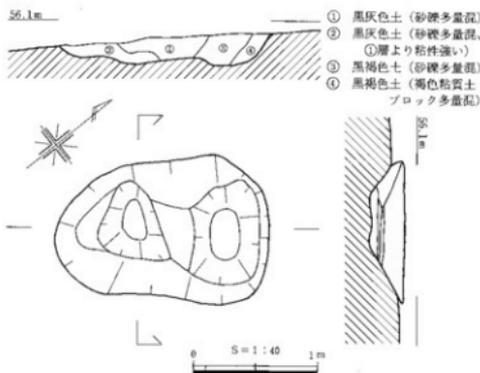
時期・性格 遺構の詳しい時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。

SK-03 (挿図130)

位置 E-3・4グリッド境を中心とし、標高56.0m付近に位置する。本遺構の北東約3mにはSK-07が、南東約2mにはSK-14・15が位置する。埋土は4層に分層でき、黒色系の埋土を基本とする。

形態 平面形は、検出面は不整な隅丸長方形、底面は2つに別れる不整形を呈し、断面形はW字に近い皿状となる。規模は検出面で長軸1.75m×短軸1.11m、2つに別れた底面は、北側から長軸0.42m×短軸0.24m・長軸0.34m×短軸0.19m、底面までの最大深さは0.27mを測る。

時期・性格 遺構の詳しい時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



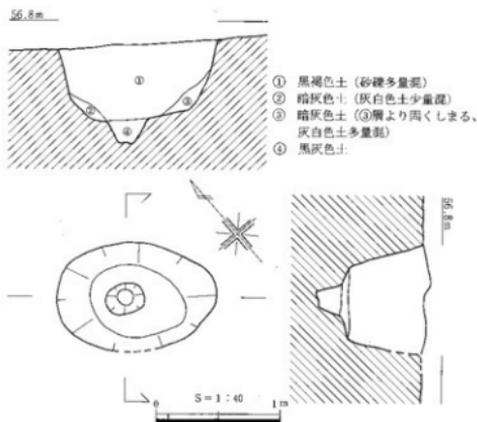
挿図130 SK-03遺構図

SK-04 (挿図131 図版24)

位置 E-2・3グリッド境を中心とし、標高56.7m付近に位置する。本遺構は東から南西に向けて下っていく地形に対し、主軸が直交する。西側約2mにはSB-02が、東側約1mにはSK-05が位置する。埋土は4層に分層し、黒色系の埋土を基本とする。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な楕円形を呈し、断面形は長方形状である。規模は検出面で長軸1.30m×短軸0.90m、底面で長軸0.80m×0.58m、底面までの最大の深さは0.72mを測る。底面の中央やや北西寄りからピットを検出した。平面形は楕円形を呈し、その規模は、検出面で長軸0.32m×短軸0.24m、深さ0.22mを測る。

時期・性格 遺物は出土していない。ただ形態・埋土・底面ピットが存在を考慮すれば、いわゆる縄文時代後・晩期頃の「落し



挿図131 SK-04遺構図

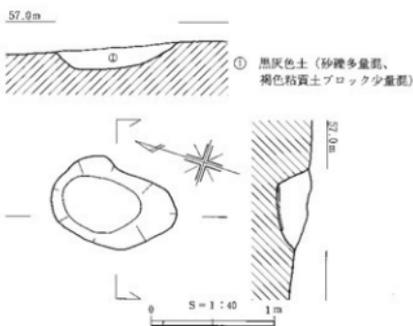
穴」状の遺構であろう。しかし調査地内で検出された同様の遺構はSK-04とSK-09の2つだけで、他の「落し穴」のように意図的に配置されたという印象は受けない。

SK-05 (挿図132)

位置 E-2グリッド南西側にあり、標高56.7m~56.9mに位置する。本遺構の西側約1mにはSK-04が、北東側約2mにはSK-06がある。埋土は黒灰色土の単層である。

形態 平面形は、検出面はいびつな隅丸長方形、底面は不整な楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は検出面で長軸1.03m×短軸0.70m、底面で長軸0.64m×短軸0.44m、底面までの深さは最大で0.28mを測る。

時期・性格 遺構の詳しい時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



挿図132 SK-05遺構図

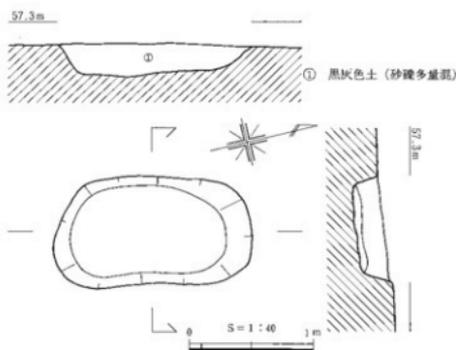
SK-06 (挿図133)

位置 E-2グリッド中央にあり、標高57.1m付近に位置する。本遺構の南西側約2mにはSK-05がある。埋土は黒灰色土の単層である。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な隅丸長方形を呈し、断面形は皿状である。規模は検出面で長軸1.60m×短軸0.88m、底面で長軸1.27m×短軸0.71m、底面までの深さは最大で0.24mを測る。

遺物 検出面付近の埋土中より須恵器片が出したが、図化できなかった。

時期・性格 遺物は混入したものである。遺構の時期は奈良・平安期以前と考える。性格は不明である。



挿図133 SK-06遺構図

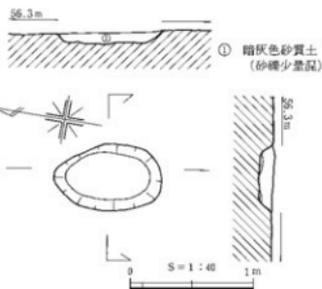
SK-07 (挿図134)

位置 D-3グリッド南西側にあり、標高56.2mに位置する。本遺構の南西側約3mにSK-03が、北東側約4mにSK-10が位置する。埋土は暗灰色砂質土の単層である。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は検出面で長軸0.87m×短軸0.54m、底面で長軸0.68m×短軸0.39m、底面までの深さは最大で0.11mを測る。

遺物 埋土中より土器の小片が出土したが、図化できなかった。土器片は平底であること、薄手で内面調整がヘラケズリであることから、弥生時代終末期の甕の底部と推測する。

時期・性格 遺物は混入したもので、遺構の時期は、奈良・平安期以前と考える。性格は不明である。



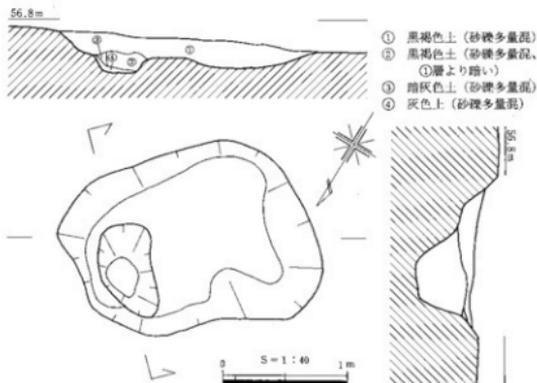
挿図134 SK-07遺構図

SK-08 (挿図135)

位置 D-2グリッド西側にあり、標高56.5m~56.7mに位置する。本遺構の西側約4mにはSK-10がある。埋土は4層に分層でき、黒色系の埋土を基本とする。

形態 平面形は検出面がいびつな隅丸長方形、底面は2段状になった不定形を呈し、断面形は皿状となる。規模は検出面では長軸2.16m×短軸1.42m、1段目の底面で長軸1.40m×短軸1.04m、底面で長軸0.34m×短軸0.26m、底面までの深さは最大0.66mを測る。

時期・性格 遺構の詳細な時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



挿図135 SK-08遺構図

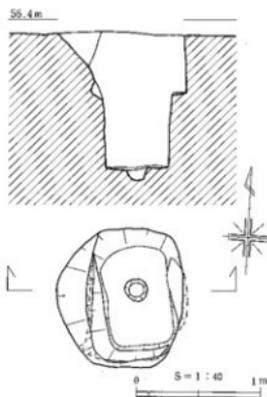
SK-09 (挿図136 図版24)

位置 D-3グリッド北東隅を中心とし、遺構の西側は調査地西壁に接する。標高56.3mに位置し、本遺構の南側約2mにSK-10が、北東側約5mにSK-12がある。埋土は黒色系の土を基本とする。

形態 平面形は検出面・底面ともに隅丸長方形を呈するが、検出面は西側が土坑肩部崩落のためやや不整となる。断面形は、東西両壁で崩落が激しいものはほぼ長方形である。規模は検出面で長軸1.14m×短軸0.78m、底面では長軸0.81m×短軸0.51m、底面までの深さは最大で1.13mを測る。

底面の中央や北寄りからピットを検出した。平面形はほぼ円形で、その規模は検出面で径13cm、深さ8cmを測る。

時期・性格 遺物の出土は認められなかった。ただ形態・埋土・底面ピットの存在等考慮すれば、いわゆる縄文時代後・晩期頃の「落とし穴」状の遺構であろう。



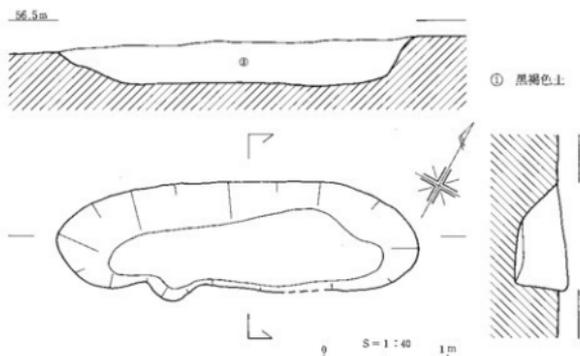
挿図136 SK-09遺構図

SK-10 (挿図137)

位置 D-3グリッド東側にあり、P56に切られる。標高56.2m~56.4mに位置し、本遺構の北側約2mにSK-09が、東側約4mにSK-08がある。埋土は黒褐色土の単層である。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な楕円形を呈し、断面形は長軸方向で皿状、短軸方向で不整な長方形である。規模は検出面で長軸2.93m×短軸0.87m、底面までの深さは最大で0.41mを測る。

時期・性格 遺構の詳細な時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



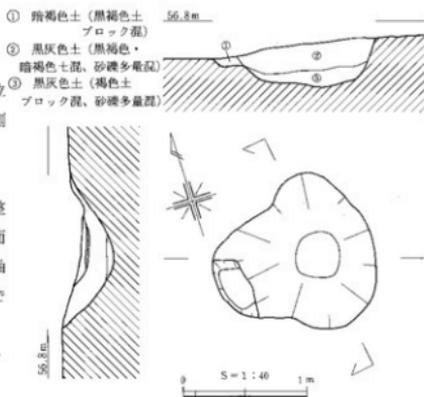
挿図137 SK-10遺構図

SK-11 (挿図138)

位置 C-2グリッド南側、標高56.5m~56.7mに位置する。本遺構の北西側約3mにSK-12が、東側約2mにSS-01がある。埋土は3層に分層でき、黒色系の土を基本とする。

形態 平面形は検出面がいびつな楕円形、底面は不整な円形を呈し、断面形は皿状となる。規模は、検出面では長軸1.31m×短軸1.30mと差がない。底面も長軸0.40m×短軸0.38mである。底面までの深さは最大で0.40mを測る。

時期・性格 遺構の詳細な時期は分らないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



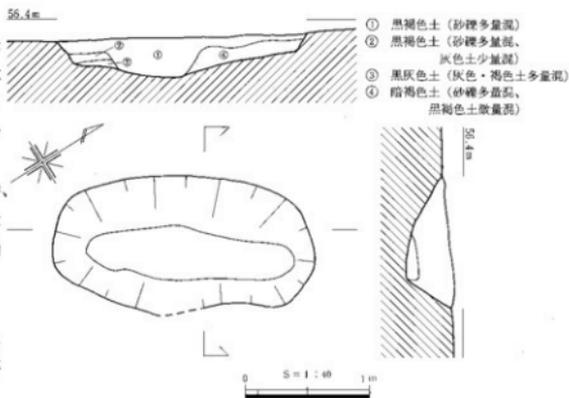
挿図138 SK-11遺構図

SK-12 (挿図139)

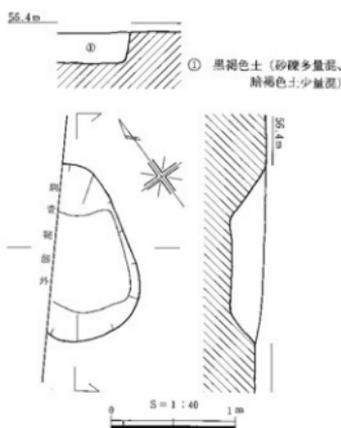
位置 調査地の西端、C-2グリッド中央西寄りの標高56.2m付近に位置する。本遺構の北側約0.5mにSK-13、南東側約3mにSK-11がある。埋土は4層に分層でき、黒色系の土を基本とする。

形態 平面形は検出面が不整な隅丸長方形、底面が不整な楕円形を呈し、断面形は皿状となる。規模は検出面で長軸2.14m×短軸1.14m、底面で長軸1.69m×短軸0.44m、底面までの深さは最大0.39mを測る。

時期・性格 遺構の詳細な時期は分らないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



挿図139 SK-12遺構図



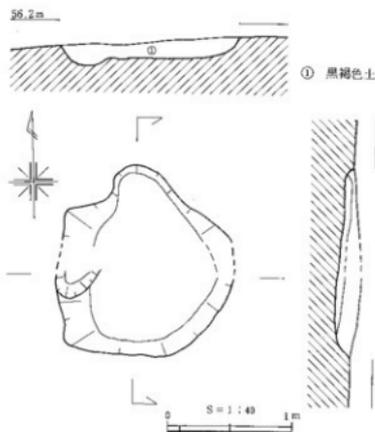
挿図140 SK-13遺構図

SK-13 (挿図140)

位置 調査地の西端、C-2グリッド中央西寄りの標高56.3m付近に位置する。本遺構の南側約1mにはSK-12が、北東側約6mにSS-02~04がある。埋土は黒褐色土の単層である。

形態 遺構の西側が調査地境にかかるため全体の形状は明らかでないが、平面形は検出面が不整な楕円形、底面が不整形を呈すると思われる。断面形は長軸方向が皿状となる。規模は検出面で長軸1.46m×残存部の短軸0.62m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.29mを測る。

時期・性格 遺構の詳細な時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



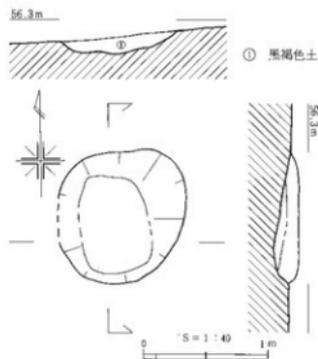
挿図141 SK-14遺構図

SK-14 (挿図141)

位置 調査地の南西、E-3グリッド西側の標高56.1m付近に位置する。本遺構の北西約2mにSK-03、東側に隣接してSK-15がある。埋土は黒褐色土の単層である。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整形を呈し、断面形は皿状となる。規模は検出面で長軸1.56m×短軸1.46m、底面までの深さは最大で0.18mを測る。

時期・性格 遺構の詳細な時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



挿図142 SK-15遺構図

SK-15 (挿図142)

位置 調査地の南西、E-3グリッド中央西寄りの標高56.2m付近に位置する。本遺構の南東側約1mにSB-02があり、西側はSK-14と隣接する。埋土は黒褐色土の単層である。

形態 平面形は検出面が不整な円形、底面が不整な隅丸方形を呈し、断面形は皿状となる。規模は検出面で長軸1.20m×短軸1.01m、底面で長軸0.82m×短軸0.56m、底面までの深さは最大で0.14mを測る。

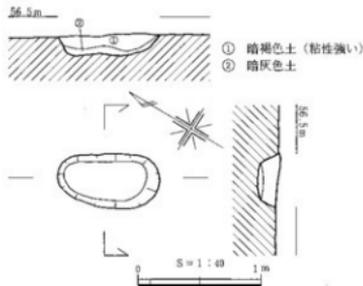
時期・性格 遺構の詳細な時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。

SK-16 (挿図143)

位置 調査地の南西、E-3グリッド北側の標高56.3mに位置する。本遺構の南側約3mにSB-02、南西側約1mにSK-15がある。埋土は2層に分層でき、暗褐色土はやや粘性が強い。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な楕円形を呈し、断面形は皿状となる。規模は検出面で長軸0.82m×短軸0.47m、底面では長軸0.67m×短軸0.31m、底面までの深さは最大で0.17mを測る。

時期・性格 遺構の詳細な時期は分からないが奈良・平安期以前であろう。性格は不明である。



挿図143 SK-16遺構図

第7節 段状遺構

SS-01 (挿図144 図版24)

位置 調査地の北東、C-2グリッド南東隅を中心とする標高57.5m付近に位置する。本遺構は、調査地の西側へ向けて地形が下がり始める地形変換点の肩部に形成されている。本遺構の北側約5mにSS-02～04が、西側約2mにSK-11が位置する。

形態 平面形は検出面・底面ともに不整な半楕円形状を呈し、断面形は緩やかな「L」字状である。検出規模は、北西-南東方向6.7m、東西2.1m、残存する部分での底面までの最人の深さは0.30mを測る。

埋土 埋土は10層に分層できた。⑥・⑦層は粘質土であるが、それ以外は砂質・砂礫土である。

時期 遺物が出土しておらず、詳細な時期決定はできないが、他の遺構同様層位関係から奈良・平安期以前の遺構であろう。

性格 底面は基本的に茶褐色砂礫土であるが、遺構の中央部分は同様の砂礫土が黒色となり固まっていた。この黒色化した部分及び周辺に火をうけた痕跡はなく、詳しくは分からない。

SS-02・03・04 (挿図145 図版24)

位置 調査地の北側、B-1グリッド南西隅を中心とする標高57.0m付近に位置する。本遺構群は、調査地の西側へ向けて地形が下がり始める地形変換点の肩部に形成されている。本遺構群の南側約5mにはSS-01がある。

埋土 検出した際に、部分的に土質が異なることが認められたため、複数の遺構が切り合っていることが想定できた。ただ土質の違いを平面的におさえることが困難であったため、ベルトを複数設定して断面観察により確認した。遺構は3つ切り合っており、SS-02は暗褐色粘質土を、SS-03は茶褐色粘質土を、SS-04はSS-02と同色の粘質土に砂礫が多量に含む土を埋土の基本とする。

SS-02

形態 平面形は検出できた範囲では不整な半楕円形であり、断面形は「L」字状となる。残存する部分での規模は北東-南西方向8.4m、東西2.0m以上、底面までの深さは最大で0.68mを測る。

性格 遺物がまったく出せず、形態・埋土からでは判断できない。ただ、底面はSS-01同様に部分的に黒色化して固まっていたため、これが人為的なものであるならば、SS-01と同じ性格をもつ遺構であろう。

時期 詳細な時期決定は困難だが、埋土の切り合い関係からSS-03より新しくSS-04より古い。

SS-03

形態 遺構の西側が調査地境にかかり、南側はSS-02に切られるため、検出できた範囲での平面形は検出面・底面ともに扇形に近くなる。残存する部分での規模は、北東-南西方向4.6m、東西1.4m、底面までの深さは最大で0.68mを測る。

性格 遺物がまったく出土せず、形態・埋土からでは判断できない。ただ、底面はSS-01同様に部分的に黒色化して固まっていたため、SS-01・02と同じ性格をもつ遺構と推測する。

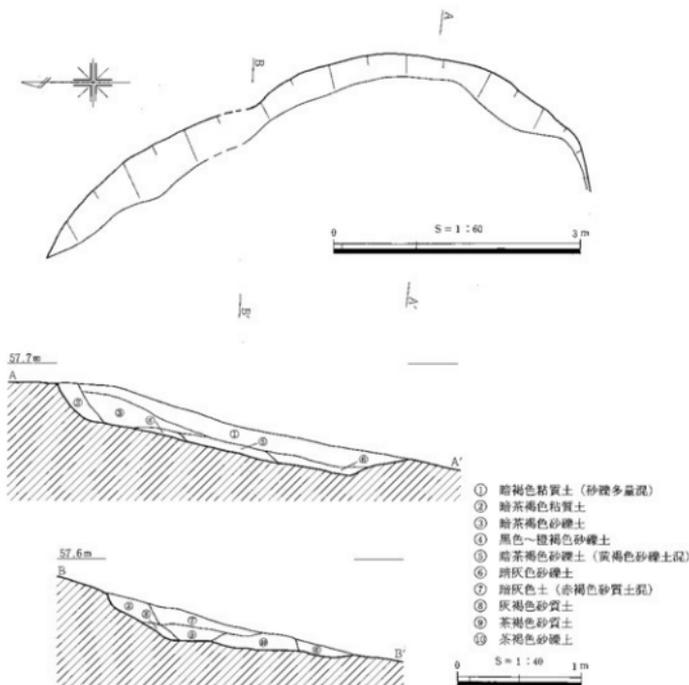
時期 詳細な時期決定は困難だが、埋上の切り合い関係からSS-02～04の中では最も古い。

SS-04

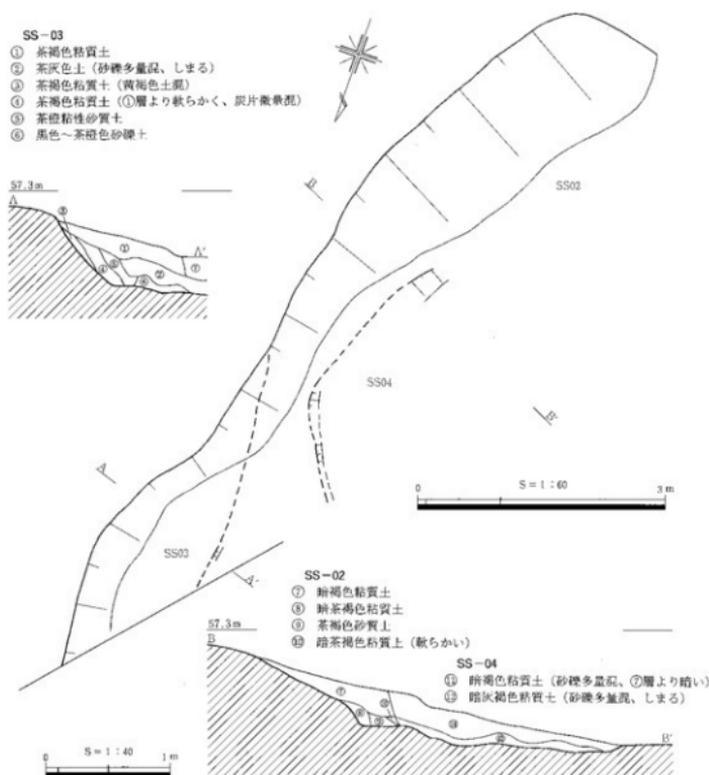
形態 遺構の存在を断面でしか確認できなかったため、全体の形状・規模が不明確である。検出できた部分から判断すると、「く」字状あるいは台形状となるか。規模は残存する部分から推測すると、南北3.5m以上、東西1.1m以上、底面までの最大の深さは0.28mを測る。

性格 遺物がまったく出土せず、形態・埋土からでは判断できない。底面もSS-02・03のように黒色化し固まった砂礫の広がり認められなかった。これはSS-04形成時にSS-02の底面を削平したためであろう。本遺構はSS-02・03とは性格が少し異なるものか。

時期 詳細な時期決定は困難だが、埋土の切り合い関係からSS-02～04の中で最も新しい。



押図144 SS-01遺構図



挿図145 SS-02・03・04遺構図

第8節 ビット

第2面では調査地内より総計27個のビットを検出した。全体的に調査地に点在しており、大きなまとまりは見られなかった。

ビットの規模は比較的大きなものが多く、最大のもので径87cmのものから、最小で径26cmを測る。概ね径30cm前後である。ビットの埋土はすべて単層で、ほとんどが暗褐色土ないし黒褐色土である。柱根をもつものはなかった。なお、詳細は挿表41のビット一覧表に記載する。

第9節 まとめ

御内谷ガシヤ遺跡では、試掘調査で多量の鉄滓が出たことから製鉄遺跡の可能性が考えられたが、関連する遺構・遺物(羽口・炉壁等)は確認できなかった。ただ、出た鉄滓の分析を行ったところ、たたら製鉄による製鉄滓という結果が出た。詳細は附論に譲るが、金属学的調査から本遺跡を含む丘陵地の何処かで製鉄工程

が行われたと想定される。先に述べた通り、鉄滓が纏まって出土したのは第1遺構面直上の明褐色粘質土層であるが、黒灰色土中にも僅かながら見られた。明褐色粘質土層より出土した遺物は律令期の土師器・須恵器が大半を占め、明らかに中世に下るものは無かった。試掘調査でも同様の結果となっている。よって、製錬工程が行われた時期は概ね律令期前後で、操業期間も長期にわたるものではなかろう。当該期の遺構としてはSB-01が挙げられる。SB-01が製鉄に関係する建物であったかどうか定かでないが、他の遺構群との関係から居住空間とは考えられず、何らかの役割を果たしていた施設であったと推測する。

中国地方の山間部は真砂系砂鉄の採れる地帯で、古来より盛んに製鉄が行われていた。本遺跡を含む御内谷遺跡群の周辺でもたたら跡が多数確認されている⁽²⁾。今回の調査で、金田堂・脇遺跡・御内谷第2遺跡・御内谷下々市遺跡・御内谷谷城遺跡でも鉄滓が出土しており、そのうち御内谷谷城遺跡以外の3遺跡で出土した鉄滓の一部について科学分析を行ったところ、御内谷下々市遺跡の鉄滓は鍛造滓、その他は製錬滓であった。この結果から本遺跡群の位置する丘陵帯で製錬から鍛冶という鉄器生産の一連の過程を採業していたことは想像に難くない。しかし炉跡が確認されていないため、生産規模、操業期間等その様相は明らかでなく、多くの問題が残されている。これらについては今後の調査を待って再検討する必要がある。

註

(1)『1996年度 町内遺跡発掘調査報告書』 会見町教育委員会 1997年

(2)『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』 鳥取県教育委員会 1984年

分布調査で確認されているたたら跡で、会見町に所在するものに関しては挿図3周辺遺跡分布図に位置を載せているので参照されたい。

挿表37 掘立柱建物跡一覧表

遺構名 SB	挿図 番号	図版 番号	グリッド	桁×梁 間	規模(桁) m		規模(梁) m		遺物	時期	備考
01	121・122	23・25	E-2・3	3×1	6.0	5.9	3.8	3.8	P5内より土師器等	奈良～平安期	
02	127	24	E-3	3×2	4.1	3.9	3.1	3.0		奈良～平安期以前	

挿表38 土坑一覧表

遺構名 SK	挿図 番号	図版 番号	グリッド	平面形	規模(長軸×短軸) cm		深さ cm	長軸方向	遺物	時期	備考
					検出面	底面					
01	128		E・F-2	不整な半楕円形	235×110	118×46	43	N-54°-E		平安期以前?	残存値
02	129	24	E-3	いびつな楕円形	218×124	42×15	42	N-10°-W		平安期以降?	
03	130		E-3・4	不整な隅丸長方形	175×111	42×24	27	N-34°-E		平安期以降?	
04	131	24	E-2・3	不整な楕円形	130×90	80×58	72	N-50°-W		縄文時代後・晩期頃?	落し穴
05	132		E-2	いびつな隅丸長方形	103×70	64×44	28	N-13°-E		平安期以前?	
06	133		E-2	不整な隅丸長方形	160×88	127×71	24	N-15°-E	須恵器	平安期以前?	
07	134		D-3	不整な楕円形	87×54	68×39	11	N-8°-W	埴底部	平安期以前?	
08	135		D-2	いびつな隅丸長方形	216×142	34×26	66	N-40°-E		平安期以前?	
09	136	24	C・D-3	隅丸長方形	114×78	81×51	113	N-8°-W		縄文時代後・晩期頃?	落し穴
10	137		D-3	不整な楕円形	293×87	223×57	41	N-63°-E		平安期以前?	
11	138		C-2	いびつな楕円形	131×130	40×38	40	N-9°-W		平安期以前?	
12	139		C-2	不整な隅丸長方形	214×114	169×44	39	N-37°-E		平安期以降?	
13	140		C-2	不整な楕円形	146×62	80×50	29	N-18°-E		平安期以前?	残存値
14	141		E-3	不整形	156×146	138×106	18	N-9°-W		平安期以前?	
15	142		E-3	不整な円形	120×101	82×56	14	N-10°-W		平安期以前?	
16	143		E-3	不整な楕円形	82×47	67×31	17	N-32°-W		平安期以前?	

挿表39 溝状遺構一覧表

遺構名 S D	挿図番号	図版番号	規模 (m) 全長×幅×深さ	遺物	時期	備考
0 1	123	23	36 × 0.75 ~ 2.25 ~ 0.11	須磨器	P25・26より新しい	
0 2	123	23	31.3 × 0.53 ~ 0.90 ~ 0.28	須磨器・磁器	近世後半以降	
0 3	124	23	12.5 × 0.30 ~ 0.75 ~ 0.39	鉄滓		

挿表40 段状遺構一覧表

遺構名 S S	挿図番号	図版番号	規模 (m) 全長×幅×高さ	遺物	時期	備考
0 1	144	24	6.7 × 2.1 ~ 0.30		奈良・平安期以前	
0 2	145	24	8.4 × 2.0以上 ~ 0.68		SS-03より新しくSS-04より古い	SS-01と同じ性格か
0 3	145	24	4.6 × 1.4 ~ 0.68		SS-02・04より古い	SS-01・02と同じ性格か
0 4	145	24	3.5以上 × 1.1以上 ~ 0.28		SS-02・03より新しい	SS-02・03と性格が異なるか

挿表41 ビット一覧表

ビット 番号	グリッド	規模 (長軸×短軸×深さ) cm	層	土 色・土 質	柱根 有無	遺物	備考
第1面							
1	F-3	28 × 26 ~ 31	1	明褐色粘質土	×		
2	F-3	30 × 27 ~ 31	1	明褐色粘質土	×		
3	F-3	20 × 20 ~ 20	1	明褐色粘質土	×		
4	E-3	30 × 27 ~ 34	1	明褐色粘質土	×		
5	E-3	31 × 28 ~ 19	2	①明褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土	×		
6	F-2・3	40 × 36 ~ 42	2	①明褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土	×		
7	D-2	17 × 17 ~ 9	1	茶褐色粘質土(黄褐色土混)	×		
8	C-2	16 × 12 ~ 5	1	茶褐色粘質土(黄褐色土混)	×		
9	C-2	26 × 24 ~ 22	1	明褐色粘質土	×		
10	C-2	24 × 24 ~ 15	2	①明褐色粘質土 ②茶褐色粘質土	×		
11	D-2	27 × 24 ~ 22	1	茶褐色粘質土	×		
12	D-2	17 × 15 ~ 10	1	茶褐色粘質土	×		
13	D-2	21 × 20 ~ 23	1	明褐色粘質土(茶褐色粘質土)	×		
14	D-2	28 × 20 ~ 18	1	明褐色粘質土	×		
15	D-2	24 × 23 ~ 8	1	赤褐色粘質土	×		
16	C-2	31 × 24 ~ 8	1	赤褐色粘質土	×		
17	C-2	19 × 17 ~ 9	1	茶褐色粘質土	×		
18	D-1	24 × 22 ~ 8	1	暗褐色粘質土	×		
19	D-1	24 × 24 ~ 7	1	暗褐色粘質土	×		
20	D-1	19 × 18 ~ 8	1	暗褐色粘質土	×		
21	C-1	28 × 26 ~ 12	1	暗褐色粘質土(明褐色粘質土混)	×		
22	B-1	21 × 19 ~ 9	1	暗褐色粘質土	×		
23	B-1	60 × 35 ~ 15	1	暗褐色粘質土	×		
24	E-2	58 × 51 ~ 38	1	明褐色粘質土(暗茶褐色粘質土少量混)	×		
25	E-2	54 × 40 ~ 46	1	明褐色粘質土(暗茶褐色粘質土少量混)	×		
26	E-2	40 × 38 ~ 29	1	暗茶褐色粘質土(明褐色粘質土少量混)	×		
27	E-2	38 × 25 ~ 27	1	暗茶褐色粘質土	×		
28	E-2	28 × 25 ~ 30	1	暗茶褐色粘質土(明褐色粘質土少量混)	×		
29	E-2	22 × 19 ~ 5	1	茶褐色粘質土	×		
30	E-2	45 × 36 ~ 9	1	茶褐色粘質土	×		
第2面							
31	E-4	36 × 33 ~ 22	1	黒褐色土	×		
32	F-3	60 × 39 ~ 52	1	黒褐色土	×		
33	E-4	26 × 21 ~ 11	1	黒褐色土	×		
34	E-3	27 × 26 ~ 10	1	黒褐色土	×		
35	E-3	28 × 24 ~ 13	1	黒褐色土	×		

ピット 番号	グリッド	規模(長軸×短軸-深さ) cm	層	土 色・土 質	柱根 有無	遺 物	備 考
36	E-3	29×25-19	1	黒褐色土	×		
37	E-3	79×70-18	1	黒褐色土	×		
38	E-3	44×31-16	1	暗褐色土	×		
39	F-3	87×77-28	1	黒褐色土	×		
40	E-3	44×39-20	1	暗褐色土	×		
41	E-3	29×28-9	1	暗褐色土	×		
42	E-3	66×50-20	1	暗褐色土	×		
43	D-E-3	40×38-8	1	暗褐色土	×		
44	D-3	31×28-12	1	暗褐色土	×		
45	D-3	62×56-21	1	暗褐色土	×		
46	D-3	66×54-28	1	暗褐色土	×		
47	D-3	45×37-15	1	暗褐色土	×		
48	D-3	41×33-24	1	暗褐色土	×		
49	D-2	40×35-13	1	暗褐色土	×		
50	D-2・3	69×60-10	1	暗褐色土(褐色土混)	×		
51	D-2	46×42-21	1	暗茶褐色土	×		
52	D-2	30×30-16	1	暗褐色土	×		
53	D-2	31×30-15	1	暗褐色土	×		
54	D-2	29×27-21	1	暗褐色土	×		
55	D-2	32×32-17	1	暗褐色土	×		
56	D-2	36×29-15	1	暗褐色土	×		
57	D-1・2	59×46-26	1	暗褐色土(茶褐色土混)	×		

押表42 土器観察表

S B - 0 1

遺物番号 検出層 図面番号	種類 名称	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 側	内 側	胎 土 土 質	色調 外面 内面	備 考
Po 1 125 25	土管部 筒	① 径 25.8 ② △ 4.5	「く」の字に両面する頸部から外側に立ち上り口縁部、踵部は丸くおさまる。	ココナデ	口縁部粗いココナデ 頸部左方向のヘラケズリ	密 良好	淡茶褐色 淡茶褐色	山崎-21

遺構外

遺物番号 検出層 図面番号	種類 名称	法量 (cm)	形 態 上 の 特 徴	外 側	内 側	胎 土 土 質	色調 外面 内面	備 考
Po 2 125 25	弥生土器 甕	① 径 16.0 ② △ 4.9	外反頸部に立ち上る複合口縁。胴部は片方へつまみ出すようにおさまる。下部の頸は水平方向に突出するがあまり。	ココナデ	口縁部ココナデ 胴部左方向のヘラケズリ	密。 良好	淡茶褐色 淡黄褐色	山崎-13
Po 3 125 25	弥生土器 甕	① 径 13.8 ② △ 4.3	「く」字に両面する頸部から外側に立ち上り口縁部、踵部は丸くおさまる。F部は上方におぼろな面をもつておさまる。下部の頸は斜め下方に鋭く突出する。	ココナデ	口縁部～胴部ココナデ 以下右方向のヘラケズリ	密。 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-5
Po 4 125 25	弥生土器 甕	① 径 14.9 ② △ 3.3	外反しなから立ち上る複合口縁。胴部は丸くおさまる。F部は斜め下方に鋭く突出する。	ココナデ	ココナデ	密 良好	淡茶褐色 淡茶褐色	小塚-3
Po 5 125 25	弥生土器 甕	① 径 19.1 ② △ 4.2	外反頸部に際いて立ち上る複合口縁部受部。	ココナデ	上半部方向、下半部方向のヘラミダシ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	外野塚付着 山崎-15
Po 6 125 25	弥生土器 甕	① 径 9.8 ② △ 2.6	立ち上がりは内側に、胴部は丸くおさまる。F部は丸くおさまる。F部は丸くおさまる。	同製ナデ	同製ナデ	密 良好	青灰色 青灰色	山崎-16
Po 7 125 25	深瀬部 杯	① 径 11.2 ② 3.7 ③ 径 8.4	外反しなから立ち上り、口縁部は内側に肥厚して丸くおさまる。	底面同製赤切り 他は同製ナデ	同製ナデ	密 良好	暗灰色 暗灰色	小塚-2
Po 8 125 25	深瀬部 杯	① 径 11.8 ② 4.5 ③ 径 8.5	外反しなから立ち上り、口縁部は内側に中や軽厚して丸くおさまる。	底面同製赤切り 他は同製ナデ	同製ナデ	密 良好	青灰色 青灰色	小塚-5
Po 9 125 25	弥生土器 甕	① 径 1.4 ② 径 7.6	底部。	底面同製赤切り 他は同製ナデ	同製ナデ	密 良好	青灰色 青灰色	小塚-1

遺物番号 採回番号 図面番号	複製 器種	寸法 (cm)	形態上の特徴	表面 装 飾 内面		胎 土 成	色調 外面 内面	備 考
Pa10 125 25	深底器 高台付杯	① △ 2.0 ② 底 12.1	直立する短い高台の付く杯。	回転ナデ	回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	小塚-4
Pa11 125 25	深底器 盃	① 底 21.3 ② △ 2.0	底部がやや外傾して立ち上がる浅い盃。	底面反時計回りの回転 ヘラケズリ 他は回転ナデ	回転ナデ	密 良好	灰白色 灰白色	小塚-6
Pa12 125 25	深底器 口縁部	① 底 29.2 ② △ 6.3	逆「ハ」の字状に大きく開く口縁。口縁直下に2本の浅溝。その下に底状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	山崎-12
Pa13 125 25	深底器 長頸壺	① 底 7.9 ② △ 10.5	口縁一部が底のやや外反しながら上方へ伸びる。胴部上方2条の浅溝。中央に3本の凹線を施す。凹線のうち上方の1条は全周しない。	回転ナデ	回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	山崎-20
Pa14 125 25	深底器 短頸壺	① 底 8.0 ② △ 3.0	口縁部は短く直立し、頸は狭る。儀装の跡部となるものであろう。	回転ナデ	回転ナデ	密 良好	灰褐色 灰褐色	山崎-18
Pa15 125 25	深底器 胴部	② △ 8.2	底部はふくらみをもちながら立ち上がる。底部及び上半に欠けが、底部には「ハ」の字状に高台が付く。	回転ナデ	回転ナデ	密 良好	青灰色 青灰色	山崎-19
Pa16 125 25	十間器 皿	① 底 11.4 ② 2.5 ③ 底 8.7	外傾し、直線的に立ち上がる短い胴部をもつ小皿の品。	ナデ	ナデ	密 良好	朝鮮黄褐色 朝鮮黄褐色	山崎-1
Pa17 125 25	十間器 皿	① 底 14.1 ② △ 2.5 ③ 底 11.8	外傾して立ち上がる短い胴部をもち、口縁部は外方へつまみ出すようにしておさめる。	ナデ	ナデ	密 良好	赤褐色 赤褐色	内外面赤彩 山崎-14
Pa18 125 25	十間器 皿	② △ 1.5 ③ 底 14.4	胴部からの立ち上がりは外反気味。	ナデ	ナデ	密 良好	黄褐色 黄褐色	内外面赤彩 山崎-4
Pa19 125 25	十間器 壺	① 底 18.4 ② △ 3.7	外反して開く短い口縁。	ナデ	口縁部ナデ 胴部左方向のヘラケズリ	密。砂粒を多く含む 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-2
Pa20 125 25	十間器 壺	① 底 24.0 ② △ 3.5	外反して開く短い口縁。	ナデ	口縁部ナデ 胴部左方向のヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-9
Pa21 125 25	十間器 壺	① 底 28.2 ② △ 4.2	大きく外反して開く短い口縁。	口縁部ナデ 胴部以下縦方向のヘラケズリ	口縁部ナデ 胴部上面め上方向のヘラケズリ	密。砂粒を多く含む 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-6
Pa22 125 25	土師器 壺	① 底 27.1 ② △ 4.6	外反して開く短い口縁。	ナデ	口縁部ナデ 胴部左斜め上方向のヘラケズリ	密。砂粒を含む 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-7
Pa23 125 25	土師器 壺	① 底 29.1 ② △ 3.9	外反して開く短い口縁。	ナデ	口縁部ナデ 胴部右方向のヘラケズリ	密 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-8
Pa24 125 25	土師器 壺	① 底 29.8 ② △ 4.2	外反して開く短い口縁。胴部外側に肥厚し、丸くおさまられる。	ナデ	口縁部ナデ 胴部左方向のヘラケズリ	密。砂粒を含む 良好	黄褐色 黄褐色	山崎-10
Pa25 125 25	土師器 壺	① 底 24.1 ② △ 4.8	外反して開く短い口縁。	ナデ	口縁部ナデ 胴部左斜め上方向のヘラケズリ	密。砂粒を含む 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-3
Pa26 125 25	土師器 壺	① 底 29.9 ② △ 10.0	胴部はほとんど直りをもち直線的。口縁部は外反して開き、短い。底部にわずかに面をもつ。	口縁部ナデ 以下縦方向のヘラケズリ	口縁部～胴部ナデ 以下左方向のヘラケズリ	密。1mm内外の砂粒を含む 良好	淡黄褐色 淡黄褐色	山崎-11
Pa27 125 25	支脚	② △ 4.2	胴底厚は厚く底状。	ナデ 胴部付直線押さ丸 胴方向の工具痕が認められるが、胴部は不明	ナデ、胴部と丸	密。砂粒を多く含む 良好	淡黄褐色 黒褐色	山崎-17

第11章 考察

金田堂ノ脇遺跡 SX-01 をめぐる諸問題

金田堂ノ脇遺跡の調査で、副葬品を持ち、特異な墓壇内施設をもつ中世墓 SX-01 が検出された。第3章第3節でも述べたが、ここでは調査成果を踏まえて若干の問題点について触れ、一応のまとめとしたい。

(1) 埋葬方法

SX-01 は土塚墓で、木質の付着した鉄釘が出土したことから埋葬主体は木棺であったと思われる。棺の平面形はおおよそ一辺60cm前後の正方形で、底面から最も高い位置にある鉄釘 F5 から棺高は60cm以上あったと推測する。埋葬体位は、人骨が残っていなかったため棺の規模・形態から想像する他ないが、座位屈葬ではなからうか。平面規模に比べ高さのある棺であったとすれば、遺骸は座位屈葬で納められたと考えられる。頭(顔)は五輪塔の納められていない西を向いている可能性が高い。同じ方向には小松谷川対岸の丘陵上に明徳の頃(1390年頃)の開基と伝えられる雲光寺がある。五輪塔は意図的に西側に配されなかったのであり、西方浄土とともに雲光寺の存在を強く意識して造墓したと思われる。

SX-01 では棺の四隅に当る部分から環状の鉄製品 F1~4 が出土した。X線写真を見ると F1~4 には径2.5cm前後の小金具が付けられており、この部分にのみ木質が付着していた。よって小金具により棺に固定されていたと推察する。F1~4 は径10cm前後で、その形態から錫杖の頭に掛けてある銀を想起させるが、棺の一部(把手?)として使用された例を確認することができなかった。SX-01 の棺が日常木製家具の類を転用したのであればこのような把手をもつものもあろうが、出土した鉄製品の種類から推してもその可能性は低い。出土した鉄釘の総数は17本(内、実測可能なもの10本)と多くなく、棺の四隅を打ちつけて固定するのに使われた程度と推測する。SX-01 に使用された木棺は転用棺ではなく、造墓の際に作られた専用棺であろう。

(2) 葬送儀礼

SX-01 から出土した土器は、古瀬戸筒形香炉1点(Po6)、龍泉窯系青磁碗1点(Po7)、土師質土器皿4点(Po8~11)である。出土位置は、Po6・7が五輪塔より内側、Po8・9が五輪塔より外側の墓壇底面、Po10は埋土上位、Po11はほぼ検出面である(押図19参照)。Po6・7については当時貴重品であったろうし、出土位置からも棺に遺体とともに納められた副葬品と考えられる。Po8・9は墓壇の西壁で出土したが、Po8は内面を西に向けて倒立した様な状態であり、Po9も片側が浮いていることから、棺・五輪塔を墓壇内に据えた後にその隙間に入れられたことが分かる。同じ土師質土器皿でも Po10・11は埋土上位からの出土であり、墓壇を埋める最終段階か盛土の段階で入れられたものであろう。よって、SX-01 に係る葬送儀礼について、次のような流れが想定できる。

- ①墓壇を空ける。
- ②墓壇中央やや西寄りに棺を据える。
- ③棺と墓壇の隙間に、西側を除いて五輪塔を上と一緒に裏込めする。
- ④土師質土器 Po8・9 を棺(五輪塔)と墓壇の隙間、つまり墓壇西側に供献する。
- ⑤墓壇全体に土をかぶせて埋める。墓壇上に盛土する。途中の段階で墓壇を埋める(盛土する)作業を二度中斷し、Po10・11をそれぞれ供献する。

Po8 は口径12.7cm、器高3.3cm、底径4.6cm、Po9 は口径12.8cm、器高3.4cm、底径4.6cm で、共に色調は灰褐色、底部静止糸切りである。法量・調整ともに同じで、規格化された製品という印象を受ける。葬送儀礼に使用するためだけに製作されたものであろう。両者とも口縁の一部を打ち欠いている。埋葬に伴う儀礼に使用

された器は壊れていると考えられたため、持ち帰らずにその場で廃棄されたという民俗例がある⁽³⁾。その際、供献する土器を打ち欠く(壊す・傷つける)という行為は現世での再使用を不能ならしめ、冥界に帰した死者等との遮断をはかるという呪術的意図が込められていたのであろう⁽⁴⁾。ただ、土師質土器皿を完形品のまま供献(副葬)する事例も多く、一概にそうとは言えない。SX-01でも近似する法量・形態をもつP010・11が全く異なる供献方法を採られている。両者はほぼ同じ高さで出土しているため、覆土及び蓋土の崩落を考慮しても使用位置に差は無かったと考える。とすれば、この差異は被葬者の性格(階層・死因)に起因するものか。

(3) SX-01に使用された五輪塔について

SX-01は五輪塔を棺の裏込め石として使用している。棺の周囲に自然石(礫)を石櫛状に配する例は幾つかあるが、それが純粋に五輪塔のみで構成される例を確認できなかった。SX-01は明らかに五輪塔によって内部構造を築くことを意識しており、その背景に呪術的意図を感じざるをえない。棺の上に五輪塔(の一部)を詰石するという行為に関しては死者の霊を封じ込めるという解釈を与えることも可能と思われるが、SX-01の場合はどうであろうか。先にも述べたが、五輪塔は棺の西側のみ配されていない。本来供養塔として造られた五輪塔の性格から考えれば、その霊力によって死者の西方浄土への旅立ちを助けることを願った結果がこのような内部構造を形成する要因となったのではなかろうか。いずれにしても推測の域を超えない。使用された五輪塔は、S8・9を除くほとんどが一部を欠損しており、SX-01が形成される前に製作されたものであろう。副葬された香炉・青磁碗は故人の生前の愛用品と考えられ、使用年代幅を考慮しても15世紀半ばを大きく下ることはなく、SX-01に使用された五輪塔は室町時代前期以前のものであろう。

(4) 周辺の状況から見るSX-01

SX-01の約1.5m西にSK-03がある。位置・形態・埋土から、SX-01とはほぼ同時期の墓と想定した。遺骸を棺に納めたかどうか明らかでないが、墓壇の規模・形態から埋葬体位は伸身葬で、被葬者は小児と考えられる。SX-01とSK-03を囲むように同様の埋土をもつピットが位置することから被葬者は血縁的な繋がりがあり、家族墓的な様相を呈すと思われる。他に中世墓の可能性が考えられるものとしてSK-07が挙げられるが、時期判定の資料に乏しく、SX-01との関連性は窺い知ることはできない。

SX-01と同時期に近い時期とされる中世墓が鳥取県内でも幾つか確認されている。代表的なものは、湖山池周辺の丘陵上に展開される墳墓群(桂見墳墓群・西桂見中世墓群・布勢鶴崎奥墳墓群)である。15~16世紀に形成されたと考えられており、外方施設の有無・副葬品の有無等に若干の階層差が認められるが傑出したものは無く、大きく見れば地縁的な繋がりによる共同墓地と捉えられる。これに比べSX-01は周囲の状況からみて単独で築かれた可能性が高く、副葬品・墓壇内施設の面で全く異なる様相を示す。それが単なる時期差あるいは地域ごとの葬送習俗の差であるのか、それとも階層差であるのか、現時点では明確に難しい。ただSX-01が単独墓であるなら、造墓集団の意思とは別に、墓所の選地も含めて被葬者の遺志が強く反映されていると推測する。類例の増加を待って改めて検討されるべき問題である。

(5) SX-01の被葬者

会見町には南北朝~戦国期にかけての雲伯国境をめぐる戦略拠点が築かれた。金田堂/脇遺跡の北約200mには南北朝期の城と伝えられる小松城址が位置する。小松城の北側には、天王原遺跡が位置し、13~14世紀と考えられる掘立柱建物跡(大塹で底付きのものを含む)が確認されており、その関連性が注目される⁽⁵⁾。さらに北側の浅井土居敷遺跡でも大型の掘立柱建物跡が検出され、時期は出土遺物から15世紀頃であろう⁽⁶⁾。本遺跡を含む周辺地域には、戦略拠点を中心として土豪クラスの居館跡が点在している。

SX-01は副葬品に古瀬戸筒形香炉と中国製青磁碗をもち、供献土器として土師質土器皿を計4枚使用する。副葬品の種類、供献土器の数と出土状況から想定される葬送儀礼の方法から見れば、厚葬の部類に入ることは問

違いなかろう。貿易陶磁は村落に一定のブランド的価値をもって流通したであろうし、香炉もその性格から故人の日常生活の愛用品となりやすい製品と考える。当時両者を受用品として持ち得たのは、一般庶民より階層的に上位に位置する人物であろう。『古今著聞集』には法然上人の死に関する記述が見られ、その墓は「上人の住所のひんがしの岸のうへに、西はれたる勝地」に営まれ、「この地に廟堂をたて、石の唐櫃をかまへておさめおきたてまつる」とある⁽²⁾。SX-01が立地する場所は、西に向けて開けた場所であると同時に、西方に位置する雲光寺を視野に入れることができる。SX-01の中から鑲に似る環状鉄製品が出土し、遺跡名や小字名に「堂」とあるのは示唆的である。類似との比較・文献資料の検討等残された課題は多いが、敢えて被葬者について述べれば、土豪クラスの人物か僧侶であろう。

註

- (1)『会見町誌 続編』 会見町誌続編編さん企画委員会 1995
- (2)菅波正人「遺物からみた葬送儀礼について」『瑠璃光寺跡遺跡』 山口市教育委員会 1988
- (3)国分直「吉母浜の中世墓制一特にその葬俗をめぐって」『吉母浜遺跡』 下関市教育委員会 1985
- (4)五輪塔ではなく、自然石を使って墓境内に石椁状(石室状)の施設をもつ例は知られている。鳥取県内では倉吉市福本家ノ上古墓1号古墓、県外では静岡県磐田市一の谷中世墳墓群遺跡748号墓・862号墓等である。
- (5)小田村宏「石塔に関する問題」『瑠璃光寺跡遺跡』 山口市教育委員会 1988
- (6)牧本哲雄「中世墓について」『西桂見遺跡一鷺谷口地区・鷺谷奥地区・堤谷地区一 倉見古墳群』 財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- (7)前掲(1)書
- (8)『天王原遺跡発掘調査報告書』 会見町教育委員会 1993
- (9)岡田善治「会見町・浅井土居敷遺跡の陶磁器」『松江考古 第8号』 松江考古学談話会 1992
- (10)橋田正徳「中世前期における土葬墓の出土供養具の様相」『貿易陶磁研究No.13』 日本貿易陶磁研究会 1993
- (11)水藤真『中世の葬送・墓制一石塔を造立すること一』 吉川弘文館 1991

参考文献

- 『一の谷中世墳墓群遺跡』 磐田市教育委員会 1993
『帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 中世社会と墳墓』 名著出版 1993